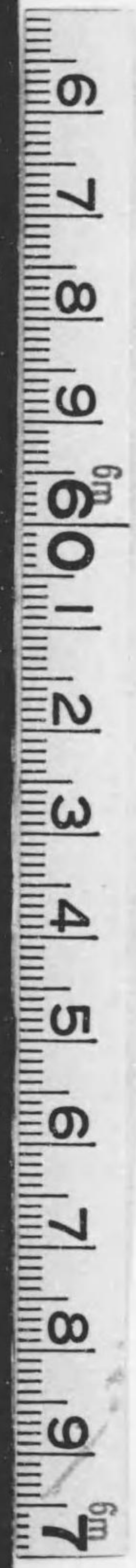


183. 3-Y27ウ



1200500727931

1833  
27



始



183.3  
Y27

山川智應講述



法華

經十講

中卷



信人社發行

# 法華經十講中卷目次

## 第六講 提婆達多品・勸持品・安樂

### 行品・從地涌出品

#### 提婆達多品

- 略文段……………(三九)
- 一、提婆の過去を開して成佛を明す……………(三二)
- 1 佛の因行、檀王の千歳給仕、提婆の成佛を明す……………(三五)
- 2 その重頌……………(三九)
- 3 古今を結合して師弟の功德満足を明す……………(三〇)
- イ、古今を結合す、ロ、弟子の圓滿果圓を明して達多の弘法の益に因ると結す、ハ、弘法の師の果成と化度・滅後利益等の授記を敘す
- 4 惡逆の成佛に就き疑を斷ちて信を勵

目次

#### む……………(三六)

#### 二、文殊の弘經、龍女の成佛を明す……………(三七)

5 文殊・智積の問答、智積の讚歎……………(三七)

6 文殊の弘經利益、智積の疑問、龍女の領解……………(四〇)

7 舍利弗更に疑ひ、龍女現證を以て之を通ず……………(四六)

8 時衆の得益、人天の歡喜……………(四九)

9 小權の疑散じて點して深信を領す……………(四九)

#### 勸持品

#### 略文段……………(三五)

#### 一、四類の發誓……………(三四)

1 二萬の菩薩此の土の弘經を請ひ、五百羅漢八千の聲聞他土の弘經を請す、2 橋曇彌の授記、3 耶輸多羅の授記、4 比丘尼の領解と發誓

二、八十萬億那由佗の發誓……………(三五)

5 佛の目視、八十萬億の發誓、6 菩薩偈を以て誓旨を衍述す……ア、忍鎧をもつて弘經す (A、總して時を擧ぐ、B 所忍の境を明す、C 我等敬佛の下は着衣弘經の意を明す) イ、諸聚落城邑の下は慈室弘經を明す、ウ、我是世尊使の下は空座弘經、エ、我於世尊前の下は總結す

要文……………(三六)

後惡世衆生、善根轉少、多増上慢、貪利供養、遠離解脫、難可化度……是娑婆國中、人多弊惡、懷増上慢、功德淺薄、瞋濁詭曲、心不實故……濁劫惡世中、多有諸恐怖、惡鬼入其身、罵詈毀辱我、我等敬信佛、當著忍辱鎧……爲說是經故、忍此諸難事、我不愛身命、但惜無上道

安樂行品

略文段……………(三七)

一、文殊、初心の爲めに弘經の方法

を請ふ……………(三八)

二、佛、四安樂行の第一身安樂行を

説く……………(三三)

1 行處を説く、2 親近處を説く (い、十惱亂を離る、戒なり、ろ、常に作すべきことを明すは、定なり、近住すべき觀慧を明すは、慧なり)

三、偈を以て重説す……………(三四)

1 重説(略)、2 身安樂行者の不怯弱の説法を明す (い、標、ろ、釋、は、結)

四、第二口安樂行を説く、止勤の二

法あり……………(三八)

1 止行 (い、他の人法の過を説かざれ、ろ、諸餘の法師を輕慢せざれ、は、他人の好惡長短を説かざれ、に、怨嫌の心を生さざれ) 2 作行、但だ大乘を以て答へよ

五、偈を以て重説す……………(四二)

1 重説 (い、止行、ろ、作行、所作の觀行)、2 口安樂行者の弘經の無難と功德 (い、行成を票す、ろ、大難なきを明す、は、行成を明す、に、功德を明す)

六、第三意安樂行を説くに止作の二

を明す……………(四四)

1 止行 (い、不嫉妬、ろ、不輕罵、は、不惱亂、に、不評議) 2 作行 (い、大悲の心を起せば嫉妬なけん、ろ、慈父の想を起せば輕罵なけん、は、大師の想を起せば惱亂なけん、に、平等に法を説けば評議なけん) 3 止作の行を結成す (い、自意に惡を止む故に他より惡加はらず、ろ、此の安樂の觀行に住せば勝聽衆を得ん)

七、偈を以て重説す……………(四〇)

八、第四誓願安樂行を説く、誓願境

と由と立との三あり……………(四二)

1 誓願の境を出す (い、慈誓の境、在家出家に互る、ろ、悲誓の境、此の道を得ざる流轉の一切に被る) 2 誓願を起す來由を明す (い、慈誓を起す由を明す、ろ、悲誓を起す由を明す) 3 正しく誓願を立つるを明す、4 誓願安樂を結成す (い、弘經に過失なきを明す、ろ、慈悲成就を明す、は、慈悲誓願の成就を釋す)

九、四行成就の功德大なるを明すに

經の妙を以て歎す……………(四五)

1 法説もて此の經の聞き難きを歎す、2 轉輪聖王は髻中明珠を與へざる譬を開す、3 譬を法に合して如來法華經を説かざるを明す、4 輪王大功ある者には明珠を與ふ譬を開く、5 譬を法に合して如來法華經を説くを明す

十、偈を以て重説す……………(四八)

1 重説(略)、2 行成功値の相を結ぶ (い、四法に住すべきを結勸す、ろ、三障轉じて清淨となる) 3 安樂行の功德成就を總結す

從地涌出品

略文段……………(四八)

本門と迹門……………(四六)

久と近(無始と有始)……一と多(根本と枝葉)……顯と拂(眞實と方便)……實相と非實相……無漏實相と有漏實相

來意……………(四三)

寶塔品に於ける多寶と分身……滅後における

付囑有在……付囑における六難九易……法師品に於ける難信難解……經體としての況滅度後……涌出と疑問

〔以下本門序分、集衆序〕

一、他方迹化を止めて本化を召す……(四六)

1 他方弘を請ふ、2 如來許したまはず、3 止善男子の前三後三の六釋

二、下方本化菩薩の涌出……(四九)

1 下方の涌出を敍す、2 菩薩の真相を敍す、3 その住處を敍す、4 佛命を聞くを敍す、5 眷屬多きを敍す

三、地涌の大衆三佛を問訊す……(五一)

1 三佛に供養す、2 問訊の詞を陳ぶ

四、如來は安樂なりと答ふ……(四六)

1 安來なりと答ふ、2 度け易きを答ふ

五、隨喜と述歎……(四七)

1 菩薩偈頌もて隨喜し、2 如來述歎したまふ〔以下本門序分、疑問序〕

六、此土迹菩薩の疑念請答……(四八)

1 諸菩薩の疑念、2 偈を以て正しく問ふ

七、他土の菩薩の疑念請答……(四三)

1 他方菩薩其の佛に問ふ、2 他方の佛、釋尊の答を聞けと答ふ

〔以下本門正宗分、誠許〕

八、如來誠めて答を許したまふ……(四四)

1 先づ誠しめたまふ、2 答を許したまふ

九、偈頌もて重ねて誠許す……(四五)

1 先づ誠むるを頌す、2 智慧の果を頌す、3 三世の化を頌す

〔以下本門正說分、略開近顯遠〕

十、略して開近顯遠す……(四七)

1 師弟を答へたまふ、2 處る處を答へたまふ、3 師弟を釋したまふ、4 處る所を釋したまふ

十一、重ねて偈頌もて開顯す……(四七)

1 師弟を答ふ、2 處る所を答ふ、3 師弟を釋す、4 處る所を釋す

十二、疑に因りて更に答を請ふ……(四七)

1 疑ふ(動執生疑)、2 答を請ふ

十三、重ねて偈頌を以て答を請ふ……(四七)

1 怯說を頌す、2 譬說を頌す

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

如來壽量品 總論

略文段……(四八三)

別頭佛教の根本本典……(四八六)

天台大師の宣言……(四八八)

傳教大師の宣言……(四九一)

日蓮聖人の宣言……(四九一)

佛教思想史上の回顧……(四九四)

原始佛教……發展佛教……支那佛教……日本佛教

日蓮聖人の出現と別頭佛教の止揚……(五三)

總結……印度に於ける壽量中心思想……支那に於ける壽量中心思想……日本に於ける壽量中心思想

如來壽量品

略文段……(五三)

七、他土の菩薩の疑念請答……(四三)

1 他方菩薩其の佛に問ふ、2 他方の佛、釋尊の答を聞けと答ふ

〔以下本門正宗分、誠許〕

八、如來誠めて答を許したまふ……(四四)

1 先づ誠しめたまふ、2 答を許したまふ

九、偈頌もて重ねて誠許す……(四五)

1 先づ誠むるを頌す、2 智慧の果を頌す、3 三世の化を頌す

〔以下本門正說分、略開近顯遠〕

十、略して開近顯遠す……(四七)

1 師弟を答へたまふ、2 處る處を答へたまふ、3 師弟を釋したまふ、4 處る所を釋したまふ

十一、重ねて偈頌もて開顯す……(四七)

1 師弟を答ふ、2 處る所を答ふ、3 師弟を釋す、4 處る所を釋す

十二、疑に因りて更に答を請ふ……(四七)

1 疑ふ(動執生疑)、2 答を請ふ

十三、重ねて偈頌を以て答を請ふ……(四七)

1 怯說を頌す、2 譬說を頌す

如來秘密の三身(餘經迹門未顯の佛)……(五九)

五百塵點劫の譬(無始本佛の巧喻)……(五五)

三世形聲の兩益(六或示現)……(五六)

非生現生非滅現滅の慈悲……(五六)

父の良醫、子の諸子(失心不失心)……(五六)

是好良藥(戒定慧、滅後三時の異)……(五七)

遣使還告(二乘・菩薩・迹化・本化の異)……(五七)

一、誠信(三誠三請重請重誠)……(五六)

二、正答(長行・偈行の中、長行)……(五四)

◎法說……三世益物……總結不虛 ◎譬說……開譬……合譬

如來壽量品偈頌(自我偈)科文

略文段……(五六五)

分別功德品

略文段……(五九五)

〔本門正宗分の餘〕

- 一、經家大饒益を敘す……………(五六)
- 二、如來壽量を聞く功德を分別す……………(五七)
- 三、時の衆佛恩を報ぜんとして供養を設く……………(六三)
- 四、彌勒孤起偈もて領解を述ぶ(十九行偈)……………(六四)
- 1 時衆の領解を敘す(二行)、2 如來の分別を頌す(九行)、3 時衆の供養を頌す(八行)
- 〔以下本門流通分〕
- 五、本門の功德に先づ現在四信の第一(六八)一念信解の功德を明す(1人、2 功德、3 格量の準を明す、4 行位不退)
- 六、重頌もて明す……………(六一)
- 1 格量多少、十二行半、2 行人の功德、二行半、3、行位不退、五行半
- 七、第二、三、四の三位の功德を明す(六四)
- 1 第二略解言趣は人を擧げて格量し、2 第三廣爲多説は人を擧げて格量し、3 第四深信觀成は人を擧げて功德の相を明す

- 八、減後五品の人の功德を明す……………(六五)
- 1 初隨喜品の相、2 第二讀誦品の相、3 第三説法品の相、4 第四兼行六度品の相、5 第五正行六度品の相、功德
- 九、重頌もて明す……………(六三)
- 1 第二品を頌す、2 第三品、3 第四品、4 第五品

隨喜功德品

- 略文段……………(六四)
- 一、初品の功德を格量する中、彌勒の問に、長行、偈頌……………(六五)
- 二、佛先づ五十展轉内心隨喜の人を明すに、展轉相教ふ、格量の本、意を擧げて問ふ、誠實に答ふ、正しく格量すの五あり……………(六六)
- 三、直ちに外の聽法の人を明すに、自ら往いて聽く、座を分ちて聽かしむ、他を勸めて聽かしむ、具さに聽いて修す

- の四あり、以上は長行……………(六三)
- 四、偈頌に先づ内心隨喜の人に、五十人格量の本、正しく格量すの三あり……………(六三)
- 五、外の聽法の人に、他を勸む、自ら往く、座を分つ、聽いて修すの四あり……………(六三)

法師功德品

- 略文段……………(六五)
- 一、佛、總じて此の經の六根清淨の功德の盈縮を列ね、別して第一眼根清淨を説く……………(六六)
- 二、重頌もて眼根清淨を明す……………(六八)
- 三、耳根清淨を明す……………(六八)
- 四、重頌す……………(六九)
- 五、鼻根清淨を明す……………(六四〇)
- 六、重頌す……………(六四一)
- 七、舌根清淨を明す……………(六四三)
- 八、重頌す……………(六四四)
- 九、身根清淨を明す……………(六四四)

- 十、重頌す……………(六四五)
- 十一、意根清淨を明す……………(六四五)
- 十二、重頌す……………(六四六)

法華經十講

山川智應講述  
武智漣光速記

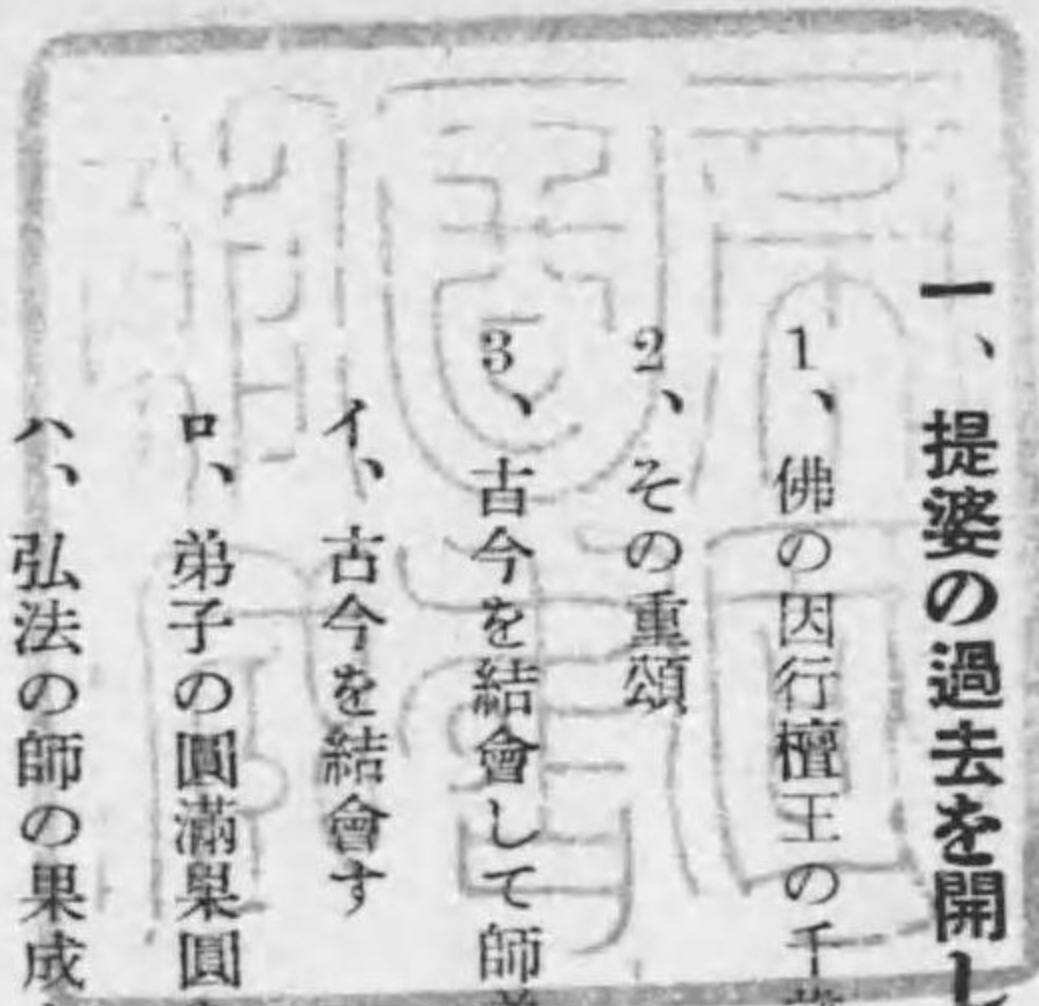
## 第六講 提婆達多品・勸持品・安樂行品・從地涌出品

### 提婆達多品

重ねて實證を擧げて此の經の弘通の功深徳重を明す(惡人成佛・女人成佛の二箇の諫曉)

#### 一、提婆の過去を開して成佛を明す

- 1、佛の因行檀王の千歲給仕、提婆の成佛を明す
- 2、その重頌
- 3、古今を結會して師弟の功德満足を明す
- イ、古今を結會す
- ロ、弟子の圓滿果圓を明して達多の弘法の益に因ると結す
- ハ、弘法の師の果成と化度・滅後利益等の授記を叙す
- 4、惡逆の成佛に就き疑を斷ちて信を勵む



#### 二、文殊の弘經、龍女の成佛を明す

- 5、文殊・智積の問答、智積の讚歎



- 6、文殊の弘經利益、智積の疑問、龍女の領解
- 7、舍利弗更に疑ひ、龍女現證を以て之を通ず
- 8、時衆の得益、人天の歡喜
- 9、小權の疑散じて默領深信す

「法師品」の時に「法華經」を弘めるについて衣座室の三軌といふものが明されました。然しながら「如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや」

といはれて、弘通するには非常に困難があるものと思はなければならぬと、「法師品」の時に既にさういはれて居ります、それから「寶塔品」に至つて

『誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん。今ぞ正しく是れ時なる、如來は久しからずして、當に涅槃に入りたまふべし。佛、此の妙法華經を以て、付囑して在ること有らしめんと欲す。』

といふ、如來の弘通者をお募りになる御語があります、そこで但し此の經を弘めるについては尋常大抵の難事ではないといふので、釋尊のみならず十方分身の佛、多寶如來、皆集まられたところで、特に六難九易といふやうな、殆ど想像にも及ばんやうな難しい事柄をお説きになつた、目蓮聖人は此の六難九易を説かれる前のところをば、「寶塔品」に三箇の諫曉あり——宜しく大願を發すべしといふ風に、佛が三度まで弘通を募られた、然しながら其の弘通がそんなに難しいものであるといふことが判つては、菩薩方も直ぐに發誓弘經を願ひ出す者がなかつた、そこで此の「提婆品」を説かれて、此の經の修行は難しくないのだ。唯實際に弘通するのが難しい、そのことを示す爲めに「提婆品」

を説かれたのであるといはれて、「提婆品」に二箇の諫曉ありといはれました、寶塔品の三箇の諫曉と「提婆品」の二箇の諫曉で、これを總じて「五箇の諫曉」といひます。

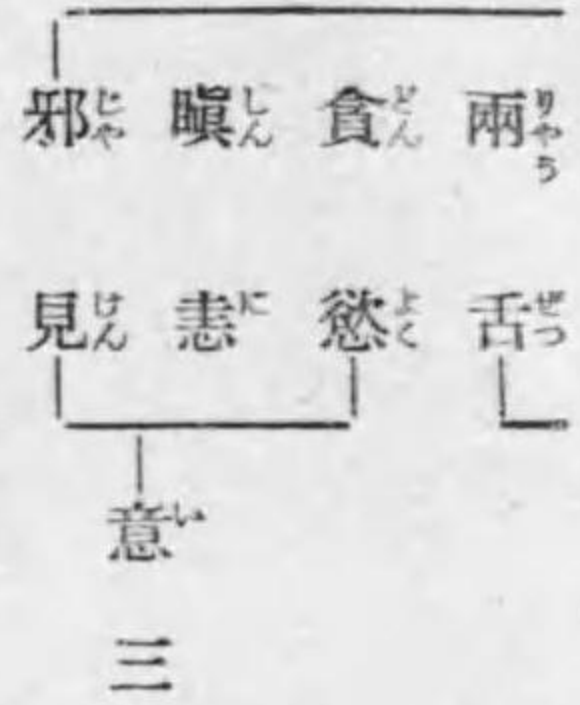
それで「重ねて實證を擧げて此の經弘通の功深徳重を明す」功深く徳重きことを明す、どういふ實證を擧げられたかといひますと、「法華經」は諸經で成佛しなかつた聲聞・緣覺の二乗が成佛する、それから阿羅漢のやうな人ばかりかといふと、「法師品」には「若し人有つて」と、凡夫そのもの、成佛をもお説きになつた、若し人有つて妙法華經の僅かに一偈一句といふ最少部分を、一念といふ僅かの時、最極短少の心、少の時少の心のそれだけ隨喜しても、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成就する、佛の功徳を成することは適確である、斯う示されて凡夫の成佛があかされて居る、けれども二乗や凡夫が成佛しても、尙惡人や、それから佛敎ではこれまで婦人といふものについては、五障といふところが説かれてあつて、罪深いやうにいはれて居つた、それで尙惡人や女人の成佛はどうかと思ふ心があるかも知れないといふので、惡人の成佛、女人の成佛を實際の證據をあげられて、「法華經」の功徳の徹底してあることを説かれたので、それを以て末世の弘經を更に勧められるのであります。斯ういふので、これを「五箇の諫曉」といひます。そこで、これまでは普通の教學的な分ち方でお話して來ましたが「和譯法華經」を持つて居られる人には「和譯法華經」の分段のまゝお話した方が宜からうと思ひますので、「和譯法華經」のまゝの分段でお話します。

### 一、提婆の過去を開して成佛を明す

提婆達多はもと佛の從弟に當るものであつた、その當時の宗教や哲學の心ばえも非常に深かつた。そして佛様の弟子になつて居る中に漸次佛様と意見の違つたことを考へ出した、そして別に教團を設けたといふので、此の提婆達多は、五逆といふものゝ中で三逆を犯し、他をして二逆を犯さしめました。父を殺し、母を殺し、それから阿羅漢を殺し、和合僧を破り、佛の身から血を出す、これを五逆といひます、佛教では惡・逆・謗と、斯う三つ惡いことについての段階があります。

十惡  
五逆  
謗法

前に話したかもわかりませんが普通輕いものは十惡です、殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪慾・瞋恚・邪見、これを身・口・意三業に分けて、身三・口四・意三と斯ういひます。



殺生、これは主として人間を殺す、小さくすれば人間以下の物を殺すことも這入つていくのです、最も嚴密にいつたならば蟻のやうなものを殺すこともいけない、けれども十惡でいふのは主として人間を殺すことです、次は泥棒と邪淫、此の三つは身で行ふもので、それから妄語・綺語・惡口・兩舌、語に大變力を入れて四つに分けてあります、妄語は虚言をつくこと、それから綺語といふのはいろんな造り話をして人を惑はす、惡口は人の惡口をいふ事、兩舌は甲の人に善いといつておいて乙の人に惡いといつたりすること、これが口の四です、それから意の三といふのは貪慾・瞋恚・邪見で、邪見は愚痴とも換へます、以上が十惡です。

それから佛教では惡いことの一般的の、輕い惡いこと、これを輕惡といひます、十惡は輕惡で未だ輕い、それがもつと重くなると五逆といふところまで行きます、阿彌陀様の如きも十惡は救ふけれども五逆と謗法は救はない、五逆となるとどんな事になるかといひますと、人を殺すのでも單の人を殺すのではない、自分を生んだ父を殺し、母を殺す、それから阿羅漢を殺す、阿羅漢は所謂煩惱を斷つてしまつて、そして時の人の手本になる人で、すべての人の法の父ともなるやうな人ですから、さういふ人を殺すことは、精神上の父母を殺すことと同じになります、それと共に和合僧を破る、僧は僧團といふことです、法によつて團結して居る、その團結して居るものをば二つに割る、破壊する行動

をすることです、それから佛の身から血を出す、以上を五逆といひますが、これは自分より以上のもの、及び世の本  
鐸となり、世の何等かの目標となるもの、さういふものを破壊するもので、個人々々一人々々に關することではない、  
十惡は大體個人々々の一人と一人との道德ですが、此の五逆は單なる一人と一人でなくして、自分の本を破壊し世の  
本を破壊する事柄になりますから、それでこれを特に「逆」といはれたのであります。

それから謗法となりますと、その又本なのです、さういふ風な十惡や五逆の起らないやうにする大本は、法に従ふ  
ことですが、其の法をまるで認めない、認めないのが進んで来たならば法に背くことになる、其の法に背く心が法を  
謗る心であり、それから法を謗る心は進んで法を破る心である、だから此の謗法といふものからあらゆる惡は來るの  
で、逆も其の中から來るといふので、その逆の上に謗法をおかれたのであります。



提婆達多は先づ其の和合僧を破つた、佛様の外に自分の僧團を造つて和合僧を破つた、それから佛様の一ばんの大  
檀那であつた頻婆娑羅王といふのに、阿闍世太子といふ太子があつたのですが、それを籠絡して汝の父頻婆娑羅王は  
釋迦のやうな間違つた者のところに澤山供養して居る、あんまり供養されるとお前が國王になつても財寶がなくなる  
から、あゝいふ親は處分してしまつたが宜しい、そしてお前は父を殺して新王となれ、俺は釋迦を殺して新佛となら  
う、斯ういふことをいって、阿闍世太子に父の頻婆娑羅王を殺させた、それから和合僧を破つた時蓮華色比丘尼とい  
ふ阿羅漢に遭つた、すると蓮華色比丘尼が和合僧を破つた提婆達多を面責した、すると此の生意氣な女奴といつて提  
婆達多が打ち殺した、それで阿羅漢を殺した、そして終に佛様をも殺さうとして、佛様のお通りになる所へ大きな石

を投げて殺さうとした、けれども石は途中で割れて佛様の御足に當つて血を出した、提婆達多が實際やつたことは破  
和合僧、殺阿羅漢、出佛身血の三逆ですけれども、頻婆娑羅王を殺せといふことを阿闍世太子に奨勵した、それから  
阿闍世太子は頻婆娑羅王を擁護して食を斷つて殺してしまはうとした、よつて母の章提希夫人が、頻婆娑羅王に食料  
を運ぶやうなことにした、そこで阿闍世太子は俺が父を改宗せしめようとして居るのに怪しからんといふので、又お  
母さんの章提希夫人を殺さうとした、すると耆婆大臣が、それは甚だ不都合だ、——印度では父より母を重んずる——  
昔から父を殺した者はあるが母を殺さうとした者はないといつて諫めた、そこで漸く母を殺すことだけは止めた、斯  
ういふことになつて居る、だから提婆達多は三逆を自分でやり、そして阿闍世太子を使喚して父を殺し母を殺さうと  
する心を起させるやうなことをしたから、五逆をつぶさにやつたと同じことである、自らは三逆を行ひ二逆は阿闍世  
にやらせやうとした、それが提婆達多であつて、五逆をおかしたのみならず、更に又佛の法を間違つた法だといつて  
居るから、五逆と謗法をつぶさにおかした者が提婆達多であります。

かくて佛の身から血を出したと共に、彼は生きながら地獄に墮ちた、玄奘三藏が印度に行つた時分に、提婆達多が  
地獄に墮ちた穴だといふのが「西域記」に出て居ますが、兎に角彼は佛身より血を出すと共に死んだ、そこで彼は地  
獄に墮ちたものであるといふことははっきり決つて居る、其の提婆達多をば、此の「法華經」で開顯せられて、彼の  
成佛を示されたのであります。そこで『提婆の過去を開して成佛を明す』のであります。

### 1、佛の因行、檀王の千歳給仕

妙法蓮華經提婆達多品第十二

爾の時、佛、諸の菩薩及び天人四衆に告げたまはく、吾過去し無量の劫の中に於て、法華經を求めて懈惰有ること無かりき。多の劫の中の於て、常に國王と作り、願を發して無上菩提を求めつ、心退轉せざりき。六波羅蜜を満足せんと欲ふを爲つて、勤めて布施を行ひ、心に象馬七珍も、國都妻子をも、奴婢僕從をも、頭目隨腦をも、身肉手足をも、憍惜とすること無く、軀命をだに惜まざりき。時に、世の人民の壽命量無かりしかども、法の爲めの故に、國位を捐捨てつ。政を太子に委ね、鼓を撃ち四方に宣命へて法を求めき。誰か能く我が爲めに大乘を説く者ぞ、吾當に身を終るまで供給し走使すべしと。時に仙人有り、來りて王に曰して言さく我大乘を有てり。妙法蓮華經と名けたてまつる。若し我に違かすむば、當に爲めに宣説くべしと。王、仙の言を聞き、歡喜び踊躍しつ、即ち仙人に隨ひて須ふる所のものを供給けつ。菓を採り、水を汲み、薪を拾ひ、食を設け、乃至は身を以て而ち牀座と爲しつ、身も心も倦むこと無かりき。于時に、奉事ること千歳を経たり。法の爲めの故なれば、精勤みて給侍つ、乏しき所無からしめき。

これは佛の因行、檀王の千歳給仕といふことを明かされたのであります。



釋迦牟尼佛は本門のところにまゐりますと、無始の佛ですが、未だ此の「提婆品」を説かれました時は、無始の佛である事が示されない時のことです、それには必ず佛様には因行といふものがある。曾て菩薩行を積み重ねて行はれた、其の菩薩行の中の一の時、専ら其の時は布施行を主にされたからそこでこれを檀王といふ、王様に生れて主とし

て布施行をせられた、布施といふのは檀那といふことです、檀那といふことが布施といふことの天然の語ですから、布施を行じて居られる王様だから、これを檀王といふ、即ち佛の因行として布施の行をされた時分であつた。

『六波羅蜜を満足せんと欲ふを爲つて、勤めて布施を行ふ』  
あらゆる物を惜しまないで無上道を求めた、すると其の時に仙人があつて、俺が大乘を有つて居る、本當の法を有つて居る、それが妙法蓮華經であるといつて、「法華經」を教へてくれた、そして檀王は千年の間あらゆる必要なものを皆捧げた、身を以て牀座とすること千歳であつた、これを妙樂大師が、

『達多の徳を引くは、方軌を用ふる者、釋迦は即ち是れ、方軌を慕くる衆なり、故に身を以て牀座と爲す等』

といはれた、此の檀王は一般に布施をするよりも、阿私仙人に給仕した、阿私仙人に給仕したのはどういふ意味で仕へたのであるかといひますと、阿私仙人が「我大乘を有てり、妙法蓮華經と名けたてまつる」「我有大乘」即ち妙法蓮華經を有つて居る、此の妙法蓮華經を有つて居る其の人である、その人に給仕した、それは何故妙法蓮華經を有つて居る人に給仕することが、布施行の一ばん本になるのであらうかと申しますと、唯自分の有つて居る物を人に與へて居るといふのでは、有つて居るものには限りがある、布施の根本はどうしても盡きない無價の寶が必要である、或は譬へにすると、如意寶珠が必要である——釋尊が昔矢張り精進の行をせられたといふ話の中に、大施太子といふ話があります、大施太子はどうしたかといひますと、あらゆる衆生に飽くことなく心のまゝに彼等の欲するものを與へんとせられた、それには龍宮にある如意寶珠を持つて來るが「一ばんい」といふので、龍宮の如意寶珠を求めるため龍王に談判した、餘り其の志が殊勝であるからといふので、龍王も一度大施太子に如意寶珠を與へることにし

たけれども、思ひ返して取り返した、そこで大施太子は、龍王は妄語の者であるといふので怒って、蜺ツ貝を以て大海を干さうとした、人がどんなに笑っても生き代り死に代り必ず干して見せるといふので、僅かな蜺ツ貝で大海を干すことを試みた、それは生々世々必ずやまないといふ大願を起したといふので、これを精進行の根本にするのですが、その本は何であるかといふと如意寶珠である、眞に布施を徹底的にやらうとするならば、どうしても如意寶珠を得なければならぬ、その無價の珠、それは何ものであるかといふならば、それは妙法蓮華經である、そこで其の妙法蓮華經を有つて居る阿私仙人に給仕するといふことは、布施の徹底したるものになるのであります。



かくて千歳の間給仕したその給仕は、忍ぶことからいひましたならば忍辱の衣であります、それを求めるのは何の爲めであるかといひますと、一切衆生に與へんが爲めであるから、それは大慈悲の室であります、それから自分の國王の位もみんな捨てしまつた、それは諸法空の座です、其の檀王の千歳の給仕、此の給仕からはじめて佛道の修行は起るのであるといふので、日蓮聖人の「身延山御書」の中には

「實ニ佛ニナル道ハ師ニ仕フルニハ過ギジ」

と仰せられた、又昔から法華八講といふものがありますが、其の法華八講では五卷の日といふのが重いことになつて居ます、それは八講の中一巻、二巻、三巻、四巻、五巻と行つて、此の第五の巻の日が中日になります、それで此の五巻の日といふ時に、天皇が親ら供養物をお持ちになつて行堂せられる、其の時

「法華經をわが得しことは薪こり茶摘み水汲みつかへてぞ得し」

といふ行基菩薩の作られたといふ伽陀をお唱へになる、國王の位、それは一切衆生を助けるため、恰度佛道を求めることと同じ心になつて、眞に國王の道が實行出来るものである、檀王の心を以て國を治めるのであるといふことを主にせられるために、朝廷では法華八講の第五巻の日を一ばん大切にせられた、其檀王の昔をこゝに開顯せられた、其が第一であります。

## 2. その重領

爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、  
 我過去し劫を念ふに 大法を求めんが爲めの故に 世の國王と作ると雖 五欲の樂を貪らず 鐘を推ちて四方に告げき 誰か大法を有てる者ぞ 若し我が爲めに解し説かば 身當に奴僕とならんと 時に阿私仙といへる有り 來りて大王に白さく 我微妙なる法を有てり 世間に希有なる所なり 若し能く修め行はゞ 吾當に汝が爲めに説くべしと 時に王仙の言を聞き 心大ど喜悅を生し 即便ち仙人に隨ひて 須ゆる所を供給へ 薪及び菓 蔬を採り 時に隨ひて恭敬ひもて與げき 情に妙法を存ふが故に 身も心も懈倦り無く 普く諸の衆生の爲めに 勤めて大じき法を求めて 亦己が身 及び五欲の樂の爲めにせず  
 これが求道の根本精神であります。

故に大國の王と爲りても 勤求めて此の法を獲つ 遂に成佛を得るに致りき 今故に汝らが爲めにこそ説け

3、古今を結會して師弟の功德満足を明す

次には「古今を結會して師弟の功德満足を明す」、そのイには「古今の結會」であります。佛、諸の比丘に告げたまはく、爾の時の王とは、即ち我が身是れなり、時の仙人とは、今の提婆達多是なり。

ロは「弟子の因満果圓を明して、達多の弘經の功德に因ると結す」で、

提婆達多の善知識に由るが故に、我をして六波羅蜜、慈悲喜捨と、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通道力とを具足せしめ、等正覺を乘じて廣く衆生を度すこと、皆提婆達多の善知識に由るが故なり

ハは「弘法の師の果成と、化度・滅後利益等の授記を叙す」で、

諸の四衆に告ぐ、提婆達多は、却て後に無量の劫を過ぎて、當に佛と成ることを得べし、號て天王如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はむ。世界を大道と名けむ。時に、天王佛の世に住ること二十中劫にして、廣く衆生の爲めに妙法を説かん。恒河沙の衆生は阿羅漢果を得、無量の衆生は緣覺の心を發し、恒河沙の衆生は無上道の心を發しつ、無生忍を得て不退轉に至らむ。時に、天王佛の般涅槃の後、正法の世に住まること二十の中劫にして、全身の舍利に七寶の塔を起て、高さ六十由旬に、縱と廣とは四十由旬ならむ。諸の天、人民、悉く雜の華、抹香、燒香、塗香、衣服、瓔珞、幢幡、寶の蓋、伎樂、數頌を以て、七寶の妙なる塔を禮拜し供養せん。無量の衆生は阿羅漢果を得、無量の衆生は辟支佛を悟り、不可思議の衆生

は菩提心を發して、不退轉に至らむ。

以上の中先づ古今の結會、佛が諸の比丘に告げられた、その時の檀王は自分であつた、その時の阿私仙人は今提婆であると、今と昔を結會されました。



弟子の因満果圓を明して、達多の古の弘法の益に因ると結すといふのは、提婆達多の善知識に由るが故に、六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通道力等の、佛のあらゆる功德を成就することが出来たのである、それは皆、昔の提婆達多の善知識に由るが故である、その昔の師は、今敵となつて居る、そして昔の弟子が今の佛である、これはどういふことを意味したのであらうか、これをば、

「邪正一如、善惡不二」

といふ、提婆達多が佛に敵して、五逆謗法を示した、それはをかしい。昔「法華經」を修行して、佛様のお師匠になつたやうな人が、どうしてそんな風な提婆達多になつたのであらうかといふことになります、これは甚だ不思議なことです、然るに「法華經」はどういふことを示す經であるかといひますと、「法華經」の旨趣は、平等大慧の一乘を示すので、そこで此の邪正一如、善惡不二といふことを、根本から開顯する、根から掘り下げてくるのです、凡そ世の中にあるところの相、現象界からいひましたならば、必ず一つのものがあつたならば、それに對して相對するものがきつと出来る、必然的にかならず或る一つのものがあつたならば、それに相對するものが出来るやうになつて来る、

その相對するものをば一方のものが相手のものを包容してしまふことが出来た時、相手のものがなくなるのです。けれども一度は、必ず必然的に相對する、現象界は必ず相對する、善いことならば善いこと、悪いことならば悪いことでも、キツとそれに相對するものが出来る、その一切の相對的のもの、相手を、此方に取り入れてしまふ、即ち絶對化する、相手のものをなくしてしまふ、根本から活かしてしまふ、さういふのは相手を根から此方のものにしてしまふことが、根本的に出来なければ到底出来ないことで、それをば示すために「法華經」には、邪正一如、善惡不二を説かれたのであります。

阿羅漢様のやうなのは善いことばかりで、悪いことは一切いけな、善いことばかりの所に行かうとした、そこで此の世の中も去つてしまつて、其處に悟を求めようとした、世間から去つて世間を求めた、それと同時に悪いことを去つて善いことを求めた、ところが善いこと、いふものには、キツと何か障りが出る、何か悪いことが附き従つて来る、善惡は離れることの出来ないもの、邪正も離れることの出来ないものである、それが此の世の中です。

昔斯ういふ話があります、印度に職人が居つた、何かしよつ中善いことをして、幸ひの來るやうに／＼と思つてゐた、或る時非常な美人がやつて來て、「私を今日から貴方の子供にして貰ひたい」、娘で非常な美人だ、その美人が子供にして貰ひたいといふ、「貴女を子供にしてどうなる」「私がこゝに居ると、毎日々々あらゆる幸せなことばかりが出て來ます」といつて、さまざまな話をした、それは功德天といふ天の神様で、一切の功德は皆出て來る、「貴方は大

變良いことをして、幸せを欲しがつて居る、功德をほしい／＼といつて居るから、それで私が貴方の子供になり來たのです。」「それでは是非居つて貰ひたい」といふので、子供にして居つた、そしてそれを大變愛した。すると暫くして、そこへ眞ッ黒ぐろのみにくい女が出て來て、「私の姉さんが來て居るやうだから、どうか私も娘にして貰ひたい」といふ、「それは困るが、お前を娘にするとうなる」「私を娘にする」と災難があとと、澤山出て來ます、「それは御免、そんなものはいらん」「私を放り出すならば、どうぞ私の姉さんと一緒に放り出して下さい」「姉さんは結構だがお前はいかん」「姉さんを置くならば私も居ます、私を放り出すならば、姉さんも出して下さい」といふ、これは黒闇天といふ天の神様だ、黒闇天は功德天の妹だ、姉妹としても離れることは出来ない、功德天がほしければ黒闇天もおかねばならぬ、黒闇天を放り出すならば功德天も一緒に出さなければならぬ、斯ういふ話しが「涅槃經」にあります、恰度そんな風であつて、幸ひと災難といふやうなことも、幸ひがあるからといつてそればかりだと思つて居つてはいかん、其の背後には不幸があるものである、といふことを認めなければならぬといふのです。

善惡といふものも矢張さういふものであつて、世の中——宇宙の全體、人生の全體も、キツと相對的に出て來るのであるからして善には必ず惡のものがあつて、正義には邪なるものがあつてそれを障害しようとする、それを根本から邪をも正化してしまふ、惡をも善化してしまふ、惡を轉じて善となし、邪を轉じて正となしてしまふといふ、根本的の力のある法でなければ、徹底した眞の法といふことは出来ないそれを妙法といふ、毒を變じて藥となす、これを稱して妙と爲す、毒を變じて藥となすのですから、藥が又毒の用きをすることもある、そこで法華經は、毒を悉く征

服して本當の藥、大良藥とすることが出来る、お釋迦様が正義をとって、そして佛の悟、佛法をお弘めになるといふ場合には、世の中にきつと不正義といふものをば一つに集めて、そして釋尊に敵するものが一つ、こゝに代表者として出て來なければならぬ、衆生の悪いものゝ代表として敵する者が出て來なければならぬ、それが出來て來ることによつて、釋尊が眞の功德を示されることのできる、悪いものを根本から打ち亡ぼして、彼の邪心を轉じて淨化する佛の力、その力を示すことが出来るのでありますから、それを妙法の用きとするのであります。

阿私仙人は昔は釋尊の師であつたが、今釋尊の敵となつて居る、さういふこともこれは妙法自在の一つの權化である、其の時の一切衆生の惡心を代表して釋尊の敵となつたといふ一つの佛の權化で、妙法蓮華經の權化として其處に出て來て居るのであります、然し權化ではあるが、やつた事柄は五逆謗法です、然しながら、提婆達多が五逆謗法をやらなくとも澤山の者がやる、それを提婆達多が背負つて示す、示したことによつて現身の墮地獄といふことを又示した、そこで五逆の結果を明かにしたといふ、矢張り妙法の功德を提婆達多そのものが示して居る、そこで其の根本を明かにする、古今を結會するといふことが出て來るのであります。

日蓮聖人が佐渡にお流されになつて、塚原で觀想されて居つたお語の中に

『平ノ左衛門コソ提婆多ヨ、念佛者ハ瞿伽利鎗者』

といふお語があります、それから又

『平ノ左衛門、守殿オハシマサズバ、争カ法華經ノ行者トハナルベキ』

平ノ左衛門があつてこそ日蓮は「法華經」の行者になることが出來た、その點からいつたならば日蓮が佛にならん第一の方人は、守殿、平左衛門等である、斯う仰しやつてあるのも、皆此の法華開顯の妙義から出で來たのであります、す、「寶塔品」に於ける六難九易、それから此の「提婆品」に於ける達多の成佛などいふやうなことは、皆正義を絶對的に此の人生に建設しようといふのについての根本覺悟、それから徹底的に人生を改造する根本精神を示されたものであります、人間はどうしても自己といふものに囚はれ易いものであり、又自分自身だけを中心にして、自分の知つたところ、自分の居る國といふやうなものに常に囚はれ易い、眞の正しい道といふものには、あらゆる點に於いて自己から離れてしまつたもの、捨て、しまつたもの、眞の大公至正といふもの、さういふ自己の分別がなくなつたところからでなければ出ない、その自己の分別をなくすのは、どういふことで一ばんよくなるかといふと、自己だけの要求とも、普通の人間の要求とも違ふもので、すべて其の方からいつたならば、勝手の悪いものである、衆生の心と佛の心とは全然違ふものである、佛の心に從へば自分に難儀がある、のみならず世の中の全體が敵となるかも知れない、敵となるのが當然である、さういふことを先に覺悟さしてしまふのが「寶塔品」であります、その爲めに六難九易といふことを示された、その根本の確信がなければ、本當の人生の改造は出來ない、人間の精神などに一々付き合つて居つたならば、眞の正義の實行が出来るものではない。

それからそれと同時に、其の法に敵する者があつた場合、自分は征服しても、他のすべての人間が法に反對するに決つて居るから、その反對者に對してどうするかといふことが起る、そこで此の「提婆品」の如く、其の法に反對す



るものも徹底したならば、それは反対して居ることが、法を又光揚することになる、反対するものに對してそれを突破して行く、その反対する者は其の人一人ではない、さういふ人間の心ばえを代表してやッて居るので、その人間そのものだけではない、一般の人間の煩惱を代表して、そこに出て来て居るのだ、だからそれに對しては、其の煩惱をもッてやッて来るものを突破する、彼等を征服するといふところに、はじめて菩薩行、佛行が成りたッて来るのであります、舉世皆好むことであツたならば、何も六難九易の必要はない、舉世皆否とするものであるから、六難九易の覺悟によッて行する、その行した場合は、必ずこれに反対するものが出て来る、其の反対する者に對しての觀念はどうなるのだといふ場合に、其の反対する其のことが根本には矢張り法を光顯する道なのである、こゝに彼を憎まないのみならず、彼は寧ろ我が方人であるといふことになりす。

『日蓮方佛ニナラン第一ノ方人ハ景信、法師ニハ良觀、道隆、道阿彌陀佛、平ノ左衛門、守殿オハシマサズバ争カ法華經ノ行者トハナルベキ』

といはれたやうな、さういふ觀念になることが出来るのでありまして、其の手本としてこゝに提婆達多が示されて居るのです。

提婆達多は五逆謗法をやッたけれども、その五逆謗法をやッた根本には、矢張り妙法を行ッて居ッた、それを開顯せられて成佛を示されたのであります、そこで佛になッてから後の利益等を、次に説かれてあります。

4、惡逆の成佛に就き、疑を斷ちて信を勸む

『佛、諸の比丘に告げたまはく、未來世の中に、若し善男子善女人有りて、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨けき心に信じ敬ひつゝ、疑惑を生ぜざらむ者は、地獄、餓鬼、畜生に墮ちず、十方の佛の前に生れん。所生ぬる處には、常に此の經を聞かむ。若し人天の中に生れては、勝好き樂を受け、若し佛の前に在りては蓮華より化生せん。』  
これは惡逆の成佛につき、疑を斷ちて信を勸むるのであります、妙法蓮華經提婆達多品によッて、一切の惡逆が根本から救はれる、惡を厭はない心が衆生の中におけることが出来る、惡を厭はない心、彼を惑む心が起ッたならば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちない、十方の佛前に生ぜん、邪正一如・善惡不二の觀に入ることが出来る。  
『人天の中に生れては、勝好き樂を受け、若し佛の前に在りては、蓮華より化生せん』  
蓮華は何時いふやうに、淤泥から無比清淨の華果が咲くのでありますから、邪正一如を最もよく明かに示したものであります。

二、文殊の弘經龍女の成佛を明す

5、文殊・智積の問答、智積の讚歎

『於時、下方の多寶世尊の所從の菩薩を、名けて智積と曰ふ。多寶佛に啓さく、當に本土に還りたまふべしと。釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、善男子よ、且く須臾を待て、此に菩薩ありて、文殊師利と名く。與に相見るべし、妙法を論説して、本土に還るべしと。爾の時、文殊師利、千葉の蓮華の大さ車輪の如くなるに坐し、俱に來れる菩薩も、亦寶の蓮華に坐しつ。大海の娑竭羅龍宮より自然に涌出で虚空の中に住りつゝ、靈鷲山に詣でて蓮華より下

り、佛の所に至り、頭面に二世尊の足を敬ひ禮せり。已に敬を修め畢りて、智積の所に往きて共に相慰め問ひつ、却きて一面に坐しぬ。智積菩薩、文殊師利に問はく、仁龍宮に往きて、化しつる所の衆生は、其の數幾何なりやと。文殊師利の言はく、其の數無量にして稱計るべからず、口の宣ぶる所に非ず、心の測る所に非ず、且く須臾を須て、自ら當に證あるべしと。所言未だ竟らざるに、無數の菩薩、寶の蓮華に坐して、海より涌出でつゝ、靈鷲山に詣でて虚空に住れり。此の諸の菩薩は、皆是文殊師利の化度へる所にして、菩薩の行を具へ、皆共に六波羅蜜を論説す。本と聲聞なりし人は、虚空の中に在りて聲聞の行を説きしかども、今は皆大乘の空の義を修行す。文殊師利、智積に謂つて曰く、海に於て教化せるところ其の事是の如しと。爾の時智積菩薩、偈を以て讃めて曰はく、大智徳勇しう健にして、量無き衆を化度せり、今此の諸の大會、及び我皆已に見たり、實相の義を演暢し、一乗の法を開闡しつ、廣く諸の群生を導きて、速かに菩提を成げしめたるよ」

二乗も成佛した、惡人の五逆謗法の提婆達多も成佛した、そこで、多寶如來に所從へて居つた智積菩薩が、もうこれでお濟みなつたことでありませうから、どうかお國にお歸りになつたら如何でせうと申上げた、すると、寶塔の中に多寶如來と一緒においでになる釋迦牟尼佛が、智積菩薩にいはれた、こゝでも注意しておきますが、凡そ多寶如來は塔の中に居られてちつとも出られない、その中に閉塔の時と開塔の時と違ひます、閉塔の時は兎に角聲を出されるが、開塔の時はすべて沈黙して居られる、開塔の時は決して聲を出されない、こゝでも智積菩薩がどうぞお歸り遊ばすようにと申上げたのに、イヤ未だ歸らないと多寶如來はいはれない、黙つて居られる、釋迦牟尼世尊が待つて〜といはれた、これは何ういふわけかといひますと、深く注意を要することです、塔が閉ぢて居る時は

『善い哉善い哉、釋迦牟尼世尊能く平等大慧、教菩薩法、佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲めに説きたまふこと』といはれて、『皆是れ眞實なり』と證明された、然るに塔が開いてからは、此の「法華經」では何處を見ても、多寶如來が聲を出して居られることは一つもない、自分にいはれたことでも黙つて居られる。塔が閉ぢて了つた終りの方になりますと、「妙音菩薩品」などといふところにも、塔の中から聲が出て居ます、塔の中から聲が出て居るといふことで、塔が閉つて居るといふことを明かにすることが出来る位です、これは釋尊は智慧を代表する智佛、それから多寶如來は境佛又は理佛といひますが、境とは理で、法の道理を示して居る佛なのです、譬へて、これを男女にしますと、釋尊の方は男で、多寶如來は女になります、娘さんの時分には獨立して何かいつて居るけれども、もうチャント室におさまつたら餘り口をきかない、夫がいつて居るのに、宅はさう申しますが私は、ナンてさういふことはいはない、さういふことはないやうに、多寶如來は塔が開かれたら沈黙して居ます、但し夫の留守の時は代表する、けれども夫の居る時はみだりには喋べらない、そこで釋迦牟尼佛が、

『智積に告げて曰はく、善男子よ、且く須臾を待て』暫く待て、暫く待てこゝに文殊師利菩薩といふのがある、この文殊師利菩薩は、釋尊九代の師匠だといふ位で三世の佛母ともいはれる、三世の佛様のお母さんになる位智慧のある菩薩です、だから文殊師利といふのは知つて居るだらう、今その文殊師利が歸つて来るから、一緒に此の「法華經」についての話をして行つたら宜からうと、釋尊が仰しやつた、其のお話が終らない中に、文殊師利菩薩が虚空會のところによつて來た、そして釋尊の御前に行つて禮拜した、そこで智積菩薩が文殊師利菩薩に、

「仁が龍宮に於いて化されたところの衆生の數はいくらほどですか」

「イヤ、言ではいはれませんが、此の通りです」

といつて、文殊師利菩薩が一度手をあげると、海中から靈鷲山の虚空——その虚空は「寶塔品」によりますと、三千二百萬億那由陀の世界が一緒になつた、その世界の虚空です、その大虚につきぐにと、澤山の菩薩が出て来て、それらの菩薩が皆六波羅蜜を演説した、それを見た智積菩薩が大變褒めあげた、まことに結構なことです、貴方の御苦勞は到底言では申上げられないといふので、智積菩薩が讃歎した、其が第五段です。

### 6、文殊の弘經利益、智積の疑問、龍女の領解

「文殊師利の言はく、我海中に於て、唯常に妙法華經を宣説きぬと。智積菩薩、文殊師利に問うて言はく、この經は甚も深く微妙にして、諸經の中の寶、世に希有なる所なり、頗し衆生の勤めて精進を加へ、この經を修行して、速かに佛を得るもの有りや、不やと。文殊師利の言はく、有り。娑竭羅龍女の女、年始めて八歳なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知りつ。陀羅尼を得て、諸佛の所説の甚深き祕藏、悉く能く受持し。深く禪定に入りて、諸の法を了達し、利那の頃に於て菩提の心を發して、不退轉なることを得たり。辯才無礙にして衆生を慈み念ふこと猶ほ赤子の如く。功德具足して、心に念ひ口に演ぶるところ、微妙にして廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至れり。智積菩薩の言はく、我釋迦如來を見たまつるに、無量の劫に於て、難行し苦行し、功を積み徳を累ねつ、菩薩の道を求めて未曾て止息せたまはず。三千大千界を觀たてまつるに、乃至芥子の如

き許りも、是菩薩にして身命をば、捨てたまひし處に非ざること有ること無し、衆生の爲めの故ぞかし。然る後にこそ、乃ち菩提の道を成すことを得たまへれ。信ぜず此の女の須臾の頃に於いて、便ち正覺を成ぐることをと。言論未だ訖らざるに、時に龍女の女、忽然に前に現れ、頭面に禮し敬ひつ、退きて一面に住ひ、偈を以て讚へて曰

深く罪福の相を達し、徧く十方を照したまふ、微妙にして淨き法身、相を具へますこと三十二、八十種好を以て用つて法身を莊嚴したまふ、天人の戴き仰ぐ所、龍神も咸く恭敬ひまつる、一切の衆生の類、宗め奉まざる者無し、又聞て菩提を成ぐることを、唯佛のみ當に證知すべし、我大乘の教を聞きて、苦の衆生を度脱さん

そこで智積菩薩が非常に讚めたのに對して、文殊師利菩薩のいふには、私はこれだけの菩薩を教化したけれども、唯海中で妙法華經だけを説いてゐたのである、「法師品」には、若し人有つて此の經を聞いて、須臾も、一偈一句を一念も隨喜ばん者は、皆成佛するとあつたが、これは海の中で魚族龍族といふ畜生のところに行つて「法華經」ばかりを説いた、それで皆海中の者が成佛したといふ、そこで智積菩薩が文殊菩薩に問うていふには、それは不思議なことを承はる、此の「法華經」といふものは一切の法の中で最も微妙甚深の法であつて、諸經の中の寶である、その「法華經」をば、衆生が勤めて精進を加へ、此の法で速かに佛になるといふことがあるかと問ふた、すると、文殊師利のいふには、有る、それは娑竭羅龍女の女が年始めて八歳、畜生であつて女でそして齡が八歳、一般の上からいひますと人間以下の畜生です、畜生は愚痴の表示なので前の提婆達多是邪見であり、邪見といふのはなかく、智慧のある方ですが、畜生は大體愚痴の表示なのです、その畜生であり、而も女である、女人は佛教では貪慾の強いものとし

てゐます、それは貪慾が強いといふことは、婦人であるから必ずしも強いのではないが、婦人は天性に男子と違ふところがある、どう違ふかといひますと、婦人は子供を生みます、公平に考へても、婦人は男子より利己的などころがあります、自分に近いものをば大切に作る心が、どうしても婦人にはあります、これはなくてはならぬので、或る事婦人が非常に利己的だといふことを私のところにいつて来た或る學者がある、それは體驗した結果、私のところにいつて来たので、此の人は文學博士です、それから私がすっかり話しを聞いた、聞いた結果私は是を開顯した、君はさういふがそれは尤もだ、婦人は男子から見れば利己的になる筈だ、何となれば婦人は子供を生まなければならぬ、そして子供を育てる責任がある、自分の身體を以て子供をチャント保護する、男子は自分の生命一つだが、婦人は二人分の生命をもつて居る、これは事實なのだ、いくら男が文句をいつたところで、二人の生命をもつことは出来ない、ところが婦人は二人の生命をもつことが出来る、その點からいつたならば婦人が利己的ではないので、第二の生命を保護する爲である、それは婦人の天性で一種の天の配劑だ、だから婦人が利己的になることはあんまり文句をいふのは、君の方が間違つて居るといつたことがあります……もつとも其の爲めでない貪慾もないこともないが……。

文殊の弘經利益、智積の疑問龍女の領解

そこで婦人といふものは貪慾を示す、畜生は愚痴を示す、然も八歳であるから僅かしか修行してない、愚痴にして貪慾で、それが年始めて八歳、然るに其の僅かの功德によつてどうなつたかといふと、智慧利根といつて、愚痴が智慧利根になり、あべこべになつた、そして、

『善く衆生の諸根の行業を知りつ。陀羅尼を得て、諸佛の所説の甚深き秘藏、悉く能く受持ち。深く禪定に入りて、諸の法を了達り、利那の頃に於て菩提の心を發して、不退轉なることを得たり。辯才無礙にして、衆生を慈み念ふこと猶ほ赤子の如く。功德具足して、心に念ひ口に演ぶるところ、微妙にして廣大なり』  
といふ恐ろしい功德になつた、

『慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至れり』

さういふ功德を八歳の龍女が持ち得たのです、そこで智積菩薩は、それは不思議なことを聞くものかな、自分は釋迦牟尼佛を見奉ると、無量劫にわたつて難行苦行をされた。

『功を積み徳を累ねつゝ、菩薩の道を求めて未だ曾て止息せたまはず。三千大千世界を觀たてまつるに、乃至芥子の如き許りも、是菩薩にして身命をば、捨てたまひし處に非ざること有ること無し』

三千大千世界の何處でも、芥子の如き所でも、みんな釋迦牟尼如來が菩薩行をせられた所でないところは無いのだ、その不惜身命の菩薩行をせられた結果佛になられた、然るにさういふ愚痴にして女で、僅か八歳の者が佛になるなどいふことは、あるべからざることだ、私はそれを信することは出来ない、これをば教學で申しますならば、智積菩薩は別教といふ教、別教の見を以て「法華經」の圓教を難じたものです、すると其の時、

『言論未だ訖らざるに、時に龍王の女、忽然に前に現れ、頭面に禮し敬ひつゝ、退きて一面に住ひ、偈を以て讚へて曰さく、

深く罪福の相を達し、徧く十方を照したまふ、微妙にして淨き法身相を具へますこと三十二、八十種好を以て、

用ツて法身を莊嚴したまふ、天人の戴き仰ぐ所、龍神も咸く恭敬ひまつる、一切の衆生の類、宗め奉まざる者無し』

清淨妙法身

具相三十二

以八十種好

用莊嚴法身

佛といふものをば、單に凡夫そのまゝの佛だといふやうな佛を「法華經」は考へない、微妙にして淨き法身である、その法身といふものは、相を具へますこと三十二、八十種好、以て法身を莊嚴すとある、單なる理の法身を重んじない、三十二相八十種好を具へたる、入天の眞の大導師としての佛陀、その佛陀が莊嚴法身である、三十二相八十種好の佛は應身といふ、普通は法身の方が應身より勝れたものとして居るが、應身即法身、法身即應身、三十二相八十種好を具へた人格的完成の佛陀、その佛様をば尊ぶのであります、それは天人が共に戴き、入天の眞の師である、龍神も恭敬ひ、一切衆生悉く宗め奉らざる者は無い、九界の一切衆生の眞の師であり親であり主である、主師親であるそれは釋尊貴方様でありますと龍女がいつた、そして其の次にいつた語が又偉いことです。

又聞成菩薩

唯佛當證知

我聞大乘教

度脫苦衆生

智積菩薩は佛になるといふことは、三十二相八十種好を具へて佛になるといふことは、『三千大千世界を觀たてまつるに、乃至芥子の如き許りも、是菩薩にして身命を捨てたまひし處に非ざること無し』といふ、積功累徳、長い間の修行の結果佛になるのである、さういふものであると智積菩薩は決めて居つた、だから龍女が信仰を起してすぐ菩提を得たといふことを聞いて、それは不思議千萬だ、そんなことはあるべからざることではないかといつたのに對して、龍女が出て來ていふには、

『又聞て菩提を成ぐることを、唯佛のみ當に證知すべし、我大乘の教を聞きて、苦の衆生を度脫さん』

これは前の「法師品」の「須臾聞之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提、須臾もこれを聞いたならば、阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛の悟に到ることが出来るといふ、聞くことによつて信仰を表する、聞くといふことには、何が必要であるか、何が相手になるのであるかと申しますと、それは聞くことは信仰によるのです、聞法といふものは信仰と相對するので、佛教では修行の法が二通りあります、それは觀念と聞法です、一つは觀念一つは聞法です、斯う二つがある中、聞法の方は信仰、觀念の方は禪定をやる人間であります、そして此の觀念の方を法行といひ、聞法の方を信行といひます、

觀念——禪定——法行

聞法——信仰——信行

今その聞法の方において成佛するといふのは、それは信慧一如によつて成佛するので、それは佛様のみがよく御承

知でせう、「唯佛のみ當に證知すべし」、苦の衆生を度脱するのを佛のみ知って居られる、外の者は知らぬでせう、だから智積菩薩が疑ふのは當り前ですが、「法華經」の眞の大乗はどういふことであるかといふと、佛の功德の全體をば此の「法華經」の中に含めしめられてある、それだから此の「法華經」そのものを信仰受持すれば、佛の功德をそのまゝ得ることが出来るのだ、さういふことが此の經の中にある、それが眞の大乗であつて、それが「法華經」です、その「法華經」の功德利益を私がこれから身體で見せます、そして六道の衆生をば度脱さうと思ひます、さういふことを龍女が申上げて居るのであります。

7、舍利弗更に疑ひ、龍女現證を以て之を通ず

聞いただけで菩提を成げること、それは別教では考へられないことであります、佛がもつて居られるところの功德をば、佛の慈悲によつてこれを與へることが出来る、さういふことは別教では考へられない。

智積菩薩はそれを聞いて、兎に角これは何事かあるだらうといふので沈黙してしまひました。

爾の時、舍利弗、龍女に語りて言はく、汝久しからずして、無上の道を得べしと謂へり。是の事信じ難し。所以者何とならば、女の身は垢穢くして、是れ法の器に非ず、云何にしてか能く無上の菩提を得ん。佛の道は懸曠なり、無量の劫を経て勤苦とて行を積み、具に諸度を修め、然る後にこそ乃ち成すべけれ。又、女人の身には猶ほ五の障有り、一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何してか女身の、速かに佛と成ることを得んと。爾の時、龍女、一の寶珠有りて、價值三千大千世界なり。持けて以て佛に

上る。佛即ち之を受けたまふ。龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言はく、我寶珠を獻つる、世尊納受けさせ

たまふ、是の事疾しや、不やと。答へて曰く、甚だ疾し。女の言はく、汝が神力を以て、我が成佛を觀よ、復之よりも速かならんと。當時、衆會、皆龍女が忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具へて、即ち南方なる無垢世界に往き、寶の蓮華に坐して等正覺を成し、三十二相、八十種好ありて、普く十方の一切衆生の爲めに、妙法を演説くことを見る。

すると舍利弗が又そこへ出て来ていふには、お前は久しからずして無上の道を得べしと思つて居るが、それは甚だ信じ難い、男ならば兎に角、女は垢穢の身である、佛道はなかく懸曠であり、無量劫の間勤苦しなければならぬ、小乗では三祇百劫といふ長い間の修行しなければならぬ、その間に六波羅蜜を修めた結果でなければ、佛にはなれない、また女は梵天王——世界の主、帝釋——須彌山の主、魔王——慾世界の王、轉輪聖王——此の人間の住んで居る世界の王、佛身——十界の王、すべて女は王になることは出来ないといふは聞いて居る、女の身がどうして佛になることが出来るかと難じました。その時に、龍女が一つの寶の珠を持つてゐました、その價值三千大千世界といふ珠で、これをば所謂一念三千の珠であると説かれて居るやうですが、其の價值三千大千世界の珠を捧げ持つて佛に奉つた、これは文殊師利菩薩から海中において、「法華經」の一念三千の眞理を聞いて居る、その一念三千の眞理の寶珠、それをば龍女は信仰によつて確と持つて居ましたから、それを佛にさし上げた、これが私の頂いたものでございませうが、とさし上げた、すると佛は、其の通りだ、俺が與へた所謂佛果上の一念三千なのだといふので、佛はこれを受けられた。そこで龍女が、智積菩薩及び舍利弗に向つて問ふには、今自分が珠を奉りましたが、非常に疾かつたで

せう、兩名が、それは非常に疾うござつたといひました時に、

『汝が神力を以て、我が成佛を觀よ、復此よりも速かならん』

といつて、龍女が南方無垢世界に行つて、佛になつた姿を見せました、このことをば傳教大師は

『以顯三經力』

といはれてゐます、龍女の成佛はどういふことであるかといふと、これは經力即ち此の法華經といふ教法の力を示して居るのであつて、龍女の修行の功德ではないといふのであります。

法力

佛力

信力

これを三力といひますが、今こゝでは特に經力を示して居るのです、元來その經を下されたのは佛で、それは佛の大慈願力によるのです、佛の大慈願力によつて、此の價值三千大千世界の、宇宙の根本たる眞理の法、その法をば妙法華の經力の中に、その眞理の證の主たる佛が大慈願力によつてこれを收められた、その經をば衆生にお與へになつたのであるから、龍女はこれを信することによつて、此の佛の力の經力を經過して、そして佛の證の徳を自分で得てしまつた、そこで龍女が持つて居つたものは内證——内に佛の一念三千の法を信得して居ること、そして今内證が外用——外の一念三千の用を現はすので、それは佛のものである、自分の力で得たのではない、佛の慈悲の力によつてこれを經力の中から得たのです、佛力によつて法力の中に佛の因果の功德を攝められて、信力のある衆生にこれ

を授けられる、つまり佛の因行と果徳とが、此の經の中に含められた、其の經を聞いたことによつて、佛様の御心を盛られたところの三千大千世界に値する珠——佛の一念三千の珠、その佛の一念三千を龍女は内證して居つた、信仰によつて藏して居つた、よつて外佛身を現することが出来たのであります。

8、時衆の得益、人天の歡喜

爾の時、娑婆世界の菩薩聲聞、天龍八部、人と非人と、皆遙かに彼の龍女の成佛して、普く時會の人天の爲めに、法を説くを見つ。心大ど歡喜びて、悉く敬ひ禮せり。無量の衆生は、法を聞き解悟りて、不退轉を得、無量の衆生は、道の記を受くることを得つ、無垢世界六反に震ひ動きつ。娑婆世界なる三千の衆生は、不退の地に住り、三千の衆生は、菩提の心を發して、而ち記を受くるを得たり。

9、小權の疑散じて默して深信を領す

智積菩薩、及び舍利弗、一切の衆會、默然として信じ受けぬ。龍女が成佛した實證を見たので、別教を以てこれを疑つたもの、小乗の心を以て疑つたものも、皆現在の實證を見て默然信受した、此の龍女が權者であるか實者であるか、斯ういふ風な議論が昔からあります、傳教大師の仰せには、權者であつても構はない、それは何となれば權は實を引く、權者といふものは何のために佛が示されたのであらうか、それは佛がさういふ姿を神通力を以て示されて居るのであるが、何故示されて居るのかといふと、權は實を引くのである、其の身の卑しいことに拘らず煩惱の澤山あることに拘らず、一つの信念によつて生れ變つてしまふ、愚痴の龍女が『善く衆生の諸根の行業を知りつ、陀羅尼を得て、諸佛の所説の甚深き祕藏、悉く能く受持ち、深く禪定に入

りて諸の法を了達り、刹那の頃に於て菩提の心を發して、不退轉なることを得たり」といふやうな事柄も、それは生れ變つてしまふことです、信仰によつて生れ變つてしまふことです、さういふことは龍女が權者であつても、實際の人間にさういふことがなし得る要素があるから、化現としての龍女が、實際の衆生がさういふこともなし得るものだといふことを示す爲に、さういふ姿を示されたのである、權は實を引く、さう示されて居るのである、若し實を引かないならば、權を徒らに示すのは何のためであるかわからないのであるから、それは權者であつて少しも構はないのである、傳教大師はさういふ註をせられて居りますが、婦人の徳として龍女をば、「慈悲仁讓、志意和雅」と前にいはれた、慈悲仁讓——慈悲仁愛にして出しやばらない、志意和雅——志意はまことに雅やか、和やかである、さういふ雅やか和やかであり慈悲仁讓であるに拘らず、智積菩薩や舍利弗が、龍女の信仰して居つた佛から得た妙法蓮華經の功德を疑つた、そこで忽然變じて男子となるといふ姿を示した、これは忽然變じて男子となるといふと、矢張り男にならなると成佛が出来ないのかといふ話があるけれども、これは成佛といふことは男女に關はらない、成佛といふことはどういふことであるかといふならば、本門で申しましたならば本佛を成就するといふことなのです、本佛といふことは何ういふことかといふと、本佛といふことは法界一切すべて本有の佛身なので、本有の佛身を成就するといふことが成佛であるから、男は男、女は女そのまゝでよろしい、但し今佛といふものをば、三十二相八十種好を成じた佛様でなければ佛でないと思つて居るものに對してゐる、それだから三十二相八十種好を成就しようといふには男にならざるを得ない、なぜかといふと三十二相八十種好には、男のしるしとしての陰馬藏相といふものがある、だから三十二相を具へるには、男にならざるを得ない、即ち變じて男子とならざるを得ないのです。

内證の佛、外用の佛と斯う二つありますが、内證の佛は女子そのまゝ佛になるが、外用の佛は身體的には男子に變する必要がある、けれども變することも決して難しくはない、それは恰度 天照大神が、平素は蠶をお飼ひになつたり、織物を織られたりされて居るが、素盞鳴尊が風を起し霧を起して高天原に上られた時、天照大神が「いづの高鞆弓腹振り、いづの雄叫、ふみたけび」泡雪と土を蹴ちらかしていかめしきお姿を現され、男そのものゝ姿になられて素盞鳴尊を譴責せられた、或は神功皇后が三韓征伐をせられる時男子のお姿になつて三軍を率ゐられた、あのやうなことは變じて男子になるのであります、心の方が眞に内證の佛性を握つて居つたならば、何時でも男子の姿の必要な場合には男子になることも出来るわけです。

以上提婆達多の善惡不二、邪正一如と、それから愚痴變じて智慧利根となり、女身變じて、男子となることも出来る龍女の成佛、それは兩方とも經力によるものであるといふので、此の五逆の達多、愚痴の龍女の成佛、これを以て「法華經」の功德を示し、そして斯の如くそれは難しいものではないのみならず、修行も但信仰の一つであるから、六難九易の修行をするのは難しいものだ、けれども、信仰するのは難しいことではない、信は易い、然しながら其の信仰を眞に得たならば、今度は六難九易も決して難しいものではなくなるのである、何故かといふなら、經力がこれを助けるからであるといふので、提婆と龍女の、惡人女人の成佛を明して、此の經の力の大きなことを示された、こゝに於いてはじめて、「勸持品」に此の「法華經」の弘通をしたいといふ請願者が出て来る、斯ういふことになるのであります。



### 勸持品

五箇の諫曉に應じて、五類の衆、此土彼土の弘經を誓願す

||二萬は此土の弘經、五百・八千及び比丘尼は他土の弘經、八十萬億は惡世の弘經。||

#### 一、四類の發誓

- 1、二萬の菩薩此土の弘經を請ひ、五百羅漢、八千の聲聞他土の弘經を請す
- 2、憍曇彌の授記
- 3、耶輸多羅の授記
- 4、比丘尼の領解と發誓

#### 二、八十萬億那由佗の發誓

- 5、佛の目視、八十萬億の發誓
- 6、菩薩偈を以て誓旨を衍述す
- ア、忍鎧をもつて弘經す
- A、總じて時を擧ぐ
- B、所忍の境を明す(俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢。||出家の處に一切の惡人を攝す。惡言の謗(私處、公處)。善言の謗。毀謗の所以を釋す)

C、我等敬佛の下は着衣弘經の意を明す

イ、諸聚落城邑の下は慈室弘經を明す

ウ、我是世尊使の下は空座弘經

エ、我於世尊前の下は總結す

妙樂云、寶塔は方軌を用ふる人を募り覓む。達多の徳を引くは、方軌を用ふる者。釋迦は即ち是れ、方軌を裏くる衆なり。故に身を以て牀座と爲す等といふ。持品は即ち是れ惡世の方軌、安樂行は是れ始行の方軌なり。故に忍辱地に住す等といふ。具に後品(安樂行)の如し。若し爾らずんば、即ち弘經軌なけん。軌なきの弘經、是の處あることなし。赤身陣に入るに、自ら損すること虚しからざるが如し。被鎧の言、應に徒らに説かざるべし。

#### 要文

後惡世衆生、善根轉少、多増上慢、貪利供養、遠離解脫、難可化度。  
是娑婆國中、人多弊惡、懷増上慢、功德淺薄、瞋濁詔曲、心不實故。  
濁劫惡世中、多有諸恐怖、惡鬼入其身、罵詈毀辱我、我等敬信佛、當著忍辱鎧。  
爲説是經故、忍此諸難事、我不愛身命、但惜無上道。

次は「勸持品第十三」であります。「勸持品」はプリントに引いておきましたやうに、妙樂大師のいはれるのは、「勸持品」は即ち是れ惡世の方軌、惡世に此の「法華經」を弘める規則、「安樂行品」は是れ始行の方軌、「始行」といふのは菩薩の中、まだ始めの修行の、浅い位の菩薩の修行法であります。「安樂行品」は斯う斷られて居るので、「勸

持品」は修行の深い菩薩のことであるといふことが自ら示されて居るのであります。「安樂行品」は即ち始行の方軌でありますが、それでも尙ほ忍辱地に住することが必要であるといふことは、具さに「安樂行品」に書かれて居ります。若しその方軌がなかったならば——若し爾らすれば則ち弘經、軌なけん——規則のない弘經をしたならば、赤身で敵陣に入るやうなものである、何故かといへば、「法華經」は佛の覺なのですから、根本的に衆生の心とは違つたものであります。「法華經」を修行する者は、舉世皆敵と見なければならぬ程のもので、安樂行品にも「一切世間、怨多くして信じ難し」とあります。そこで敵の中に入るのに赤身であつたならば、必ず——自ら損すること虚しからざるが如し、——命を落すものである、そこで鐵を被なければならぬことになります、——被鐵の言應に徒らに説かざるべし——といはれて、「勸持品」は進んで説くのですから、忍辱の鐵を被ねばなりません。そのことを主として説かれたので、それは惡世の方軌、深位菩薩の方軌なのであります。

そこで、上の「寶塔品」に於ける三箇の勸宣、「提婆品」に於ける二箇の諫曉、以上五箇の諫曉に應じて、此の品では五類の人々が、或は此の土、或は彼の土の弘經を誓願するのであります、二萬の菩薩は此の土の弘經、五百羅漢と八千の聲聞と比丘尼との三は娑婆世界以外の所で弘經することを誓願する、又八十萬億の菩薩は惡世の弘經を誓願するので、これを五類の發誓と申すのです。

### 一、四類の發誓

先づ始めには「四類の發誓」で、二萬の菩薩と五百・八千及び比丘尼の發誓であります、その中の第一は二萬の菩薩が此土の弘經を誓願し、五百羅漢及び八千の聲聞が他土の弘經を誓願する……

#### 『妙法蓮華經勸持品第十三』

爾の時、藥王菩薩摩訶薩、及び大樂說菩薩摩訶薩は、二萬の菩薩の眷屬と俱に、皆佛の前に於て是の誓言を作さく  
 「法師品」の對告衆の藥王菩薩と、及び「寶塔品」の對告衆であつた大樂說菩薩、此の菩薩方が二萬の菩薩方と俱に、皆その誓言を作しました。

「惟願くは世尊よ、以て慮と爲したまはされ、我等、佛の滅しませる後に於て、當に此の經典を奉持ち、讀誦んじて説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は、善根轉た少くして、増上慢多く」

どうか御心配なさらんやうに願ひます、私達は佛のおかくれになつた後、當に此の經を奉持ち、讀誦んじ、又解説を致すでありましょう、後の惡世の衆生は善根——善いことをすることは頗る少い。何となれば生れた時が佛や法からだん／＼隔つて居るから、あらゆる善をなす心の根が少くなる、どうしてかといふと、彼等は自ら得ざるを得たりとする、先人のいふことをば用ひない、彼等は皆増上慢である、

「利供養を食り、不善の根を増し解脱に遠離かりつ、教化すべきこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此の經を讀誦んじ持ち説き書寫し、種々に供養して、身をも命をも惜まざるべしと。」

「不惜身命」の語はこゝから出て居ります、これが藥王菩薩及び大樂說菩薩及び二萬の菩薩の誓であります。

「爾の時、衆の中なる五百の阿羅漢の受記を得たる者」  
 即ち「五百品」の時に受記を得たもの、それが、

「佛に白して言さく、世尊よ、我等も亦自ら誓願ひて、異の國土に於て、廣く此の經を説かん」

佛は、娑婆世界に於いて誰かよく「法華經」を説かん、といはれましたが、娑婆世界ではどうも自信がございませんから、外の世界で廣く説かせて頂きたい。

「復、學無學の八千人の受記を得たる者有り、座より起ち、合掌して佛に向ひたてまつり、是の誓言を作さく、世尊よ、我等も亦、當に他の國土に於て廣く此の經を説くべし」

そこで五百羅漢と八千聲聞のいふのには、何故娑婆世界では自信がないかといふと、

「是の娑婆國の中は、人に弊惡多くして、増上慢を懷き、功德淺薄に、瞋濁れ詔曲りて、心實しからざるが故なり」

といふので、つまり娑婆世界を忌避してしまつた、これが二萬、五百、八千の三類の人の發誓であります。

次は「橋臺彌の授記」。

「爾の時、佛の姨母なる摩訶波闍波提比丘尼は、學無學の比丘尼六千人と俱に、座より而て起ち一心に合掌しつゝ、尊顔を瞻り仰ぎて目暫くも捨かず」

佛の御母上は佛をお生みになるとすぐおかくれになつた、そこで摩耶夫人の妹の摩訶波闍波提——橋臺彌といふ方が叔母さんですが、後のお母さんになつて佛をお育てしたのです。佛が出家成道して僧園をつくられました後も、はじめ坊さんには男の坊さんばかりあつて女の坊さんはなかつた、ところが此の橋臺彌が女の坊さんになりたといふので、佛様は大變迷惑された、然し叔母様の仰しやることであるから、終に比丘尼をこさへることになつた、その代り

比丘尼は戒が餘計ある、餘計あつても構はないからといふので比丘尼になられ、そして阿羅漢様の悟を開かれた、その摩訶波闍波提はこれまで佛様から成佛の卒業免狀を頂いて居らぬ、そこで佛の尊顔を拜んで、目暫くも捨かず。これまで女の卒業免狀をもらつた者がなかつたから黙つて居ましたが、龍女が畜生で佛になつたから、これは私の方も當然であらうといふので、佛様の尊顔を瞻つた、

「於時、世尊、橋臺彌に告げたまはく、何が故に憂の色なして如來を視るや、汝が心に、將に我汝が名を説きて、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けざりしと謂ふこと無しや。橋臺彌よ、我先に總て一切の聲聞に、皆已に記を授けたりと説けり。今汝記を知らんと欲はば、將來ん世に、當に六萬八千億の諸佛の法の中に於て、大じき法師たるべし。

及び六千の學無學の比丘尼も、俱に法師と爲らん。汝是の如くにして、漸々に菩薩の道を具へ、當に佛と作ることを得べし。一切衆生喜見如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けむ。橋臺彌よ、是の一切衆生喜見佛及び六千の菩薩は、轉次に記を授かりて阿耨多羅三藐三菩提を得む」

先に一切の聲聞に、既に卒業免狀を與へたから、お前も其の中にはいつて居たのであるが、然し自分の名がないからといふのであるならば、授けてやらうといふので、一切衆生喜見如來といふ佛の卒業免狀を下されました。

これは「將來ん世に、將に六萬八千億の諸佛の法の中に於て、大じき法師たるべし」とあつて、法師となつてそれから漸々に菩薩の道を具へて佛になると書かれてあるから、同じ女でも龍女の方が御利益が顯著ではないか、橋臺彌の方は長い間佛に従つて修行し、その結果又それから長い間菩薩の道を具へなければならぬならば、橋臺彌の方が損ではないか、よこんな考へが起るかも知りませんがこれはさうではない、前にも話しましたが、内證の方は橋臺彌

はもうすんでしまつて居るので、龍女の成佛は、あれは一種の神通のやうな成佛です、素盞鳴尊が高天ヶ原に攻め  
て来たから 天照太神が俄に男の服装をせられた、三韓征伐に 仲哀天皇がおかくなつたから神功皇后が、仕方  
なく男装された立場と同じことです、今橋雲彌等の聲聞が成佛されるのは、さうではない、聲聞の成佛は本當の三十  
二相八十種好の眞の成佛なのです、假に成佛の姿を示した龍女とは違ひます、これは聲聞といふ修行をして居つた  
時には自身だけの三界解脱を求めたのですから、一切衆生に縁がないのです、佛の内證はすんで居るのだけれども、  
佛になるには佛の國を造らなければなりません、佛國土をつくるには菩薩の修行をして、人々にチャント縁をつけな  
ければならぬ、菩薩の修行をして居る時にその菩薩に救はれた人達、縁をつけられた人達が、その菩薩が佛になつた  
時にその國へ生れて来る、ところが『孤調解脱』といつて、阿羅漢様は自分だけの悟を主にして、人に縁をつけて佛  
國土を嚴淨することがしてない、莊嚴國土といつて俺は斯ういふ理想の國を造らうと思ふ、斯ういふ特色ある佛の國  
を造らうと思ふといふので、その目的のために菩薩行をしなければならぬ、その菩薩行をして居られる時分に、その  
菩薩の行のために縁をつけられ救はれたといふ人々が、それに一緒に歩いて行く、だからさういふ佛國土を造るとい  
ふことには、斯ういふ長い時間が必要になります、前の龍女とは譯が違ふのでありまして、あゝいふ龍女が示したや  
うな成佛ならば、此の橋雲彌でもすぐに出来るのですが、こゝの場合はさうでないのです。

次は耶輸陀羅の授記

爾の時、羅睺羅の母なる耶輸陀羅比丘尼、是の念を作さく、世尊は授記の中に於て、獨り我が名をば説きたまはず  
と。佛、耶輸陀羅に告げたまはく、汝來らん世に、百千萬億の諸佛の法の中に於て、菩薩の行を修め、大じき法師

と爲り、漸くに佛の道を具へつ、善しき國の中に於て當に佛と作ることを得べし。具足千萬光相如來、應供、正徧  
知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けむ。佛の壽は無量阿僧祇の劫ならむと。」  
耶輸陀羅は佛の御后であられた、そして佛の一子羅睺羅の母であられた、その耶輸陀羅比丘尼の授記であります、是  
の如く佛の姨母及び佛の後であられた耶輸陀羅比丘尼は、兩方とも成佛の記莖を受けた、そしてあらゆる比丘尼は此  
の二人の眷屬ですから、共に授記されたのです、そこで、

爾の時、摩訶波闍提比丘尼、及び耶輸陀羅比丘尼、並びに其の眷屬、皆大ど歡喜びて未だ會て有なきことを得つ、  
即ち佛の前に於て、偈を説きて言さく、

世尊は導師として 天人を安穩へたまふ 我等記を聞きて 心安く具足しぬ

諸の比丘尼、是の偈を説き已りて、佛に白して言さく、世尊よ、我等も亦能く他方の國土に於て、廣く此の經を  
宣べん。

と誓うたのであります。

二、八十萬億那由佗の發誓

「誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法華經を説かん」といはれて、「寶塔品」で佛は弘通者をお募りになつたの  
に、八千の聲聞、五百羅漢、及び比丘尼の方々は皆他方の國土でこれを弘めたいと申上げた、二萬の菩薩だけは此の  
娑婆世界で弘めたいといつたけれども、佛様は少しく不満足であられた、何故不満足であるか、此の藥王菩薩及び大

樂説菩薩の弘經の誓願を見ると、

『後の惡世の衆生は、善根轉た少くして増上慢多く、利供養を貪り、不善の根を増し、解脱に遠離かりつ、教化すべきこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此の經を讀誦んじ、持ち説き書寫し、種々に供養して、身をも命をも惜まざるべし』

これだけのことで、これだけのことで佛が「六難九易」などといふことを仰しやつて、「寶塔品」に難しいくくといふことを念に念を入れて仰しやつたことと、此の二萬の菩薩の誓願と比べると、二萬の菩薩の誓願が足りないのです、そんな覺悟位では佛があれだけ繰返して、難しいことをいッてあるのに對して、それでは當らないではないか、そこで『佛の目視、八十萬億の發誓』となります。

『爾の時、世尊、八十萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩を視そなはず。』

佛様がすつと八十萬億那由他の菩薩を御覽になつた、『是の諸の菩薩は、皆是阿惟越致にして』即ち不退地といふ、最早迷ひのところには歸らない、一向に佛のところに来る人であるといふ、不退地といふ位に居る人である、又「不退の法輪を轉らし」少しも間斷なく菩薩行を修行して居る人である。

『諸の陀羅尼を得たり。即ち座より起ち、佛の前に至りて、一心に合掌しつゝ、而て是の念を作さく。』

佛様がジロツと見られたので、菩薩方は皆心に思つた、『若し世尊、我等に此經を持説けよと告勅したまはゞ、當に佛の教の如く、廣く斯の法を宣ぶべしと。復、是の念を作さく、佛、今は默然として告勅したまはず、我當に云何かすべきと。時に、諸の菩薩、佛の意に敬ひ順ひ、

並びに自ら本願を満さんと欲ひつ、便ち佛前に於て師子吼を作し而て誓言を發さく』

自分達の顔を御覽になつたから、これは我等に誓言を説けと仰しやつたのであるといふので、若し自分達に此の法を弘めることをお許し下さるならば、佛の教のまゝに身命を捨て、修行致したいと思ふ、けれども佛様は黙つておらつしやる、——諸の菩薩は佛の意に敬ひ順ひ——先づ佛様が、どうもこれでは先の二萬の菩薩の誓だけでは足りないと思召してゐられるらしい、又自ら彼等の本願としても、不惜身命に法のために盡したいといふ本願があるからといふので、便ち佛の御前に於いて師子吼を作して誓言を發した。

『世尊よ、我等如來の滅し給へる後に於て、十方の世界に周旋り往返りして、能く衆生をして此の經を書寫し、受持ち、讀誦んじ、其の義を解説し、法の如く修行して、正憶念せしめん。皆是佛の威力ならむ。』

佛の威力として其のことをさして頂きたい。

『唯願くは世尊よ、他方に在すとも、遙かに守護せ見せたまへ』

斯う先に誓言をなしておいたのであります、是から八十萬億の發誓で、『菩薩偈を以て誓旨を衍述す』るのです。

『即時に、諸の菩薩、共に同じく聲を發けて、而して偈を説きて言さく

唯願くは、慮ひしたまはされ、佛の滅度したまへる後の、恐怖しの惡世の中に於て、我等當に廣く説くべし』

此の最初のところは、『忍辱鎧を着て此の經を弘通する』といふことが説かれてありますが、その一ばん始めに——唯願くは、慮ひしたまはされ、佛がおかくれになつてから後の恐怖しき世に於いて、必ず説きませうといッて、『總じて時を擧げ』られました、此の經の意味から申しますと、これは『恐怖惡世』といふのは、佛の滅後末法の時といふ風

に解釋されるのであります。

其の次は其の忍辱の鎧を着て、どんなことを忍ぶのであるか、どんな厭な事、どんな難しいことが出て来るのかといふことを説かれる、それが『所忍の境を明す』といふのです。その所忍の境には三類の強敵といふのがありますが、その第一は俗衆増上慢を明される。

『諸の無智なる人の、悪口し罵詈雑言等、及び刀杖を加ふる者有らんも、我等皆當に忍ぶべし』

一般の俗人であり、その無智なる一般の俗人——ここで無智といふのは、佛教の智慧のないことだといふことを申上げておきます、世間の智慧がいくらあっても、佛教の智慧のない者は矢張り無智です——其の無智なる人の悪口罵詈雑言し、及び刀や杖を以つて迫害する、それは第一の俗衆増上慢であります。それも我等皆當に忍ぶべし、次に『惡世の中の比丘は、邪智にして心詭曲り、未得ざるを得たりと謂ひ、我慢の心充滿たん』

これは第二の道門増上慢で、一般の僧侶です、惡世の中の一般の僧侶は、佛教の智慧は、俗人がまるで知らないのと違つていくらか知つて居る、けれども何んなに知つて居るかといひますと、間違つて知つて居る、邪なことを知つて居る、正しく知らない邪智であります、邪智であるから其の心は常に世の中に詭曲、世の人間の情に詭曲、さういふ心をもつて居ます、「法華經」は一切世間の人に詭曲はない、衆生の心に從はないで、唯佛の隨自意、佛の御心にのみ從ふのが「法華經」であるが、此の惡世の中の比丘はさうでなくて、衆生の心に從ふ方で、邪智にして心は詭曲であります、そして未だ得ざるを得たりと謂ひ、我慢の心が充滿して居る、「法華經」の上からいへば、本當の佛道にならないのです、けれども、「法華經」でなくても矢張り佛の道の、或るものを得て居ると思つて居る、そして彼等は

佛の心たる法華經こそは得てゐないが、自分は或るものを得て居るといふ、我慢の心が充滿して居る。

次は第三の僧聖増上慢です、

『或は阿練若に、納衣にして空閑に在りて、自ら眞の道を行すと謂ひて、人間を輕賤むる者有らん』

阿練若は阿蘭若ともいひ、浮世を離れたところ、巷を離れた所に三衣一鉢といつて、佛が外面的に僧侶の行儀を示された、その姿をして居つて、そして自ら自分は眞の道を修行するのだと思つて居る、そして彼等は人間を輕賤める、普通の凡夫を輕賤めて凡夫と異つたことをして居る、而も異つたことをして居るから佛の眞の道の通りして居るのかといへば、佛の眞の道にしたならば、着物でも餘計なくはへておくことは出来ない、食物でも餘計なものはおいておけない、其の日のものは其の日に處分してしまふ、貯藏することは一切出来ない、ところが彼等はさうでない、なか／＼衣であらうが食べる物であらうが貯藏する、即ち利養を貪る、そして白衣の爲めに法を説く、白衣とは俗人のこととで、俗人のために俗人が歎びさうな風に法を説いて、世に恭敬はれることは六通の羅漢の如くであらう。

『是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、名を阿練若に假りて、好みて我等が過を出さん』

さういふ風な僧聖増上慢のものに對して、プリントに書いてあるやうに、『出家の處に一切の惡人を攝す』これは東春といふ所に智度といふ人があつて、この人は妙樂大師の弟子ですが、この人の註釋の語ですが、えらいことをいつたものです。

『出家の處に一切の惡人を攝す』とて坊さんには惡人ばかりが攝つて居る、其の頃の一ばん悪い者が坊さんになつて居るのである、しかも表面は六通の羅漢の如く恭敬はれる、そして惡心を懷いて、常に世の人間を輕賤めるから、世

の中のことは思はない筈であるのに、人間を輕賤めながら常に世俗の事を念ふ、そして眞の道を行すと思つて居ながら惡心を懷いて居る、そこで「法華經」の行者の過を出す、こゝでの惡人といふのは、「法華經」にそむく者を一切の惡人といつてある、無智が佛教の道理を知らないものであるが如くに、此の惡人は「法華經」にそむく者であります、その惡人、一切の誹謗者をば集めてある僧聖増上慢、これらごんなことをするかといひますと、これから先に書かれてゐます。「而ち如是の言を作さむ」といふのが惡言の謗と、善言の謗と二つあります。その惡言の謗に於いて、個人々々に向つて惡言をする、それから公處、役所に向つて惡言する、此の二つの惡言があります。

「而ち如是の言を作さむ、此の諸の比丘等は、利養を貪るを爲ての故に、外道の論議を説き、自ら此の經典を作りて、世間の人を誑惑し、名聞を求むるを爲ての故に、分別して是の經を説くと」

以上が私所、私の所で個人々々に向つていふ、「法華經」を修行して居る彼は利養を貪つてやつて居るのだ、彼等のいふところは決して佛教の本義ではない、外道である、お經の道理を勝手に作つて世間の人を誑惑して居るのだといふやうなことをいつて惡口する、次は公處即ち官公衙等に向つての惡口です。

「常に大衆の中に在りて、我等を毀らんと欲ふが故に、國王大臣、婆羅門居士、及び餘の比丘衆に向ひ、誹謗りて我が惡を説いて、是邪見の人なり、外道の論議を説くと謂はむ」

これは公處に向つていふ惡口で、一般にいつて居るのみならず、官に訴へて「法華經」の行者を誹謗する。そんな風のいろ／＼な迫害をする、俗衆・道門・僧聖の三類が一つになつて、法華の修行者を惱ます、けれども、「我等佛を敬ふが故に、悉く是の諸の惡を忍ばむ」

と敢然として退かない。すると彼等はまた次は「善言の謗」をする。

「斯が爲めに輕しめ言はれん、汝等は皆是佛なりと、是の如き輕慢の言をも、皆忍びて之を受くべし」

一方には外道の論議を説くといひながら、又一方にはお前は佛だらう／＼といつて嘲齋坊にするやうなことをいつても、皆忍んでこれを受ける、此の輕慢——惡口し善言の謗をするのは、どうしてであるか、どうしてそんな風に惡言の謗や善言の謗するのであらうか、

「濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖有らむ、惡鬼其の身に入りて、我を罵詈り毀りて辱めん」

これが「誹謗の所以」であります、惡鬼とこゝに書かれてありますのは、深いひますれば元品の無明で、迷の一ばん奥底の本です、それをば日蓮聖人の御書にも

「元品ノ無明ハ第六天ノ魔王ト顯ハレタリ」(富木入道殿御返事)

といはれて居ます、そこでこゝに惡鬼と書かれてゐるのは、第六天の魔王のことで、即ち元品の無明の顯はれです、元品の無明といふのは何ういふことかといひますと、元品の法性に對するもので、我々は元品の法性が出た時でなければ元品の無明が顯はれない、元品といふのは一ばんの元で、一ばん元の法性といふのは根本の佛性といふ、もうすべての人間の一ばん元の佛性、その一ばん元の佛性が顯はれるといふことは何ういふことかといひますと、それは「法華經」の信仰なのです、「法華經」の信によつて元品の法性——佛性が顯はれる、その元品の佛性が顯はれると、前の「提婆品」にあつたやうに、釋迦牟尼佛が出る時には提婆達多が出る、元品の法性が顯はれたら元品の無明が顯はれる、我々は日々浅い見思の惑、といふ普通の見識の惑それから感情の惑、それは外部に見たり聞いたりして居る

ことから起る煩惱、さういふ煩惱が一ばん下で、それから深く思想的のいろんな惑ひになると、菩薩などでも塵沙の惑といふのがある、見思の惑は一ばん浅く、その次に少し深いのが塵沙の惑です、もう一段上の一ばん深いのが無明の惑、此の無明の惑は「法華經」などでは、四十二階段があります、其の四十二の一ばん深いものが元品の無明なのです。

元品の法性が起る時には元品の無明が起る、普通の浅い菩薩十信の位などは見思の惑の次の塵沙の惑をなくしたくらのところ、無明の惑をばなくしようとする菩薩は、初住以上の菩薩で元品の無明は等覺の菩薩が、妙覺の覺りに入る時に斷するので、それは元品根本法性の働きでなければなりません、その元品の法性が働き出す時には、必ず元品の無明が出るのです、今惡世の中に於いて此の「法華經」を弘通する場合には、何故そんな風に一般の俗人が法華の行者を惱まさうとし、又一般の僧侶が、これを惱まし、それから聖人のやうな者まで惱ますのは何故であらうか、それは「法華經」の行者が元品の法性の働きをするから、惡鬼彼等の其の身に入つて、即ち元品の無明の働きとして、彼等がさういふ罵詈毀辱するといふことになるのであります、

『惡鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱して辱めん 我等佛を敬ひ信じて 當に忍辱の鎧を着るべし』  
さういふ三類の強敵があるから、普通の忍辱の衣ではいけない、忍辱の鎧を着なければならぬ、前の「法師品」には『大慈悲を室と爲し、柔和忍辱を衣とし、諸法の空を座とは爲す』とあります、ところが柔和忍辱の衣などを著て居ては最早間に合はない、だから『忍辱の鎧を着るべし』とあります、

『是の經を説かんが爲めの故に 此の諸の難事をも忍ばん 我身命を愛せず 但だ無上の道を惜む』

これは『我等敬佛の下は著衣の意を明す』で、忍辱の鎧を着るのはどういふ譯であるか、其の譯は斯ういふ譯だといふので、そのことが書かれてあります。

『當に忍辱の鎧を着るべし』どうして著るのかといひますと、『是の經を説かんが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん』——元品の法性の外に成佛の道はないから、是の經を説かんが爲めには、諸の難事を忍び、身命をも愛せず、但だ無上道を惜しむ、

『我等來らん世に於いて 佛の所囑を護持たん 世尊よ自ら當に知しめすべし 濁世の惡比丘は 佛の方便もて 宜しきに隨ひて所説せる法を知らず』

佛敎は澤山あるが皆それは佛の方便で、衆生の心に隨つて假りに説かれて居る法であることを知らない、みんな佛敎であるならば、佛の覺りを説いたものと思つて居るが、それは違つて居る、そのことが解らんものだから、「法華經」のみ眞の法であるといふと、彼等は法華經の行者を惡口し擧燈する、そして數々擯け出す、擯出する、そして塔寺を遠離からせたりする、

『如是の等の衆の惡をも 佛の告勅を念ふが故に 皆當に是の事を忍ぶべし』

佛の告勅は何であらうか、それは六難九易であります、「寶塔品」にチャントさう書かれて、佛は其の前に告勅されてあります、その六難九易の告勅を思ふが故に、皆當に是の事を忍ぶべし、以上が忍辱の衣でなく鎧を着るわけ、それを示されたものであります。

次は『諸聚落城邑の下は慈室弘經を明す』



「諸の聚落城邑にも 其法を求むる者あらば 我皆其の所に到りて 佛の所囑せる法を説かん」  
 これは所謂慈室弘經、大慈悲の室に入り、此の「法華經」を弘める、その難事は忍辱の鎧を着て忍ぶ、諸の聚落でも城邑でも、どんな所にも行つて、法を求める者があつたならば、佛の法を説く、その爲めに來るところの難儀は少しも厭はない、それは佛の慈悲を取り次ぐ、其の大慈悲の室に入つて居るからである、

「我は是世尊の使なり 衆に處はるに畏るゝ所無し 我當に善く法を説くべし 願はくは佛安穩に住はしませ」  
 「我は是世尊の使なり、衆に處はるに畏るゝ所無し」は、何故であるかといふと、それは「諸法空の座」に坐してゐるからである。惡鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱しても、それは諸法實相の一切法空である邪正一如である、この法華經に敵する者があつても、提婆は過去の阿私仙人である、此の諸法空、善惡不二の諸法空に坐して居るから、どんな難儀が來ても少しも畏怖ることはない、それで善く法を説くことが出来るのであります。

「願はくは佛安穩に住はしませ」さういふ譯ですから、佛様よ、どうぞお心やすく在しまして頂きたい。  
 次が此の「勸持品」の二十行の偈の結びであります。

「我世尊の前 諸の來りたまへる十方の佛に於いて 是の如き誓言を發す 佛自ら我が心を知しめせ」  
 世尊の御前、又來りたまへる十方の分身佛の御前に於いて、斯の如き誓ひ言をなします、それは恰度「寶塔品」の時に佛様が、多寶如來は何のために來られたか、十方分身は何のため來られたか、皆法をして久しく住せしめんが爲めぞと、三佛の來られた理由をお説きになつて居られる、それに對して釋尊多寶佛の御前に於いて、又十方分身の御前に於いて、此の通り誓言を申します、これは私達が勝手に申上げるのでなしに、佛の心を敬ひ願はんが爲めに誓願したのであります、私達自らの心だけでは佛のお思召は知れないところでございますから、何卒其の私達の敬順佛意の私のない淨い心をお知り下さい、さういふ誓願を申したのであります。

これを「勸持品」の二十行の偈といふのであつて、恰度「法華經」が印度に説かれ、支那・日本に渡つて今では二千八百年です、日蓮聖人の頃は二千二百年經つて居るのでありますけれども、こゝに書かれたやうな弘經法をした人は一人もなかつた、唯日蓮聖人一人、此の「勸持品」の二十行の偈の如き弘經法を遊ばして居るのであります、  
 「勸持品」二十行ノ偈ハ、日蓮ダニモ此ノ國ニ生レズバ、ホトンド世尊ハ大妄語ノ人ニ(開目抄)

と仰せられてあります、一々此の御文は、誰が何といつても此の御文ばかりは、日蓮聖人以外これに當てはまる人はない、諸の無智の人の惡口罵詈は無論の話し、双や杖も身に受けられた、大聖人自ら其の杖のことをば少輔房が「法華經」の第五の卷を以て自分を打つたと書かれて居る、双は東條左衛門から小松原で加へられたまひ、大聖人は眉間に三寸の疵を負はれた、惡世の比丘が皆大聖人を迫害したことも無論の話して、良觀、道隆、道阿彌陀佛などといふものは、みんな所謂六通の羅漢の如く、鎌倉の當時の社會の上下に敬はれた、良觀などは殆んど生佛の如く上下は思つてゐた、良觀房忍性、大覺禪師道隆、記主禪師然阿、道阿彌陀佛道教などといふ、當時の名僧知識は皆正面に立つて、聖人を所謂「外道の論議を説き、自ら此の經典を作りて、世間の人を誑惑し、名聞を求むるを爲ての故に、分別して是の經を説く」と、國王大臣に向つて高聲これを訴へた、此の四人はどんな人間かといふと、良觀房忍性は日本戒律宗での實行家としては第一人者である、社會事業家として日本の歴史あつて以來、良觀上人の如く大社會事業をした人はない、それから大覺禪師道隆は、これは北條時頼の師匠であつて、そして建長寺の開山です、

年號を寺號にするといふことは延曆寺がはじめでありまして、比叡山延曆寺といふ、禪宗の寺で京都では建仁寺といふのが出来ましたが、これは普通の禪宗ではなく天台宗です、天台宗眞言宗には年號を寺につけたのが往往にありますけれども、天台宗眞言宗以外で年號をつけた寺は餘りない、然るに大覺禪師道隆は時頼の師であつて、時の年號を以て寺號とし、而もその建長寺の開山です。それから記主禪師然阿、これは矢張り北條執權の經時の師で、江戸時代以前の關東淨土宗鎮西流の總本山光明寺の開山です、それから道阿彌陀佛道教、これは名越の時章といふ人の師匠で此の時章は執權の叔父に當る、そこで道阿彌陀佛は新善光寺の開山で、これは後になつた寺ですが、矢張り大きい寺であつた、皆四人共開山であるし念佛宗禪宗としては第一流の人間ばかりであります、國王・大臣・婆羅門居士に向つてといふ方は、此の道阿彌陀佛とそれから外の三人で、龍の口の時には訴狀を奉つて、大聖人を迫害した。然しながら彼等は狡猾だから、所謂邪智にして心詭曲だから、表向きにはやらない、弟子の行敏といふもの、これは何者だといふと、元來良觀の弟子です、良觀の弟子であつて、又然阿にも弟子だし、道阿にも道をきいたから、良觀、然阿、道阿の三人の弟子になる、それで表向きは行敏であるが、内容は此の三人であつた。

良觀坊は雨の祈りのために日蓮聖人に苦しめられたことがある、然し良觀はどうすることも出来なかつた、これがすんでから恰度約十日程たつて淨光明寺行敏といふ名で、大聖人に問答を申込んだ、大聖人は私の問答は無益なり、公場對決を願ひなさいといはれた、そこで行敏が訴狀を奉つた、その行敏の訴狀を奉つたに對して、大聖人がこれに對する會通をせられたのが、「行敏狀御會通」といつて傳はつてゐますが、本當は會通といはない、これは陳狀又は論狀といひます、その陳狀又は論狀の劈頭に何と書かれてあるかといふと、

『當世日本第一ノ持戒ノ僧良觀聖人、並に法然上人ノ孫弟念阿彌陀佛、道阿彌陀佛等ノ諸聖人等、日蓮ヲ訴訟スル狀ニ云ク』

名前を行敏と書かれないで、頭から『日本第一ノ持戒ノ僧良觀聖人並ニ法然上人ノ孫弟念阿彌陀佛、道阿彌陀佛等ノ諸聖人等、日蓮ヲ訴訟スル狀ニ云ク』と實際をぶちまけられた。

それからまた道隆といふ人は、矢張り二階堂某のところに秘に出て行つて、日蓮は斯くくの通りだと告げ、又「妙法比丘尼御返事」といふのには、極樂寺良觀は訴狀を捧げたといふことが書かれて居ますから、これらの連中は皆公處に向つて大聖人を毀謗した、更に塔寺を遠離され數々擯出されるといふ、これらの「勸持品」の二十行の偈の一々の文句は、佛滅後二千二百二十餘年を通じて、日蓮聖人に於いてはじめて悉くが實現されたのでありまして、これのみは何人もさうでないといふことが出来ない。

『日蓮ダニモ此ノ國ニ生レズバ、ホトンド世尊ハ大安語ノ人、八十萬億那由佗ノ菩薩ハ、提婆ガ虚誑罪ニモ墮チヌベシ』(開目抄)

といふあの御語は、此の「勸持品」から起つたのであります。然しながら此の「勸持品」を説かれた八十萬億那由佗の菩薩が、果して自ら修行することが出来るからこれを説かれたのかといふと、さうではなくて、佛様に催促されて、佛の威力でさういはれた、自分の心ではない、だから「諸の菩薩、佛の意に敬ひ順ひ、并に自ら本願を満さんと欲ひつ、便ち佛前に於いて、師子吼を作し而て誓言を發さく、世尊よ、我等如來の滅したまへる後に於て、十方の世界に周旋り往返りして、能く衆生をして此の經を

書寫し、受持み、讀誦んじ、其の義を解説し、法の如く修行して、正憶念せしめん、皆是佛の威力ならむ』  
といひ、

『佛自ら我が心を知しめせ』

といつて、自分で生意氣なことをいつたのではありませんと、いつてゐる、以上八十萬億那由他の菩薩の二十行の誓願が、「勸持品」の一ばん主たるところなのであります。

此のやうな風に、末法濁世の中に、若し正直に「法華經」を説いたならば、こんな三類の強敵が來たる、これは必然に「法華經」を修行する限りは來たるのであらうか、もしくは「法華經」の弘め方によつて來たるのであらうか、これが問題だ、勿論「法華經」そのものは、「如來の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」だ、だから必ず佛の説かれたが如く正直に「法華經」を説いたならば難が來たる、それだから佛は六難九易を説かれたのである、それは「法華經」の性質である、けれども説き方にもよるだらうか、それもある、それでは難の來ないやうに説くには、どんな風に説いたらよいのだらうか、それは餘り進んで説かなければいゝ、進んで説けば「勸持品」の様になるから餘り進んで説かないやうに消極的に説く、消極的とはどんな風に説くのか、それは若し向ふから出て來て尋ねたら本當のことをいふが進んではいけない、さうすれば「法華經」でもそれほど難は來らない、ところが「勸持品」のやうに進んで説けば、必ず三類の強敵が起る、恰度此の「勸持品」と同じことが後の「不輕品」といふのに出て來ますがこの勸持品を聞いて居つたあらゆる菩薩が、そんな三類の強敵なんでもものに對することは非常に難しいことであつて反省してみると到底我々は出來さうもないといふので、菩薩方が恐怖の心を起した、そこで如來が更に次に「安樂

行品」をお説きになるのであります。

### 安樂行品

初心の方法、危害を慮らす

一、文殊、初心の爲めに弘經の方法を請ふ

二、佛、四安樂行の第一身安樂行を説く

1、行處を説く

2、親近處を説く

い、十惱亂を離る、戒なり

ア、豪勢の人に遠かる——（「離憍慢縁」）

イ、邪見の人法に遠かる——（「離邪見縁」）

ウ、兇險の技に遠かる——（「離散亂縁」）

エ、諸惡律儀に遠かる——（「離惡業縁」）

オ、二乗の衆に遠かる——（「離自利縁」）

カ、慾想の相に遠かる——（「離染着縁」）

キ、不男の人に遠かる——（「離無志操縁」）

ク、危害の家を遠かる——（「離俗縁」）  
 ケ、機嫌の事を遠かる——（「縁他生愛縁」）  
 コ、畜養を樂ふを遠かる——（「離自生愛縁」）  
 ろ、常に作すべきことを明すは、定なり、近住すべき觀慧を明すは、慧なり

ブ、觀 慧

イ、觀 境

ウ、十八空に約して明す

一、第一義空（如實相）

二、內空（不顛倒）

三、外空（不動）

四、内外空（不退）

五、空空（不轉）

六、大空（如虛空）

七、畢竟空（無所有性）

八、一切空（一切言語道斷）

九、有爲空（不生）

一〇、無爲空（不出）

一一、無始空（不起）

一二、性空（無名）

一三、相空（無相）

一四、不可得空（實無所有）

一五、有法空（無量）

一六、無法空（無邊）

一七、有法無法空（無礙）

一八、散空（無障）

エ、境智を結成す

### 三、偈を以て重説す

1、重説（略）

2、身安樂行者の不怯弱の説法を明す

い、標

ろ、釋

は、結

### 四、第二口安樂行を説く止勤の二法あり

第六講 提婆品・勸持品・安樂行品・從地涌出品

1、止行

い、他の人法の過を説かざれ  
ろ、諸餘の法師を輕慢せざれ  
は、他人の好惡長短を説かざれ  
に、怨嫌の心を生さざれ

2、作行、但だ大乘を以て答へよ

五、偈を以て重説す

1、重説

い、止行

ア、不輕慢を頌す

イ、不説長短を頌す

ウ、不説人法を頌す

エ、無怨嫌を頌す

ろ、作行、所作の觀行

2、口安樂行者の弘經の無難と功德

い、行成を票す

ろ、大難なきを明す

は、行成を明す

に、功德を明す

六、第三意安樂行を説くに止作の二を明す

1、止行

い、不嫉妬

ろ、不輕罵

は、不惱亂

に、不諍競

2、作行

い、大悲の心を起せば嫉妬なけん

ろ、慈父の想を起せば輕罵なけん

は、大師の想を起せば惱亂なけん

に、平等に法を説けば諍競なけん

3、止作の行を結成す

い、自意に惡を止む故に他より惡加はらず

ろ、此の安樂の觀行に住せば勝聽衆を得ん

七、偈を以て重説す

八、第四誓願安樂行を説く、誓願境と、由と、立との三あり

1、誓願の境を出す

い、慈誓の境、在家出家に互る

ろ、悲誓の境、此の道を得ざる流轉の一切に被る

2、誓願を起す來由を明す

い、慈誓を起す由を明す

ろ、悲誓を起す由を明す

3、正しく誓願を立つるを明す

4、誓願安樂を結成す

い、弘經に過失なきを明す

ろ、慈悲成就を明す

は、慈悲誓願の成就を釋す

九、四行成就の功德大なるを明すに經の妙を以て歎す

1、法説もて此の經の聞き難きを歎す

2、轉輪聖王は髻中明珠を與へざる譬を開す

3、譬を法に合して如來法華經を説かざるを明す

4、輪王大功ある者には明珠を與ふ譬を開く

5、譬を法に合して如來法華經を説くを明す

十、偈を以て重説す

1、重説(略)

2、行成功徳の相を結ぶ

い、四法に住すべきを結勸す

ろ、三障轉じて清淨となる

ア、報障轉じて現世の色心淨し

イ、業障の因を轉じて來世の生報を轉す

ウ、煩惱障轉じて後報を轉す

一、三毒を轉す

A、貪障轉じて人に樂ばる

B、瞋障轉じて刀杖加はらず

C、癡障轉じて智慧光明あり

第六講 提婆品・勸持品・安樂行品・從地涌出品

二、夢中にも但だ妙事を見る

- A、十信に入るを夢む
- B、十住に入るを夢む
- C、十行を修するを夢む
- D、十回向の位を悟るを夢む
- E、夢に十地に入る
- F、妙覺に入る(八相あり)

3、安樂行の功德成就を總結す

本日は「法華經」第五卷の安樂行品第十四であります、これは「法華經」の迹門の中の流通分の終りであります。此の前の「勸持品」の時に、藥王等の菩薩が、此の娑婆世界の弘通を誓願し、それから阿羅漢達及び八千の聲聞達が、此の娑婆世界では我々が弘通することは出来ないとして、他土で弘通したいと申上げた、それから又比丘尼達が矢張り自分達も他土で弘通したいと申上げた、そこで佛様は八十萬億那由他の菩薩の顔をジロリと見られた、その見られたのは何等か深重な御意志がありさうである、藥王菩薩は身命を惜しまずして弘通するといはれた、けれどもその誓願の語がまだ不満足だといはんばかりに、八十萬億那由他の菩薩の顔を見られた、そこで八十萬億那由他の菩薩が佛の神力の故に、座を立って誓願申上げた、その誓願には、如來の滅後畏怖の惡世の中に於て此の經を弘通する場合には世をあげて皆「法華經」の弘通者に迫害を加へる、一切の俗人は刀杖互石を以て命にも及ぼんとするやうな

迫害を加へる、一般の僧侶は彼等は、外道の教を説くものだから佛教ではない、斯ういつて誹謗するであらう、更に又聖人の如くに思はるゝ高僧達、それは殆ど世をあげて六通の羅漢の如く思はれて居る、それらの者が——これは唯惡口をいふだけでなしに、國王大臣婆羅門居士等に向つて、「法華經」を説いて居る者のことを外道の論議であるといつて訴へ終には寺を迫出さすだけなく所を迫出す、又その國から迫出してしまふだらうといふやうな、三類の強敵——一般の俗人、僧侶、それから高僧、それまでいッたならば世を擧げて全然みんなが反對し迫害するわけです、それを耐へ忍んで必ず到る所で此の「法華經」を説くでありませうと、我身命を愛せず但無上道を惜しむといふ、なか／＼恐ろしい、弘通の相を説かれた。

それでは何故佛が八十萬億那由他の菩薩をジロリと見られて、さういふことを言はしたのであらうと考へますと、これを「寶塔品」に溯つて考へて見ますと、斯ういふお説がなければならぬ筈であります、「寶塔品」に六難九易が説かれてゐます、此の「法華經」を弘通するといふことは非常にむづかしい、それは有頂天に立つて澤山の一切經を説くよりも難しい、或は世をあげて火となつて居るやうな劫燒の時、枯草を背負ふて入つて焼けないよりも難しいといふやうな、さまざまの難しいことが九つも説かれ、それは尙易しい、末世に於いて「法華經」を説き或は書き、或は人に書かせるといふことは、それよりも難しいといふことが説かれてあります、それは唯二萬の菩薩が身命を惜しまず説きます、人が弊惡で佛のいふことを聞かんものです位では、六難九易とは釣り合はない、六難九易ほどのことが説かれてある限りはそれと同じ位な事柄が出て來なければならぬ、それで「勸持品」の八十萬億那由他の菩薩の誓願は、恰度六難九易に當てはまる程の弘通のむづかしさがわかつて來たのであります。

そこで今日は「安樂行品」です、此の「安樂行品」といふ經は何ういふことを説かれたかといひますと、「初心の法、危害を慮らず」——さういふ難しい修行だと、とても初心の菩薩は修行することは出来ない、さう難しくはたまらないといふので、初心の菩薩が皆恐怖れの心を生ずる、此の娑婆世界の恐怖悪世の中で説くことは、とても我々には及ばないといふ風に、皆怖しい心を生ずる、そこで其の怖しさを感じた初心の菩薩、その初心の菩薩のために弘通法を説かれたのがこの安樂行品であります。

### 一、文殊初心の爲に弘經の方法を請ふ

「爾の時、文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊よ、是の諸の菩薩は甚も爲有難し」

これは八十萬億那由他の菩薩を讀めていふのです、佛に敬ひ順ふが故に、佛の御思召といふものを汲みとつて、三類の強敵の中でも此の「法華經」を説きませうと大誓願を發した、そして後の悪世に於いて此の「法華經」を護り持ち、讀み誦んじ、説かんとしたことは、實に結構なことでありますが、然しながら世尊よ、そのやうな難しいことは出来ない人間もございます、そこで菩薩摩訶薩は後の悪世に於て、云何にしてかさういふ難しい弘通法でないものはございませんでせうか、能く是の經を説かむ——お經はすべて露骨には書かれてゐない、「初心の菩薩の爲めに」とは書いてないが、文の底を讀むとさうなつて居ると、天台、妙樂兩大師はいはれて居ます。

「云何してか能く是の經を説かむと」

さういふ迫害を餘り受けない弘通法はございませんでせうか、さうでないといふ初心の菩薩はこれを修行することは出来

ないでせうからと、文殊菩薩が初心の菩薩の爲に、初心弘通の方法を問ふたのであります。

### 二、佛四安樂行の第一身安樂行を説く

そこで佛様が四安樂行を説かれた、それはさういふ迫害を受けないところの説き方もある、それには四つの方法がある、四つの方法によつて安樂に説くことが出来るといふので、佛がこれから四安樂行といふものを説かれるのです。

「佛、文殊師利に告げたまはく、若し菩薩摩訶薩、後の悪世に於て是の經を説かんと欲はば、當に四つの法に安住すべし」

その四安樂行の第一はどういふことだといふと、身安樂行——身の安樂行で、説くには先づ説く前に、身體の所から安樂の住處に於いて説くことを考へなければならぬ、と教へられました。

「一には、菩薩の行處と親近處とに安住ひつゝ、能く衆生の爲めに是の經を演説くべし」

一には身安樂行ですが、此の身安樂行には二つの方法がある、一つは行處といひ一つは近處といふ、さういふ二つの方法があります、それで先づ行處を説かれました。

「文殊師利よ、云何か菩薩摩訶薩の行處と名くるや」

菩薩摩訶薩はどういふ風な、身體の修行をする處に居つたらよいか、それを先づ説かれました。

「若し菩薩摩訶薩、忍辱地に住り柔和善順にして、而も卒業ならず、心亦驚かず。又復法に於て行する所無く而て諸法の如實の相を觀じ、亦不分別をも行ぜざる。是を菩薩摩訶薩の行處と名く」



といふのは、これは一ばん最初に『忍辱地』とあるやうに、一切どんな難しいことでも、先づ耐へ忍ぶ忍辱心を決定しなければならぬ、その忍辱心を決定するのには何うするのであるかといふと、先づ其の忍辱といふことに二つあります。詳しくいふと長くなりますが

生忍  
法忍

斯う二つあります、生法二忍、それをどうして行するのであるかといふと、先づ柔和善順、やさしく素直である——これは身體のことを先にいはれたので、而不卒暴——而も卒暴ならず——これは口の方。心亦不驚——心亦驚かず——これは意。斯ういふ忍辱には三つの條件があります、それから其の忍辱を、どんな風にでも、平常身が素直でなだらかで、口には卒暴なことをいはず、而も心はどんな難しいこと、迫害が来ようが誘惑が来ようが少しも驚かない、周章ないといふやうなことは、一體どうして出来るのかといひますと、それは『二空』といッて

生空  
法空

といふ、此の二空に心がチャント落ちつくと、さういふことが出来る、そのことを、『亦復法に於て行する所無く而て諸法の如實の相を觀じ。亦不分別をも行ぜざる』といはれました。

『亦復法に於て行する所無し』といふことは何ういふことだといひますと、自分が道理なら道理と、肯定的に自分の

一つの法をとッて、二進も三進も行かぬといふやうなことになる、道理を必ず自分は行するのだといふやうな決ったことをしない、諸法は皆實相である、どんな道理も皆實相であるといふ、平等空を知ッて居る、その差別相は本來空なのです、それから『亦不分別をも行ぜざる』、それではみんな平等であるから、何も彼も一緒かといひますと、さうではない、チャント分別秩序はあります、それを不空といふ、さういふやうに生空・法空、共に此の不空といふ法に於いて行するところなく、だといッて不分別でもない、一つに拘泥しないけれども、然し其の法の中の差別はチャント知ッて居る、知ッて居ながら何れと決まッては扱はない、さういふ無所著の心、それを行するので、その二空といふもの、その二空といふものにチャント心が安らかになッて居るから、そこでどんな難かしいことがヤッて来ても、身は平常柔和善順であり、口は而不卒暴であり、意は心亦不驚であることを得るのであります。二忍(生忍・法忍)に住することは忍辱の衣、二空(生空・法空)に住することは諸法空の座に坐す、そして一切衆生を導くのであるから大慈悲の室、此の二忍と二空がチャント衣座室の三軌をなして居ます、それが菩薩の行處といふのであります。それから今度は近處

『云何か菩薩摩訶薩の親近處と名くるや』

どんな處に菩薩摩訶薩は近づいて居ればよいかといふと、先づ近づいてよい處をお教へになるのに、反對の近づいてはならない處をお舉げになッた、それがプリントの「親近處を説く」の中「十惱亂を離る」であります。

先づ此の二空・二忍、これは初心の菩薩で、初心の菩薩であるから二空・二忍を教へられたのです、後心の菩薩であれば、頭からどんな難しい處に行ッてもよい、けれど初心の菩薩であるから、先づ成べく此方に難しいことの出て來

ない方法を講じなければならぬ、そこで近づいていゝ處に對して、先づ近づいては悪いところをあげられてあります、  
『菩薩摩訶薩は、國王、王子、大臣、官長に親近かざれ』

さういふ世の中の位地名望のあるものゝ處に近づいてはいけない、どうしてそんな處に近づいてはいけないかといふ  
と、さういふ者の處に近づくと、自ら傲慢の心を起すやうになる、俺は位地が上だそんな平民のためには話さない、  
偉い人のために話すといふやうなことになる、だから先づ豪勢の人に近づいてはならない、それから

『諸の外道、梵志、尼犍子等、及び世俗の文筆、讚詠の外書を造り、及び路伽耶陀、逆路伽耶陀の者に親近かざ  
れ』

諸の佛法でない外道の者、或はいろ／＼な梵志——四章陀といつて印度の古典、その四章陀を行じて居るところの  
者、尼犍子といふのは、これは四章陀に反對した、尼犍子といふのは、裸形外道で、外にその一派から出た尼犍子若  
提子といつて釋尊と一緒に利帝利の王族から出たものがある、やはり、婆羅門に反對した教義を説いたチャイナ教の  
祖——その尼犍子や若提子、婆羅門の教義もいけない、それから尼犍子もいけない、さういふものに近づいてはいけな  
い、更にそれだけでなしに世の中の文藝など——印度には當時矢張り藝術があつた——さういふものに近づいてはい  
けない、それから路伽耶陀といふのは世俗の道德だけで足れりとする者、逆路伽耶陀は世の倫理道德に反して自ら道  
として居る者、それらには一切近づかない、それは邪見の人法で、佛法の如く徹底したる法を知らないものである、  
さういふものに近づいてはいけない、これは何の爲めであるかといふと、邪見に侵されない、邪見を離るゝ爲めであ  
ります。

『亦、有ゆる凶戲、相扱、相撲、及び那羅等の種々の變現の戲に親近かざれ』

今日の競技みたやうなもの、そんなものは唯勝負を争ふだけのものである、左様なものに近づいてはいけない、それ  
は何のためであるかといふと、心の散亂することを離れる、唯勝負が面白いといふ一つの面白さだけに心を動かされ  
る、さういふものに近づいてはいけない。

『又旃陀羅、及び猪羊雞狗を畜ひ畋獵し漁捕するなど、諸の惡律儀に親近かざれ』

これは旃陀羅といふのは屠のもの、さういふ者に近づかないやうにしなければならぬ、これは何の爲めであるかとい  
ふと、惡業から離れる、然しながらこれらの人間に近づくな、此方からは好んで近づくなといつても、それでは王様  
だとか、外道だとか、或は競技などをする者、そんな者の爲めには法は説かないかといふと、説かないのではない、  
好んで此方からさういふ者に近づかないやうにしるうといふのであります、然しながら

『如是の人等の或時に來りな者、則ち爲めに法を説きて、稀望む所無かれ』

向ふから何卒伺ひたいといふので求めに來たならば、それは惜しんではいけない、惜しんではいけないが、あゝな  
るやうに、斯うなるやうにといつて稀望ふ心があつてはいけない、出て來たら説いてやるけれども、あゝなるやう斯  
うなるやうといふ稀望心をもつてはいけない。

それから

『又、聲聞を求むる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に親近かざれ』

小乗の教、自分だけが此の世界を脱れようといふ修行をして居る者、さういふ者に近づいてはいけない。

『亦問訊はされ』

それらと交際してはいけない。

『若は房の中に於て、若は經行處、若は講堂の中に在ても、共に住ひ止まらざれ』

さういふところでも決して一緒に住つてはいけない、結局さういふものと一切事を共にすることはいかん、親近してはいけない、離れよ、然しながら

『或時に來りなば、宜しきに隨ひて法を説き、怖求むる所無かれ』

向ふから來た時には話す、然し求むる所があつてはいけない、これは二乘の衆で自利を離れる、自分が先づ苦を脱れよう、さういふ心の者と交はり、さういふ心の者に近づくことは、又自らさういふ心を起す一つの縁が出来る、だからさういふ縁に近づいてはいけない。

次には慾想の相、

『文殊師利よ、又菩薩摩訶薩は、應に女人の身に於ひて、能く慾想を生ずる相を取りて、而ち説法を爲すべからず』

嚴格にチャント則に従つた相で説法せよ、女人が慾想を生ずるやうな相で説法してはいけない。

『亦見んとだも樂はされ。若し佗の家に入らば、小女處女寡女等と共に語らざれ』

佗の家に入つて小女——極く小さい女の子供、さういふ者でも餘り親しくしてはいかん、處女及び寡女、さういふ者はみんな親しくしてはいけない、これは何の爲めであるかといふならば、彼方からでも此方からでも、染着を生じな

いやうにする。

それから今度は、

『亦復、五種の不男の人に近づきて、以て親厚くすることを爲され』

五種の不男といふのは、男であつて男でないやうなもの、これを五つあげられてある、男性であつて本當の男性でないもので、日本にも昔はあつた、さういふ者に近づいてはいけない、何故さういふ者に近づいてはいけないかといふとさういふ不男の者には志操がない男子といふものは勇氣のあること、それから節操が必要である、然るに不男の者は節操をもつて居ない、男らしい志操をもつて居ない、さういふ者に近づいてはいけない、それは無志操を離れるためであります。

それから次は、

『獨り佗の家に入らざれ、若し因縁有りて獨り入る須き時には、但一心に佛を念ぜよ』

これは獨り佗の家に入つて、そして其の家に何か間違ひが起つた、そこに人が殺されて居た、そこで外道が、それはその比丘が殺したのだといった例は幾つもある、だから他人の家に獨りで入ることは佛の禁の中にある、誰かを連れてはいる、さうすれば連れて行つた者が證人になる、獨りポツチ這入ることはいけない、それは危害を離れるためである、然し若し何でも彼でも獨り入らなければならぬやうな時だつたら、一心に佛を念じて入れ。

『若し女人の爲めに法を説かば、齒を露はして笑はざれ』

齒をあらはにして笑ふやうなことは餘りに親しくなる本になるからである。

『胸臆を現さされ、乃至法の爲めなりとも、猶ほ親み厚からざれ、況や復餘の事をや。』

これはどういふことであるかといひますと、機嫌の事を避ける、それから他の愛を生ずるので其の爲めに間違ひを生ずる本になるからいけない。

『年小き弟子、沙彌、小兒を蓄ふことを樂はざれ』

そんなものを養つてはいけない、

『亦、與に師を同じくせんことを樂はざれ』

美少年などと一緒に弟子となることを樂つてはいけない、其は自ら愛を生ずることがいけないからである。

以上が十惱亂を離れるといつて出家の菩薩は「法華經」を惡世に於いて説くには、先づこれだけのことから離れるやうにしない、それが第一條件だ、身體はさういふ處から離れる、さうすると十の悪いことに携はる縁がなくなる、そこで今度は其の時に作すべき事柄であります。

ではどんなことをするのであるかといひますと、

『常に坐禪を好み、閑き處に在りて其の心を修攝めよ』

これが作すべきことである、常に坐禪してその心を修攝する、それは坐禪であるから定である、

『文殊師利よ、是を初の親近處とは名く』

さういふ處には親近く、先づ近づかない處を十あげ、そして閑かに坐禪することを示された、恰度天台大師がはじめ陳の都で説法せられ、陳の皇帝が三度頭を下げて戒を受けた、さういふやうであつたに拘らず、陳を去つて天台山

に上つた、さういふ修行、それが安樂行の修行です、又傳教大師も十九歳で叡山に上つてしまつた、そして叡山で禪定せられた、これは皆安樂行の修行であります。

以上で身體のことはすんだ、さうすると身體に隨つて今度は心の落つき處、それを其の次に説かれてあります、常に禪定を好んで心を修攝するが、どんな風に修攝するかが次に書かれてあります。

『復、次に菩薩摩訶薩は、一切の法を觀するに、空なり』

觀一切法——一切法は境、觀といふのは智慧、これを境智といひます、『一切の法を觀するに空なり』一切の境のものが本當は空なのだ、それをチャント其の空なることを觀する、それが空境だ、空境に空智、その空はどんな空であるかといふと、十八空といふことが説かれてあります、空といふことは何にもないといふのでなくして、何にもないことを又なくする、これは一切の執著を離れることなのです。

『一切の法を觀するに、空なり。如實の相なり』

これは第一義空といふ、

『顛倒せず』

といふことは内空、心が顛倒しない、顛倒の故にあれだといふ差別が出来る。

『動かす』

一切法といふものは動いてはゐない、動いて居るのは唯現象だけが動いて居るので、本當は動かない、不動にして空だ、これを外空といふ。

「退かず」

といふのは内外空。

「轉かず」

といふのは空空。

「虚空の如し」

は大空であります。

「所有る性無し」

は畢竟空で、

「一切の語言の道斷えたり」

は一切空です。

「生ぜず」

といふのは有爲空、

「出でず」

といふのは無爲空であります。一切のものは生じない、不生——そのまゝチャントあるものだ有爲のもの其のまゝある、そのまゝ空であるから不生である、それでは有爲から出てしまふ、無爲といふのはそれは本當は出る必要はない、有爲無爲といふのは色即是空である、

「起らず」(無始空)

「名無し」(性空)

「相無し」(相空)

「實に有る所無し」(不可得空)

「量無し」(有法空)

「邊無し」(無法空)

「礎無し」(有法無法空)

「障つること無し」(散空)

此の十八空によつて、結局は一切のあらゆるものに執著れないといふことで、これを詳しく話すと非常に長くなるから略します。

最後に境智を結成す、これを結局したならば、あらゆる存在といふものも唯因縁を以て有り、有るやうに見えるは要するに或る一つの因縁からあるのです、因縁がなくなつたら其のものもなくなる。

「但だ因縁を以て有り」

だからあらゆるものが有るといふことは、但だ因縁といふことによつて有るので、本體は空である。

「顛倒より生ず」

因縁で有るといふことは何より生ずるといふと、それは一切空を知らない顛倒から出るのである。

「故に、常に樂ひて是やうの法相を觀ぜよ」

即ち十八空の法相を觀ぜよ、一切法は皆これ空なりと觀ぜよ。

「是を菩薩摩訶薩の親近處とは名く」

斯の如く、先づ近づいてはならない處を明し、そして後に近づくべき處を明かし、それから其の近づく内容を明かさ  
れた、それが身の安樂行であります。

三、偈を以て重説す

「爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく」

これは偈を以て重ねて説かれたので、これまで説かれたところが前後して説かれてあります。

「若し菩薩有りて 後の惡世に於て 怖畏無き心もて 此の經を説かんと欲はば、應に行處 及び親近處に入るべ  
し、常に、國王 及び國王の子 大臣官長」

これが第一の豪勢の所、

「兇く險しき戲する者」

これは第三の所、

「及び旃陀羅」

は第四のところ、

「外道梵志を離れ」

は第二のところ、

「亦増上慢の人 小乘に貪著める三藏の學者に親近かされ」

これは第五のところ、

「戒を破れる比丘 名字の羅漢及び比丘尼の 戲笑を好む者 深く五の欲に著み 現の滅度を求むる 諸の優婆  
夷 皆親近くこと勿れ」

これは第六の染著のところ、

「是の若き人等の 好しの心以て 菩薩の所に到りて 佛道を聞んとせば、菩薩即ち 無所畏の心を以て 怖望を  
懷かず 而ち爲めに法を説け」

「寡女處女 及び 諸の不男には 皆親近きて 以て親み厚くすること勿れ」

これは第七のところ、それから

「亦是は 屠る兒魁膾 毘羅漁捕など 利の爲めに殺害ふものに 親近か莫れ」

これは惡律儀、

「肉を販ぎて自ら活り 女の色を衒ひ賣るもの 如是の人に 皆親近くこと勿れ」

これは欲想のところ、

「兇險相撲 種々の嬉戲」

第三のところを重ねていはれた、

「諸の姪女等 盡く親近くこと勿れ 獨り屏れし處にて 女の爲めに法を説くこと莫れ 若し法を説かん時は 戯れ笑ふことを得ること無れ 里に入りて食を乞はむには 一の比丘を將るよ 若し比丘無くば 一心に佛を念ぜよ 是をこそ則ち名けて 行處近處とは爲なれ」

これは第九のところと、第八のところと、第十だけが缺けてゐます。

「此の二處を以て 能く安樂に説け」

それから次のところ、

「又復 上中下の法 有爲無爲 實不實の法を行ぜざれ」

これは行處のところ、

「亦 是男か是女かを分別たす 諸の法を得ず 知らず見ざる 是をこそ則ち名けて 菩薩の行處とは爲なれ」

これから下のところは十八空のところになります。

「一切の諸法は 空にして有る所無く 常住なるもの有ること無し 亦起も滅も無し 是を智者の 所親近處と名く 顛倒してこそ 諸の法は有なり無なり 是實なり非實なり 是生なり非生なりと分別すれ 閑けき處に在りて 其心を修攝め 安住して動かさること 須彌山の如くせよ 一切の法を觀するに 皆有る所無く 猶ほ虚空の如くにて 堅固なること有ること無し 生ぜず出でず 動かす退かず 常住にして一相なり 是を近處とは名く」  
これは十八空を略して説かれたのであります。

次のところは身安樂行者の不怯弱の説法を明す、

「若し比丘有りて」

これは前の長行のところにはなく、偈のところであげられたのです。

「若し比丘有りて 我が滅せし後に於て 是の行處 及び親近處に入り 斯の經を説かん時には 怯弱有ること無かれ」

「勸持品」の偈を聞いたので、初心の菩薩がこれでは難しいと、斯う思つてたじろいた、そこで佛は此の四安樂行をお説きになつた、此の四安樂行にチャント行處も親近處も明されて、此の二つの處に於いて經を説くならば、恐るゝことはない、

「菩薩の時有りて 静けき室に入り 正憶念を以て 義に隨ひて 法を觀じつ 禪定より起ち 諸の國王 王子臣民 婆羅門等の爲めに 開化し演暢して 斯の經典を説かば 其の心安穩にして 怯弱有ること無けむ」

即ち身安樂の行者が、此のやうな行者の住處に住して居つたならば、怯るゝところなく説くことが出来る、  
「菩薩の時有りて、静けき室に入り、正憶念を以て」といふのは、常に十八空を觀じ、そして静かなる處に於いて其の心を修攝めて居る、その修攝したものが、時あつて出て行つて法を説く、そして義に隨つて法を觀じつゝ、禪定より起つて諸の人のために説く、それは此方からは近づかないが、向ふから来るなり、又縁有つてどうか來て説いていたゞきたいといふ時には、行つて説いてやる、國王王子、臣民、婆羅門等の爲めにも出て行つて説いてやる、その場合には心安穩にして怯弱有ること無けん、それは十八空に住して、生空法空、生忍法忍の二つにチャント坐して居るから、そ

それがチャント出来るのであります。

それから結び、

『文殊師利よ 是を菩薩の 初めの法に安住ひて 能く後世に於て 法華經を説くとは名く』

斯ういふ風に、後の世に「法華經」を説くには、先づ身體にそれだけの用心をしろといふのであります。

#### 四、第二口安樂行を説く、止勤の二法あり

次は口安樂行ですが、口安樂行を説くのに止勤の二つがあります。

『又、文殊師利よ、如來の滅せし後、末法の中に於て、是の經を説かんと欲はば、應に安樂行に住すべし』  
今度は口の安樂行として、いけないことが四つあげられて居ます、

『若は口に宣説し、若は經を讀まん時は、樂ひて人及び經典の過を説かざれ』

『法華經』以外の經を修行してゐる者、及び「法華經」以外の經の過を説いてはいけない、これをよく注意する必要がある、

『人及經典過』

斯う書かれてある、——人及び經典の過——過があるといふことをチャント豫想されてあるのです、「法華經」以外の經には過がある過失がある、それだからチャントこゝに過といふことを明らかに書かれてあるので、過失があるからそれを説いてはいけない、過失がないといふのではない、過失がある、あるけれども説いてはいけないといふ。そ

れが第一の口安樂行であります。

「法華經」以外の經は斯ういふ間違ひがある、従つてそれを修行する者も斯ういふ間違ひができる、さういふことを説いてはいけない。

『亦、諸の餘の法師を輕め慢らざれ』

口に説かないのみならず、又心の中でも輕しめ慢らないやうにしないで。次には、

『他人の好き悪き、長たると短たるとを説かざれ』

同じ菩薩の修行をして居る者でも其の好悪長短を説いてはいけない、菩薩でなく聲聞の修行をして居る者に對しては、

『聲聞の人に於て、亦名を稱げて其の過惡を説かざれ、亦名を稱げて其美しきを讚歎へざれ』

讚毀共どツちにしてもいけない。これは必ずしも「法華經」を待たぬところですが、一般の菩薩の戒律の中には、不自讚毀他戒といふのがあります、自らを讚めて他を毀るといふことはいけない、さういふのが一般の菩薩の戒です。

けれどもこれはもつと餘計のことが説かれて居ます、自ら讚めるの反對は他を讚めるで、他を毀るの反對は自らを毀ることで、自分の悪いことを無暗にいふことになりす。ところがこゝでは、他人の好悪長短共に説いてはいけない、他を讚めることも出来ない、自ら毀ることもいけない。

龍樹菩薩の「大論」に、大乘の菩薩の心得が書いてあります、それはどういふことだといひますと自ら讚める自讚といふことは何であるかといふと、それは自ら佛になつてからのことで、佛といふものは自らを讚める、佛ぐらゐ自ら讚める人はありません。如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊は俺だ



といふさういふ十の畏ろしいほどのことを以て自らを讃めて居られる、けれども佛にならない前はみんな自ら讃めない、そこで自ら讃めたらば大人に非ず、菩薩ではない、佛様にならないと自ら讃めることは出来ない、それ以下で讃めたらば大人——菩薩でない、佛を望んでゐないことになる。それでは自分はつまらん者であるといふものがある、さういふ人間はどういふのであるかといふと、さういふやうな人間は、これはまた『自ら毀るは妖論の人』である。さういふことを腹の中で思つてゐないのに、いゝ加減のことをいつて居るので、それは人前をつくらふのである。それでは自ら讃めるのに反對の他を讃める。それはどうかといふと、此の他を讃めるといふ人間は餘程注意してよく考へなければならぬ。それは『詔媚の者』、詔ひの者であるからである。それから他を毀る者は何であるかといふと、『讒賊の人』である、他を毀るがその過は自分もある、その方からいつたならば、自分もあるのに他を毀るから讒ひて居るのだ、それは人を損つてゐるのだといふので、自讃毀他もいけない、けれども讒他自毀もいけない、

自讃——非大人  
 自毀——妖論、人  
 讒他——詔媚、人  
 毀他——讒賊、人

これが大乘の眞の菩薩の心得であるとあります。

そこで、他人の好悪長短を説かされ、好いことをいふのはよかりさうなものだが、『其の美しきを讃歎へされ』とあります、

『又、亦、怨嫌の心を生さざれ』自分に迫害を加へる者があつても反對する者があつても、決して怨嫌の心を起してはいけない、以上がしていけないこと即ち『止』の方で、口安樂行のしていけないことがそれだけあります。これより以下のところは心に屬することです、他の人法の過を説き、諸餘の法師を輕慢するのは、俺は大乘の法を行じてゐるからといふので、憍慢の心が起るからで、それから怨嫌の心があるから他人の好悪長短も説くやうになるといふので、口の安樂行であるけれども其の口の基く心まで、いけないところを止められてある。その次が『勤』すなはち作行で、作すべきことであります。

『善く如是の安樂の心を修むるが故に、諸の聽くこと有らん者、其の意に逆はざらん』他人の好悪長短を説かない、他の人法の過を説かない口にはないばかりでなく、腹の中でも決して輕慢しない、怨嫌しない、さういふ平等にして囚れたる心の少しもない諸法空に坐して居る、さういふ人に對しては、その法を聽く者も、矢張りその行者の心に逆はぬ様になる、迫害しない様になる。

『難問する所有らば、小乗の法を以て答へずして、但大乘を以て而ち爲めに解説し、一切種の智を得しめよ』これが作すべきことです。それでは口の作すべきことは、人が問ふて來たならば、方便の法を説いてはいけない。進んでは人及び經典の過を説かざれとあるから、進んで説かないけれども、向ふから聞きに來たならば、但大乘を以て答へよ、決して相手が喜びさうだからといふので、方便の教を説いてはいけない、必ず大乘を説け。さういふやうにしたならば口の故に迫害を受けるやうなことはない。

五、偈を以て重説す

「爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、菩薩は常に樂つて、安穩に法を説け、清淨なる地に於て、而ち牀座を施き、油以て身に塗り、塵穢を潔ひ浴し、新淨き衣をば著け、内外俱に淨くして」

これは菩薩は、大慈悲を室とし、諸法空に坐す、それから柔和忍辱の衣を著る、此の衣座室の三軌に住して法を説くといふことが「法師品」にもありました。此の前の「勸持品」には忍辱の衣のかはりに鎧であつた、それは折伏の説法だから忍辱の鎧なので、そして矢張り諸法空に坐し大慈悲の室に入つて説くのだと、斯う説かれてあります。今此の「安樂行品」でも矢張り心は此の三軌に従つて居ります。「菩薩は樂つて、安穩に法を説け、清淨なる地に於て」といふ「清淨なる地」といふのは大慈悲の室である、心は大慈悲の室に入るから、自分の居る所は清淨なる地を撰んで居るのだ。そこで其處へ牀座を施く、諸法空の座に坐して居るが如く其處に清淨なる牀座を施く。そして「油以て身に塗り塵穢を潔ひ浴し、新淨き衣」、則ち心は柔和忍辱の衣と同じやうに、新しき衣を著る。そして内外俱に衣座室の三軌に住して説くのだ。

「法の座に安處ひつゝ、問に隨ひて爲めに説け」

これは諸餘の法師を輕慢しないといふことで、輕慢しないから問尋に來たならば、チャント説いてやる、そしてお前などは小乗の人間だから、小乗のことをやつておけといはないで、どんな人間に對してでも大乘のことを説く、そ

れは輕慢しないからであります。

「若し比丘、及び比丘尼、諸の優婆塞、及び優婆夷、國王王子、群臣士民有らば、微しく妙なる義を以て、顔を和らげて爲めに説け、若し難問すること有らば、義に隨ひて而ち答へよ」

これは他人の好惡長短を説かざれで、好惡長短を説かないから、向ふからやつて來る者があるならば比丘であらうが比丘尼であらうが優婆塞であらうが優婆夷であらうが、一切平等に説くのである。

「因縁と譬喩とをもて、敷演べ分別せよ、是の方便を以て、皆發心せしめ、漸漸に増益して佛道に入らしめよ」

といふのは、これは第一の「他の人法の過を説かざれ」といふの、偈であります。

「懶惰き意、及び懈怠の想を除き、諸の憂惱を離れて、慈の心もて法を説け」

これは「怨嫌の心を生さざれ」を偈を以ていはれたのです。

「晝夜に常に、無上の道の教を説け、諸の因縁、無量の譬喩を以て、衆生に開き示して、咸く歡喜ばしめよ、衣服臥具、飲食醫藥、而も其の中に於て、稀望む所無く、但一心に、説法の緣因を念ひ、願ひて佛の道を成し、衆をして亦爾ならしめよ、是れ則ち大利なり、安樂の供養なり」

これは「但大乘を以て答へよ」といふのを、偈を以て説かれたのであります。

これから後のところは矢張り偈ですが長行になかつたところです。

「我が滅度の後、若し比丘有りて、能く斯の妙法華經を演説かば」

此の安樂行に住して能く「法華經」を説く者があつたならば、

「心に嫉恚 諸の惱み 障 無けむ 亦憂ひ愁み 及び罵詈する者も無けむ」

其人の心が既に怨嫌の心なく輕慢の心なく、諸の惱みを離れて居るのであるから、亦憂ひ愁しむことも、向ふから罵詈することもなくなるのである、此方は過失のない修行をして居る、だから向ふからもさういふことはなくなる、

「又怖畏も 刀杖を加へらるゝ等のことも無く 亦擯け出さるゝことも無からむ 忍に安住ふが故ぞかし」

これは恰度前の「勸持品」とは反對です。「勸持品」は刀杖を加へられ擯出されるのですが、こゝでは「安樂行品」のやうな修行をして居ればさういふことはない、刀杖を加へられることはない、又擯出されることもない。それは何故かといふならば、「忍に安住ふが故ぞかし」、進んで向ふの邪見を摧破するのでなく、出て來たら説いてやる、それまでは説かない、斯ういふやうなことでヤツてゐたら、人及び經典の過を説かないから、擯出もされないし刀杖も來な

「智き者は是の如く 善に其の心を修め 能く安樂に住ること 我が上に説くが如けむ」

忍に安住うて居る爲めに、さういふやうな修行をするのである、その修行をして居るから迫害が來ないのである。

「其の人の功德は 千萬億の劫に 算數譬喩もて 説くとも盡すこと能はじ」

かくて此の安樂行の功德常住を示されたのであります。

### 六、第三意安樂行を説くに止作の二を明す

次は意の安樂行ですが、これにも矢張り止作の二つがあります、

「又、文殊師利よ、菩薩摩訶薩、後の末世に法の滅びんと欲する時に於て、斯の經典を受持ち讀誦んぜん者は」  
こゝで一寸注意しておく必要があります、此の前の第四章のところには

如來滅後於末法中

「如來の滅後末法の中に於て」といふことが書かれてあります、それから今度第六章のところには、  
於後末世法欲滅時

「後の末世に法の滅びんと欲する時に於て」とあります、日蓮聖人の教義によりますと、末法といふ時は「勸持品」のやうな折伏の修行をする筈である、此の「安樂行品」の修行は像法——末法の前の像法の修行である、斯ういふ風にいはれて居ます。ところがお經を見ると「末法」といふ、それから「法滅せんと欲する時」、斯う書いてあります、これはどうも違ふではないかといつて、矢張り末法にも攝受の修行といふのがあるではないかなどといふものがあります。そこでこれを一寸解釋しておきます。此の「法欲滅時」といふのは「安樂行品」の正しい時なのです、「法欲滅時」といふのは末法にならんとする前だから法滅せんと欲する時で、末法は法滅の時なのです。「末」といふことはどういふことだといふと、末とは「滅無」に名く、何が無くなつた時だといへば、法が無くなつた時だ、一般に「大集經」に所謂「白法隱沒」といふ、「隱沒」とは滅沒といふことで、功德がなくなる、お經はあるがお經の功德はなく、佛の像はあるが其の功德がなくなる、それが末法だ。此の「安樂行品」の修行の時は、其の末法の前の法滅せんと欲する時、これから無くならうとする時、さういふ時は像法の中からその末に屬する、中及び末であります、恰度天台大師が出られたのは像法の中ほどです、傳教大師の出られたのは像法の末です、即ち法滅せんと欲する時であ

ります、そこで傳教大師は『末法太近キニ有リ』といはれました。

それでは前の第四章の『於末法中』——末法の中といふのはどうだ、第六章では『法欲滅時』とあるが、前には末法の中とある、然しこれは又別物です、此の方は

『末法ニ攝受折伏アルベシ』（開目抄）

斯う大聖人もいはれて居ます、大體は末法は折伏の時だけれども、末法にも攝受のないことはない、それはどんな時に攝受があるのかといふと、惡國もしくは謗法の國には折伏、善國もしくは無智の國には攝受、斯ういふことになります。大聖人の時のやうに、「法華經」があるのに、佛法の中に於いて「法華經」はもう時に約して役にたぬ、或は「法華經」は月をさす指であるから役に立たぬ、或は「法華經」は顯教であつて密教でない、無明の邊域であるといふ風に、「法華經」を知つて居ながら其の「法華經」を貶す、さういふのを謗法といふ、その謗法の國には折伏でなければならぬけれども、佛法も何もない今の西洋のやうなところ、さういふやうな所は佛法からいふと無智の國です。西洋は無智だといふと變ですが、佛法からいふと無智です、佛教のやうな深き眞の哲學的宗教はない。その方からいつたならば小乗でも西洋人は有がたがる、まして小乗から大乘を見ればすつと深いものだ。西洋はまだ「法華經」を謗るところまでは行つて居ない無智だ。さういふ所に行つて折伏しても何にもならない、攝受でよろしい、「末法ニ攝受折伏アルベシ」、それは無智の國と邪智の國があるからである、斯う大聖人が仰しやつてあります。

さういふ國があるから、『末法の中』といふこともありませんが、然し正しくいへば攝受——「安樂行品」の修行は、『法滅せんと欲する時』に必要なのであります。

「後の末世に法の滅びんと欲する時に於て、斯の經典を受持し讀誦んぜん者は」

心ばえはどんな心ばえで居る必要があるか、それは先づ第一に

「嫉妬詭譎の心を懷くこと無かれ」

それから次には、

「亦、佛道を學ぶ者を輕め罵り、其の長たと短たとを求め勿れ」

輕しめ蔑らない、それから、

「若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、聲聞を求むる者、辟支佛を求むる者、菩薩の道を求むる者には、之を惱まして、其をして疑悔いしめ、其の人に語りて汝等道を去ること甚ど遠し、終に一切種の智を得ること能はじ。所以者何となれば、汝は是放逸の人なり、道に於て懈怠れるが故にと 言ふことを得ること無かれ」

これは、其の通りなのだが其通りいつてはいかん、若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷が、或は聲聞とならうと思ひ、辟支佛とならうと思ひ、菩薩にならうと思ふ、即ち三乘の教に拘泥して居る者がある、さういふ者に對しては、それは佛の教ではないのだぞ、さういふことをやつて居たら一切種智を得ることは出来ないぞといつて、これを破折して丁ツてはいかぬ。汝等は放逸の人である、何となれば佛の本當の心を知らぬからである、即ち道に於いて懈怠ツて居る佛の本當の心をも求めようとしたいではないかといつて責めてはいけなう。

「又、亦、諸法を戲れ論じて、諍ひ競ふ所有るべからず」

諍ひ競ふてはいけない、お前の法は足らん、此方が勝れて居るといつて、彼等とあらはに議論を交へることをやつて

はいかん、但し彼等から「法華經」を否定して來た時には、これを導かなければならぬ。然し此方から進んでは論じない、以上がしていけないことで、其の意に於いていけないことを四つ説かれました。

今度は作すべきことであります。

『當に一切の衆生に於て大悲の想を起し』

これらの一切衆生は未だ佛の御心たる「法華經」を知らない、如何にも可哀さうなものではないかと、斯ういふ大悲の心を起したならば、彼を嫉妬詭詐やうな心はなくならなければならぬ。

『諸の如來に於て慈父の想を起し』

彼等もいふこと思へ(彼等もいふこと思へ)

慈父の想といふのは、如來に慈父の想をするのは當然ではないか、何故斯ういふことが書かれてあるのかといふと、「法華經」からいつたならば、未だ「法華經」を知らない外の小乘、權大乘、もしくは外道の教になづんで居る者、さういふ者でも「法華經」の意味からいつたならば、必ず彼等は將來佛になるべき筈である、「諸の如來」といふことは、だから一切衆生は未來の佛だ、やがて佛になるから未來の佛だ、「諸の如來」といふ中には未來の佛も含んで居るから、彼等も未來の如來だと思へ、そして慈父の心を起せ、さうしたならば彼等を輕罵めることはなからう。

『諸の菩薩に於て大師の想を起すべし。十方の諸の大菩薩に於て、常に應に深き心に恭敬し禮拜すべし』

これはどういふことだといふと、彼等はまるで「法華經」を知らない、「法華經」を行じて居なくてもやがて「法華經」を行することは定つて居るのである。さうすると矢張り彼等が未來の菩薩だ、その點から彼等に對して憍亂してはいけない、又諸の菩薩といふものは、さまざまの姿をあらはして行するものだ、又外道の儒者の教でも、三人行へば

即ち我師ありといふ、それと同じだ、だから小乗の教、外道の教の間違つたことをして居つても、それが又わが一つの師ともなる、斯う觀すれば彼等を憍亂することはない。

『一切の衆生に於て、平等に法を説きつ、法に順ふを以ての故に、多くもせず少くもせず、乃至深く法を愛づる者にも、亦爲めに多く説かざれ』

一切衆生に向つて平等に法を説け、此の人間は大變よく解る人だから餘計説いてやらう、解らない人間だから少し説いておこう、といふやうな差別の心を根本から去り拂つてしまはなければならぬ、平等に法を説いたならば諍競の心がなくなる。

さういふ四つの作業、作すべき事柄をお説きになりました。それから次には「止作の行を結成す」

『文殊師利よ、是の菩薩摩訶薩の後の末世に法の滅びんと欲する時に於て、是の第三の安樂行を成就すること有らん者は、是の法を説かん時、能く憍み亂すもの無けむ』

此方が相手を惱ます亂さないから、向ふもさうしない、安樂に法を説くことが出来る、今度はその功德です。

『好き同學の、共に是の經を讀誦するものを得ん。亦、大衆の而ち來りて聽き受け、聽已りて能く持ち、持ち已りて能く誦んじ、誦んじ已りて能く説き、説き已りて能く書き、若し人をしても書かしめ、經卷を供養し、恭敬し、尊び重め、讚歎ふるものを得ん』

さういふ者が、本當に自分の同學にも隨順する者が出来、それから教を聽いて居る者にも、さういふ風に聽いては受け持ち、そして能く誦んじ、能く説き、よく書き、又人の爲めに説くやうな人間も出て来る、即ち此の安樂行の觀行

に住せば、聽衆中に縁の勝れた者が來たるであらうといふのであります。

### 七、偈を以て重説す

次は偈を以て重ねて説かれる、

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、

若し是の經を説かんと欲はゞ、當に嫉と悲と、慢と諂誑と、邪偽との心を捨て、常に質直なる行を修めよ』

これは嫉諂なし、嫉諂を離れる、それから

『人を輕め蔑らす』

これは輕罵を離れる、

『亦法をば戲論せず』

諍競を離れる、

『佗をして疑悔いしめて、汝は佛を得じと云はざれ』

憒亂を離れる、

『是の佛子法を説かんに、常に柔和にして能く忍び、一切を慈悲みて、懈怠の心を起さざれ』

これは作業の大悲の心

『十方の大菩薩は、衆を慈むが故に道を行す、應に恭敬の心を生ずべし、是れ則ち我が大師なりと、諸の佛世尊

に於ては、無上の父の想を生ぜ、憍慢の心を破りて、法を説くに障礙無からしめよ、第三の法は是の如し』

これは前に説いた通りです。

『智あらん者は應に守護るべし、一心に安樂に行ぜば、無量の衆に敬はれなん』

即ち安樂行の行者を讃歎せられたのです。

### 八、第四誓願安樂行を説く、誓願境と由と立との三あり

次は第四誓願安樂行を説く、それには誓願する境——相手方と、それから其の誓願がどうして出て居るのであるかといふ由來と、それから誓願を立てるとの、三つがあります。

『又、文殊師利よ、菩薩摩訶薩の後の末世に法の滅びんと欲する時に於て、法華經を受持つこと有らん者は』

今度第四には、どういふことが必要であるか、

『在家出家の人の中に於て、大慈の心を生し』

境には在家出家、その在家出家は佛法のあらゆる小乗から權大乘のすべての菩薩行を修行してゐるもので、それに對して大慈の心を生ぜ。これを慈境といふ、それから

『非菩薩の人の中に於て、大悲の心を生し』

非菩薩に對しては大悲の心を生ず、非菩薩は小乗を修行する者であつて、これを悲境といひます、どうして慈境と悲境となつて居るのであるかといひますと、小乗の者は大乘を失つて居る、仍でこれに對しては悲しみの心を生ず、慈

境の方は在家出家共に矢張り大乘を行じて居る、然し大乘ではあるが本當の大乗にはならない、「法華經」ではないから本當のものとはいへないが「法華經」から見たら小乗であるが、然し利他の菩薩の行をして居る人々です。悲境の方は非菩薩だからこれを悲しむ、慈境の方は佛になる修行をして居るから、これは慈しむ、

『應に是の念を作すべし』

これから次は誓願を起す由來です。

『如是の人は、則ち爲大いに如來の方便して宜きに隨ひて説きませる法を失へり』

これは、慈境の相手方は所謂方便の大乘である、さういふことをばよく知らない、如來が方便して宜しきに隨つて説きたまふ法であることを、よく知らない、そして自分の修行して居るものを本當の教だと思つて居る、これは慙むべきである、だからこれに對しては本當の大乘を知らしめる。更に非菩薩の教——自分だけが此の世界を出ようと思つて居る聲聞緣覺の教、それを修行して居る者に對しては、これはまるで自分も佛になれるのだといふことを忘れて居るのだから、大乘のダの字も知らない。慈境は佛になれるといふことは解つて居るけれども、佛になるのには必ず「法華經」でなければならぬといふことがわからない、悲境の方は佛になれるといふことをも知らない。

『聞かず、知らず、覺らず、問はず、信ぜず、解せず』

それは眞の大乘といふものをば聞かず——此の前にも一度お話しましたが、聞思修の三慧、佛法では此の三つが必要です、先づ教を聞く、聞いたならば其の教の聞いたところをよく深く思ふ、思ふのみならず心に實行してみる、此の三つのがあつて始めて其の道に入ることが出来るのでありますが、『聞かず』では聞慧がない、それから『知

らず』、聞かない位だから知らない、知らないから思ふことも出来ない、だから隨つて『覺らず』で修することは出来ない。聞かないから聞慧がない、だから佛になるのはどうするものだといふことを問ふ力もないから、『問はず』、隨つて又どういふことであると知ることが出来ないから『信ぜず』、『解せず』、覺るといふこと解するといふことは修慧に屬する、知るといふこと信するといふことは思慧に屬する、問ふといふことは聞慧に屬する、成佛といふことについて、聞思修の三慧の全然ない者が小乗のもので、それは可哀さうである。

此の在家出家の慈境と、非菩薩の悲境、此の二つが「法華經」を修行する相手方だ、そこでこれに向つて誓願を立てる、それが次のところだ。

『其の人は是の經を、問はず信ぜず解せずと雖、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時は、隨ち何の地に在らんも、神通の力と智慧の力を以て、之を引きて是の法の中に住ることを得しめん』

あらゆる一切衆生にさういふ願を立てる、今は彼等は問はず、信ぜず、解せずだけれども、自分が阿耨多羅三藐三菩提を得る時は、きつと彼等を、神通と智慧の力で、どんな所にあつても、此の「法華經」によつて成佛せしめてやるぞといふ誓願を立てる、それが誓願安樂行の根本であります。

今度は誓願を結ばれる、

『文殊師利よ、是の菩薩摩訶薩の如來の滅したまへる後に於て、此の第四を成就すること有らん者は、是の法を説く時、過失あること無けん』

未だ聞きもしない、又隨つて知らない、覺らない、問はず、信ぜず、解せず、さういふ者に對してすらも、きつと成

佛せしめてやらすにはおかないといふ、根本の誓願を生ず、まして問ひに來た者に對してをや、此の誓願あるが故に、自分の身口意の修行が進んで彼等を導くことが出来るのであります。

『是の法を説く時、過失あること無けん』

自分の教を聞かない者に對してすらも、さういふ誓願を生ずのである、まして聞く者に對してをや、まして自分に縁のある者に對してをや、その意味から前の身口意の三つの修行も行じて行くのであります、さうすれば過失がない。

『常に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、王子、大臣、人民、婆羅門居士等に供養せられ、恭敬はれ、尊び重め、讚歎へらるゝを爲ん』

此の誓願に住して身口意の三安樂行を成就する、斯ういふ場合には此方からは進んで國王大臣等には親近かないのだけれども、彼等の方から自ら慕つて尊重るやうになる。これは恰度天台大師が、先刻申上げたやうに、金陵で陳王のために三度禮拜されるやうになつたけれども、天台山におはいりになつた、然しおはいりになつてからでも、後には又時に出て來て法を説かれた、それは隋の煬帝などが、まだ晋王廣といつた頃に、どうかお願ひしたいといふ時に説いた。その結果煬帝は天台大師に智者の號を奉つた、傳教大師も亦矢張りその通りです。

それからさういふ國王、王子、大臣、人民、婆羅門居士等が供養するのみならず、

『虚空なる諸の天も法を聽かんが爲の故に亦常に隨ひ侍ふべし。若し聚落、城邑、空閑、林の中に在るとき、人有り、來りて難問せんと欲は者、諸の天は晝夜、常に法の爲の故に、而ち之を衛護りつ、能く聽く者をして、皆歡喜を得しめん』

どうしてさういふ慈悲に常住し、大法を弘めることが出来るのかといへば、

『所以者何となれば、是の經は一切の過去未來現在の諸佛の、神力をもて護りたまふ所なるが故なり』

であるから、其の經をば修行する方法たる衣座室の三軌によつて行する場合には、その衣座室の三軌が此の「安樂行品」のやうな、やさしい衣座室の三軌であるやうな場合もあるし、又「勸持品」のやうな場合もあるが、必ずその三軌によつて修行したならば、一切の過去現在未來の諸佛が、必ず神力を以てお護りになる、だから若しは攝受の行の時も功德を成就することが出来る、若しは折伏の行の時も功德を成就することが出来る。

以上が誓願安樂行の成就であります。

### 九、四行成就の功德大なるを明すに經の妙を以て歎す

そのやうな四安樂行が成就して諸佛神力の加護を得て化益成就するのは何故であるかといふと、此の經の功德による、それは「法華經」の功德なのである、どうして「法華經」はそんなに功德があるのであるか、其のわけを今度はお説きになる、

『文殊師利よ、是の法華經は、無量の國の中に於ても、乃至名字をだも聞くことを得べからず。何に況んや、見ることを得て、受持ち讀誦んすることをや』

澤山の世界があるけれども「法華經」を説かない世界が多い、「法華經」を説く世界はその現在の時に於ては頗る稀なのである、



『文殊師利よ、譬へば力強き轉輪の聖王の、威勢を以て諸國を降伏せんと欲ふに、而も諸の小王其の命に順はざらむ。時に轉輪王種々の兵を起し、而ち往きて討伐するに、王、兵衆の戦ひて功ある者を見れば、即ち大ど歡喜び、功に隨ひて賞賜はるに或は田、宅、聚落、城邑を與へ、或は衣服、嚴身の具を與へ、或は種々の珍寶、金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、象馬、車乘、奴婢人民を與ふれど、唯譬の中なる明珠のみは、以て之を與へず』  
轉輪聖王は自分の譬の中の明珠は與へない、

『所以者何となれば、獨り王の頂上に此の一の珠有り、若し以て之を與へば、王の諸の眷屬必ず大に驚きて怪しまむが如し』

恰度その譬のやうに、文殊師利よ如來も亦復是の如し——これは譬を開かれた、『無量の國の中に於ても、乃至名字をだも聞くことを得べからず』といふ所は、法説を以て此の經の聞き難きを歎するので、今のところは轉輪聖王譬中明珠を與へざる譬であります。

その次は、

『文殊師利よ、如來も亦復是の如し。禪定と智慧との力を以て、法の國土を得たまひつ、三界に王たり』  
恰度轉輪聖王の如くに、佛は、法の上に於ては其の全體の統一者である、一切の法の統一者である。

『三界に王たり。而るを諸の魔王背て順ひ伏せず』

『諸の魔王』といふのは、此の前申上げたやうに迷ひのことで、諸の魔王即ちさまざまの迷ひの世界の者共が順ひ伏せず、

『如來の賢き聖き諸の將、之と共に戰ふ』

聲聞・緣覺・菩薩、さまざまの者が、みんな惡魔降伏の働きをして居る、迷ひを降伏して居る、それはみんな如來の賢き諸將のやうなものである。

『其の功有る者には、心亦歡喜びましつ、四衆の中に於て、爲めに諸の經を説きて、其の心を悦ばしめたまひ賜ふに、禪定、解脱、無漏の根力の諸法の財を以てし。又、復、涅槃の城を賜與へ、滅度を得たりと言ひて其の心を引導き、皆歡喜ばしめたまふ。而も、爲めに是の法華經を説きたまはず』

これは『譬を法に合して如來法華經を説かざるを明す』であります、次は『輪王大功ある者には明珠を與ふ譬を開く』です。

『文殊師利よ、轉輪王の諸の兵衆の大じき功有る者を見れば、心甚ど歡喜び、此の難信の珠の久しく譬の中に在りて、妄に人に與へざるを、而ち今之に與ふるが如く』

大功ある者には、譬の中の明珠を與へる、

『如來も亦復是の如し、三界の中に於て、大じき法の王と爲り、法を以て一切の衆生を教化しつ。賢く聖き軍の、五陰魔、煩惱魔、死魔と共に戰ひて大じき功動有り、三毒を滅し、三界を出でて、魔の網を破しぬるを見なばさば、爾の時、如來も亦大ど歡喜びましつて、此の法華經の、能く衆生をして一切智に至らしめ、一切の世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざりし所なるを、而も今之を説きたまふなり』

此の『一切世間に怨多くして信じ難し』といふ此の語は、矢張り「法華經」の性質を説かれて居ます。何故一切世間

に怨多くして信じ難いかといふならば、「法華經」は如來の眞の覺りの外は、一切の菩薩の覺りすらも否定する。それらは未だ覺らざる魔の眷屬だとする、それをば龍樹菩薩の「大論」に

「除ニテ諸法實相ヲ餘ハ皆名ニ魔事ト」

とある、「法華經」以外のどんな覺りでも、どんな法でも、それは皆魔事である、さういふ嚴密な教なのです。それだから一切世間に怨多くして信じ難い、等覺の菩薩の心でも尙魔事だ、さういふ風にいふところの教である。そこで、「一切の世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざりし所なるを、而も今之を説きたまふなり」と仰せられた。

「文殊師利よ、此の法華經は、是諸の如來の第一の説なり、諸の説の中に於て、最も爲甚深し。末後に賜與ふこと、彼の強力の王の、久しく護れる明珠を、今乃ち之を與ふるが如し。文殊師利よ、此の法華經は諸の佛如來の祕密ませる藏にして、諸經の中に於て最も其の上に在り。長夜に守護して、妄に宣説かざりしを、始めて今日に於て、乃ち汝等が與めに而も之を敷演ぶるなり」

これは「譬を法に合して如來法華經を説くを明す」で、以上第九の「四行成就の功德大なるを明すに經の妙を以て歎す」を終り、次は偈であります。

十、偈を以て重説す

偈を以て重ねて説かれる、

「爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく

常に忍辱を行じ、一切を哀愍みて、乃ち能く、佛の所説たまふ經をこそ演説けよかし、後の末世の時に、此の經を  
持たむ者は、家出家、及び非菩薩に於て、應に慈悲を生ずべし、斯の等の、是の經を聞かず信ぜざるは、則ち爲  
大に失へり、我佛の道を得て、諸の方便を以て、爲に此の法を説きて、其が中に住まらしめんとす、譬へば力強  
き、轉輪の王の、兵戰に功有るには、諸の物を賞賜はり、象馬車乘、嚴身の具、及諸の田宅、聚落城邑、或は衣服  
種々の珍寶、奴婢財物など與へ、歡喜びて賜與ふ、如し勇く健に、能く難き事を爲す者有らば、王は譬の中な  
る、明珠を解きて之を賜ふが如し、如來も亦爾なり、爲諸法の王として、忍辱の大じき力、智慧の寶藏あり、大  
慈悲を以て、法の如く世を化したまふ、一切の人の、諸の苦惱を受けて、解脱を求めんと欲ひ、諸の魔と戰ふこ  
とを見はしつ、是る衆生の爲に、種々の法を説き、大じき方便を以て、此の諸の經を説きたまふ、既に衆生の  
其の力を得已れるを知らしめしては、末後に乃ち爲に、是の法華を説きたまふこと、王の譬なる、明珠を解きて  
之に與へむが如し、此の經こそは爲尊けれ、衆經の中の上なり、我常に守護して、妄に開き示さず、今正しく是時  
なれば、汝等が爲めにぞ説くなる」

こゝ迄は先の長行中にあつた多くのことを述べ、次からは行者の功德で、即ち四安樂行が成就してそれがどんな功德であるかといふことを説かれます。これは長行に説かれてありません。

「我が滅度の後、佛道を求めむ者、安穩に斯の經を、演説くことを得んと欲はゞ、即ち四安樂行に住して」

「應當に是の如き、四の法に親近くべし」

先づ四法に住すべきを明かされました、さうするとどんな功德が出るかといふと、三障轉じて清淨となる、三障といふのは、煩惱障、業障、及び報障で、報障といふのは自分が生れる前からの、過去の善因惡因が現在の果報になつて居る、その果報が現在に轉ずる、それから業障といふのは、現在の善惡の事柄をなして居る、それが來世になつて報となつて轉ずる、煩惱障は轉じてまた業報を轉ずる、その三つが皆轉ずることをいはれて、

「是の經を讀まん者は 常に憂惱無く 又病の痛も無く、顔の色鮮白ならむ」

これは現在さうなる、四安樂行をしたならば、常に憂ひ惱みがなくなる、心の惱みがなくなると共に身の病もなくなる、そして顔の色は常に鮮白な色をして居る、これは現在の報障を轉じたものであります、それから、

「貧窮もの 卑賤もの 醜陋ものに生れず」

現在の業障が、今度生れて來てもそんな貧窮の者には生れない、又卑賤醜陋の者にも生れない、それから今度は煩惱障が轉じてしまふ、その煩惱の一ばん大なるものは貪瞋痴、貪欲と瞋と愚痴だ、それが轉じてしまふ、どう轉ずるかといへば

「衆生の見んと樂ふこと 賢聖を慕ふが如くならむ 天の諸の童子 以て給使を爲ん」

衆生が見んことを樂ふ、それは貪欲の性が轉じて人に喜ばれる、貪欲の人間は人がこれを憎む、然るに貪欲の性がなくなるから、人がこれを見んことを樂ふ、

「双も杖も加はらず 毒も害ふこと能はじ 若し人惡みて罵らば 口則ち閉塞がらん」

彼等が悪口いはんとしても口が閉塞してしまふ、言つたところで直ぐ打ち消す者が出て來る、

「遊行るに畏無きこと 師子王の如く」

これは瞋恚の心がなくなつてしまつたから、他人がそれに對して刀杖を以て害するといふことはなくなる、

「智慧の光明は 日の照すが如くならむ」

愚痴の心が轉じて智慧光明——佛の智慧が自からその行者に移つてしまふ、そして其の智慧の光は、日の照すが如く道理がはつきりわかるのです。

以上が現在の果報で、此の四安樂行の修行をした結果はさうなる、今度は現だけでなしに、

「若は夢の中に於ても、但妙なる事を見ん」

それでは何んな妙なる事を見るのであるかといふと、

「諸の如來の、師子の座に坐し、諸の比丘衆に 圍繞されつゝ法を説きますことを見ん」

夢の中でも佛様が説法して居られることを見る、

「又龍神、阿修羅等の數恒沙の如く 恭敬し合掌しつ 自から其の身を見れば 而ち爲めに法を説けると見ん」

龍神阿修羅等の數恒沙の如きが、恭敬合掌し圍繞して居るところが見えた、自分は何處に居るのかといふと、豈はからんや自分が法を説いて居るのだ、そんな風な夢を見る、天台大師はこれを十信の位を得たのであるといつた、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺これを五十一位といふ、その次に妙覺で五十二位、こゝで佛様になる、大乘の菩薩の位といふのはこれだけあります。

『十信』といふのはどういふ位だといひますと、一切衆生は必ず佛性を具して居る、キツと佛になるのだ、そのキツと佛になるのだといふことを確信する、必ず自分は佛になるのだといふことを確信する、此の確信の中の位が十あるそれが『十信』。先づ信じた確信した、然し確信しても未だこゝでは眞理を本當に覺つて居ない、眞理は覺つて居ないが信する、その眞理を信する信じた結果わかつて、今度は自分が眞理を握る、眞理を握つて眞理の中に住する、此の眞理は世の人がさらにいふ『眞理』でない、これは佛様の眞理で妙法のことだ。妙法を信する、そして自分は佛になるのだといふことを信する、そして今度は佛の住するところにチャント自分の心がおちついて居る、その落ついて居るところに又十の位があるのが『十住』、それから今度はその眞理を實行する、實行するのに又十の位がある、それが『十行』、今度は實行しただけでなく、實行したのを更に他の人々に回らし向はす、回向して他人を教化する爲めに盛んに化他の仕事をする、その位に十あるのが『十回向』、すると今度は、十住は妙法に住するのだが、それを行つて、更にまた他人に回向し化導した結果、今度は自分は眞理の地から生えたものになつてしまふ、眞理の地から生えてしまふ、もう住するなんて、上に乗つかつてゐるのではない、根から生えてしまふ、その位に十ある、それが『十地』です。その次に等覺、佛様の覺りと僅か一等しか違はない、毛筋ほどした違はないといふところですが、此の毛筋ほどしか違はないところに、なほ元品の無明といふ僻者がゐる、これが増長すると又後へ逆もどりに還る、危険千萬だ。そこで日蓮聖人は妙法の事をば、此の根を抜くから、元品の無明を切る大利劍といはれた。此の元品の無明を切れば後の方のいろ／＼な迷ひなどの根は一度に切れてしまふ、天台大師傳教大師までの佛教は、迷ひを無くするのに、下の方から上の方に溯つて行くのですが、日蓮聖人の佛教はそれとは違ふ、もうそんなことをして居ては間に合はない、昔の時はそんなこともやれるが、末法といふ時は、そんなことでは間に合はない、先づ根から去つてしまふ、一ばんの迷ひの根、一切の迷ひの本にある元品の無明を切る大利劍だ、此の元品の無明を去れば、後の方は自然に去れて来る、先づ根を抜いてしまふ、それが日蓮聖人の教養です。そしてこの元品の無明を斷てば今度は妙覺といふ、本當の佛様の位地に出て来るわけになりますのであります。

そこで、こゝでは、

『諸の如來の 師子の座に坐し 諸の比丘衆に 圍繞されつゝ法を説きますことを見ん 又龍神 阿修羅等の 數恒沙の如く 恭敬ひし合掌しつ 自ら其の身を見れば 而ち爲めに法を説けると見ん』

これはもう自分は佛になるといふことを確信したものだ、そこでさういふ天龍夜叉等のために法を説く身體となるのだといふことを夢みて、十信の位になつた。

『又諸佛の 身相金色にして 無量の光を放ち 一切を照しつゝ 梵しき音聲を以て 諸法を演説きたまふ 佛は 四衆の爲に 無上の法を説きたまふに 身を見るの中に處つ 合掌して佛を讚へ 法を聞いて歡喜び 而て供養を爲し 陀羅尼を得て 不退の智を證る 佛は其の心 深く佛道に入れりと知しめし 爲めに 最正覺を成すことを 授記して 汝善男子よ 當に來らん世に於て 無量の智なる 佛の大道を得て 國土嚴淨しく 廣大なること比無 亦四衆あり 合掌して法を聽くべしとのたまふを見る』

いよ／＼本當の十住の位に入る、前のところで二乘達が、みんな來らん世に於いて劫國名號を得た、舍利弗は華光如來になつた、阿難尊者は山海慧自在通王如來になつたといふやうな風に、みな佛の位を得たといふのは何ういふこと



此の經は「一切の世間に怨多くして信難し」としてある、刀杖も加へずとはしてあるけれども、毒不能害とある、毒を飲ましても害を加へることが出来ない、だから矢張り可成りさういふこともあり得る、何故それが有り得るかといふと、攝受だけでも、尚問難する者あらば大乘をもて答へよ、若し問ふ者があつたならば、矢張り大乘を以て答へよ、さうすると問うて来たならば、「法華經」が第一だといはなければならぬ、法華獨一だといへば法華以外の信仰のものは、矢張りこれに對して怨嫉する、そこで此の部分は矢張り折伏だ、進んで説かないところは攝受だけでも、問ふたら正味を答へる、そこは法華折伏破權門理でしかたがない、外のものは間違つて居るといふから、どうしても折伏ならざるを得ない、そこで「如説修行抄」などには、釋尊も天台も傳教も皆折伏だといはれて居るのです。進んで説かないところは攝受だけれども、聽きに來て説いたら矢張り折伏です。だからこれを、『法華折伏破權門理』といふので、法華は決定して折伏です、何處が折伏だといふと、法華は權門の理を悉く破折するから、法そのものは何時でも折伏だ、唯「安樂行品」といふものは折伏を遠慮して居るに過ぎない、人及び經典の過はあるが説かないで遠慮して居る、それが「安樂行品」です。「勸持品」は進んで説くから遠慮會釋なくやる。

そこで「勸持品」と「安樂行品」と二つ反對のことが出て來ました、反對のことが二つ出て來ては可笑いではないか、佛様はどうしてそんな反對のことを二つ説かれたのか、「勸持品」では佛さまは、菩薩方に催促して居られる、催促に従つて菩薩方が末法に正直に説いたら斯うなるのだ、此の法を當り前に説いたら斯うなるのだといふことを説きました、それは先刻申上げたやうに、「寶塔品」に六難九易といふことが出て居る、そこで藥王菩薩がそれでは私にやらして頂きたい、身を惜しまないと申上げたが、そんなことではいかんといつて「勸持品」の二十行の偈をお説か

せになつた。そこで初心の菩薩が、「勸持品」ではとても難しいといふので、さういふ迫害が餘り來らない方法はないでせうかと申上げたから、それはある、遠慮して説け、斯ういふことになつた、そこで「法華經」といふものは何方が正味なのであるかといふと、どうしても「勸持品」が正味だとなる。

前にも話しておきましたが、釋尊が「寶塔品」の時に「誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法華經を説かん——如來は久しからずして、當に涅槃に入るべし、佛、此の妙法華經を以て、付屬して在ること有らしめんと欲す」とあつて、これから此の「法華經」を付屬しようと思ふと仰しやつた、その御語をば天台大師がチャント二通りに説いてある、

近 令 有 在  
遠 令 有 在

近くは藥王等の菩薩に付屬する、遠くは下方地涌の菩薩に付屬する。未だ出て來ては居ないが、地の下の虚空中に居る上行等の菩薩に付屬する、此の二通りの付屬があるのだと、斯う天台大師が解釋せられた。此の近く付屬して在ること有らしめんと欲すといふ方の菩薩が、此の安樂行品の修行をする人だ。それから遠く付屬して在ること有らしめんといふのが、下方本化の菩薩で、その菩薩の爲めに「勸持品」を説かれたのであります。藥王等の菩薩では勸持品の修行をすることはできない、そこまでは力が及ばない、こゝに本化と迹化の違いがある。迹化は安樂行の攝受、本化は勸持品の折伏。斯ういふことが此の御説法の中に自ら現はれて來て居るのです、これから後になると、大いに其のわけが解つて來るが、今日は以上で終ります。

### 從地涌出品

#### 本門と迹門

- 久と近（無始と有始）
- 一と多（根本と枝葉）
- 顯と拂（眞實と方便）
- 實相と非實相
- 無漏實相と有漏實相

#### 來意

寶塔品に於ける多寶と分身  
 滅後における付屬有在  
 付屬における六難九易  
 法師品における難信難解  
 經體としての況滅度後  
 涌出と疑問

〔以下本門序分、集衆序〕

#### 一、他方迹化を止めて本化を召す

- 1、他方弘を請ふ
- 2、如來許したまはず
- 3、止善男子の前三後三の六釋

#### 二、下方本化菩薩の涌出

- 1、下方の涌出を叙す
- 2、菩薩の身相を叙す
- 3、その住處を叙す
- 4、佛命を聞くを叙す
- 5、眷屬多きを叙す

#### 三、地涌の大衆三佛を問訊す

- 1、三佛に供養す
- 2、問訊の詞を陳ぶ
- ア、四導師を標す
- イ、正しく問訊を陳ぶ

三、長行

- A、如來は安樂にいますや
- B、衆生は度け易きや
- ろ、偈頌(上に同じ)

四、如來は安樂なりと答ふ

- 1、安樂なりと答ふ
- 2、度け易きを答ふ
- ア、根利くして徳厚きもの
- イ、根鈍くして徳薄きもの

五、隨喜と述歎

- 1、菩薩偈頌もて隨喜し
- 2、如來述歎したまふ

〔以下本門序分、疑問序〕

六、此土迹菩薩の疑念請答

1、諸菩薩の疑念

- 2、偈を以て正しく問ふ
- ア、何れの處より來れる
- イ、何の縁をもて來れる
- ウ、その數量を叙ぶ
- エ、その師は誰ぞと問ふ

人(誰佛)、理(佛法)、行(誰經)、教(何道)

オ、彌勒請答を結ぶ

イ、神力を結歎す

- ろ、來りし國の答を請ふ
- は、來りし縁の答を請ふ
- に、大會同じく請ふをいふ
- ほ、師主誰ぞの答を請ふ

七、他土の菩薩の疑念請答

- 1、他方菩薩其の佛に問ふ
- 2、他方の佛、釋尊の答を聞けと答ふ

〔以下本門正宗分、誠許〕



八、如來誠めて答を許したまふ

- 1、先づ誠しめたまふ
- ア、述讚したまふ
- イ、正しく誠しめたまふ
- 2、答を許したまふ
- ア、智慧の果を標したまふ
- イ、三世に化教を開したまふ

九、偈頌もて重ねて誠許す

- 1、先づ誠むるを頌す
- 2、智慧の果を頌す
- 3、三世の化を頌す

〔以下本門正説分、略開近顯遠〕

十、略して開近顯遠す

- 1、師弟を答へたまふ
- 2、處る所を答へたまふ

3、師弟を釋したまふ

ア、智と斷とを修す

イ、智と斷とを證す

4、處る所を釋したまふ

十一、重ねて偈頌もて開顯す

1、師弟を答ふ

2、處る所を答ふ

ア、處る所

イ、菩薩の徳を歎す

3、師弟を釋す

4、處る所を釋す

十二、疑に因りて更に答を請ふ

1、疑ふ〔動執生疑〕

2、答を請ふ

ア、法説

い、近に執して遠を疑ふ  
ろ、遠に執して近を疑ふ  
は、信じ難きを以て請を結ぶ

イ、譬説

い、譬を開く

A、成道近き意を譬ふ

B、所化多き意を譬ふ

C、總じて信じ難き譬を結ぶ

ろ、譬を法に合す

A、近き譬に合す

B、遠き譬に合す

C、答を請するに合す

I、佛語を擧げて請ふ

II、請の意を明す

W、現在の爲め

X、未來の爲め

III、正しく答を請ふ

W、我等が疑を除きたまへ

X、未來の疑を除きたまへ

十三、重ねて偈頌を以て答を請ふ

1、法説を頌す

ア、近に執するを頌す

イ、遠を疑ふことを頌す

ウ、結請を頌す

2、譬説を頌す

ア、開譬を頌す

イ、合譬を頌す

い、近に合するを頌す

ろ、遠に合するを頌す

は、請に合するを頌す

本門と迹門

今日は「從地涌出品」即ち本門にはいりません、「法華經」に本門と迹門があります、これは「法華經」で重大なものであるだけでなしに、全佛敎に於ける非常に重大な問題です、此の「法華經」本門以前の敎に於ては、佛は眞理を覺つたもので、佛より前に理があります、佛といふものは其の眞理を覺つて佛といふものになる、だから理の方が根本なのであります、佛といふものは何方かといへば、理から出て來た一つの垂迹で、これを「理本事迹」といひます、これに六根本迹などといふ面倒なことがあります、それを一々いつて居るとコンガラかるから略します、要するに諸法實相の理といふものが先であつて、そして佛陀は其の諸法實相の理を覺られたのが佛なのだから、佛といふものは後に出て來たものだ、諸法實相の理の方が佛の師匠である、佛は諸法實相からいつたならば弟子である、本は佛がなかつたみんな迷つて居た、迷の方が本なのだ、それを「維摩經」などでは迷のことを「無住」といつて、

從り無住、本一立一切法

「無住の本より一切の法を立す」——「無住」といふことはどういふことだといふと、それは取りとめの無いことだ。凡そ一切のものは常住のものは一つもない、無住といつて住まることがない、取りとめのあるものは何もない、形容すべきものは何もない、とりとめがないから迷ともなる、その迷の中からいろいろのものは出て來る、迷の中からもいろいろのものが出て來るのには、それがさうあるやうな理があつてそれで一切のものが出て來る、それが縁起です、根本たる無住のものから漸次一切の法になつて來る、迷の法は無明縁起、悟の法は淨心縁起である。そんな様に解釋

してあります、それが一般佛敎の通則です、だからその根本の無住をいつたならばその性は空である、さまざまの無住の中に一切の法を藏して居る、その一切の法に執着するからいけない、それに執れないやうにするのは、一切法が空だといふところに落ちついて行く、これが一般佛敎の、小乘大乘に關はらず、何方でもさうで、佛敎の通則であります。

然るに此の「法華經」の「從地涌出品」以後の本門佛敎といふものになると、佛が本から有つたといふことになつて來ます、迷の中から佛が出て來た、一迷先達以て餘迷を救ふ——一人の迷つて居た者が先づあつて、それから外の迷つて居るものを救ふのである、斯ういふ風に考へて居つたのが、此の本門に至つては、迷つて居るものがある、それから覺つたのではないのだ、此の宇宙に根本から覺つて居るものと、それから迷つて居るものとの、この二つが根本的に具はつて居るのだ、それでは基督敎みたやうに神様が一切のものを造つたかといへば、イヤ造つたのではない、根本的にさういふものが存在して居るのだが、然し迷といふものは一時曇つて居るので、本體が違ふのではない、根本に於ては一つだ、物と心が一つであるが如くに、唯根は一つだが用きの上で變つて居るやうになつて居るのだ、若し覺つて居る方から見たならば、迷つて居るものゝ本體も、矢ツ張り覺つて居るものゝ用きになるのだ、根本から佛と佛ならざる迷つて居る九界とは、根本的に存在して居るのだけれども、即ち本體は一つだけれども、用きは二つである、恰も鏡の裏表のやうなものだ、さういふ風な、根本的に衆生も存在すると共に、根本的に佛も存在するのだといふことを示されたのが、此の「法華經」の本門なのであります。

若し諸法實相の理といふものが原理的なものであり、一ばん眞實のものでありましたならば、西洋などで申します

る汎神教と同じやうになる、ところが今此の本門壽量品の教では、根本の佛と迷つて居る衆生との本體が一つだといふ意味からは汎神教なのでありますが、それでは佛と衆生と一緒か、佛といふものは、衆生といふ迷つて居るものから覺つたのかといふと、さうではない、佛は最初から覺つて居る、始めから覺つて居る佛があるのだ、みんな凡てのものが迷に動き出した時に、覺の方に動いて行つた根本的存在があるのだといふことになるのですから、だから汎神教と一神教とを一つにしたやうなものが「法華經」の本門の教なのであります、此の本門の教義が、恰度日本の國體とよく似た意味があるのであります、それは追々申上げます。

そこで、本門と迹門の相違はどんなことかといふと、プリントに三つ出しておきました、最初に

久と近(無始と有始)

これは今申上げたことですが、「壽量品」に於て釋尊は、今この釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出で、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。

といはれて、世々番々の間菩薩の修行をして、今度人間に生れて、始めて八相成道して佛になつたのだとさう説いておいたのは、それは方便であつて、實は五百塵點の久遠の成道であるといふ、久遠の成道といふことをいはれた、けれども其の久遠の成道といふのは、五百塵點の昔であつたといふ始めがお經に書かれてあります、然しこれは譬を説かれたもので、但無始の昔といつても、無始を僅かに考へるといけなから、斯ういふ譬を以て無始の始、もう宇

宙が動き出した最初といふやうな、無始の始といふものを譬へられたのです、それから其の外の佛教のあらゆるお經文に説いてある佛様がさまざまあるけれども、どんな大昔の佛様のことを説いても、此の「如來壽量品」にある五百塵點劫といふ、此の劫數を説いて、その佛の成佛の始めをば計つたお經は、一つもない、そんな古い佛様をば示したお經は一つもない、で、其のお經の説相をそのまゝ考へると、どうしても此の五百塵點劫以前の釋尊、その釋尊が一ばん古い佛様になります、即ち此の久遠の釋尊が一ばん古い佛様であつて、此の久遠の釋尊に三つの身がある、眞理と一つになつた身、それから其の眞理をば自分の智慧にして自らの身を照して居る身、それから凡てのものを救ふ爲めにさまざまの相を現はす身、これを久遠の三身といひます。

- 法身 (眞理)
- 報身 (智慧)
- 應身 (慈悲)

眞理の身は法身といつて、眞理を自分のものにして居る身、其の佛といふものをば道理の方から見ると、眞理の本體みたやうなものである、その眞理をそのまゝ照して居る智慧の身、それが報身、それから眞理に反いて迷つたすべての人間を救ふ爲めに、相手方に應じてさまざまの相を現はす、それが應身、此の五百塵點劫の成佛の昔の應身から、種々さまざまの佛様の相を現はすぞと出て居るのです、佛教には、三世に互つてさまざまの佛様があり、又十方にさまざまの佛様がありますが、三世の佛も十方の佛も、皆澤山お經には説いてありますけれども、それらの佛を、いくらその成佛の説相を探して見ましても、この「法華經」壽量品の五百塵點劫以前の古い佛は、一つも説かれてない、

さうして、其の五百塵點劫以前の佛様はまた此の法華經の中で、世々番々に、衆生を救ふために、さまざまの姿を現はす、己身といつて佛様の姿を現はせば、他身といつて九界の姿も現はす、そして三世に亘つて相手次第に應じて教を説き、衆生の迷を開いてやる、だから大日如來であらうが、阿彌陀様であらうが、三世の諸佛、十方の諸佛は、皆久遠の釋尊の應身から迹を垂れた三身であります、即ち釋尊は天の一月、諸經の佛は萬水の影であります、大日如來は法身だ、お釋迦様は應身だ、だから、應身の釋迦如來より、法身の大日如來の方が勝れて居るのだ、阿彌陀様は報身だ、釋尊は應身だ、だから應身の釋尊より、報身の阿彌陀佛の方が勝れて居るのだといふと、一往きこえるやうであります、一度この五百塵點の壽量品の開顯がありますと、壽量品以外の佛身は、どんなに澤山ありましても、みんな釋尊の分身垂迹です、大日如來も、阿彌陀様も、久遠の釋尊の己身中の應身から、衆生を救ふ爲の迹を垂れたまうたところの三身である、斯ういふ風に、所謂時の方から、眞實を開顯して行かれました、それが「久と近」です。

一切經を探しても、此の本門の釋尊より以前の佛は、前申したとほりに、一つも示されてない、そして此の壽量品の釋尊は、「或は己身を説き、或は己身を示す」とあつて、衆生を救ふためには、あらゆる佛様の御姿を示すのだといふことを、經に説かれて居るのみならず、説相としても「寶塔品」に十方の佛をみんな集めて居られる、現在の十方の佛を集め、そしてこれは自分の分身なのだといつて居られる、それから「壽量品」に於いては、過去現在未來の三世に亘つて、種々に方便して身を現すのだといつて、近き垂迹の身を拂つて、遠き本體の佛を説いて居られるのが、「久と近」です、次に

一と多（根本と枝葉）  
顯と拂（眞實と方便）

これは恰度「寶塔品」に、さまざまの佛の姿を示されたのと同じことです、これは根本と枝葉で、本門の佛は無始の佛で根本の佛である、それ以外の法華經壽量品以外佛は枝葉の佛であるといふのは、横に示されたもので、壽量品の佛を顯はされまして後は、それ以來の三世に説かれた佛は、みな釋尊の衆生教化のために、「或説己身、或示己身」せられる垂迹の佛であると開顯せられると、三世の多くの佛がみな拂はれます。これ豎に時に約しての根本と枝葉を示されたので、此の壽量品の釋尊の外の澤山の佛様は、三世十方に亘つて無數に説かれて居ますけれども、それは皆根本の佛から出た枝葉の佛であります、それら澤山の佛は、皆壽量品の佛の一に歸着すべきである、近い佛は皆無始の佛に歸する、そしてそれらの三世十方の多くの佛は、必ずその本體はない垂迹の佛、水中に映れる影の佛である、衆生教化の方便であると拂はれてしまひ、今眞實の佛は此の「壽量品」——本門に於て始めて示されたと顯はされます、これを

- 久と近
- 一と多
- 顯と拂

といつて、澤山の佛を拂つてしまひ、無始の佛といふ久遠の佛、——根本の一佛をば顯はされます、さういふことが

「壽量品」なのであります。

そこで迹門は、一ばん最初に申上げたやうに、三乘、五乘——斯ういふ澤山の教をば、一乘といふのに教法を統一した、本門の方は佛様を統一した、三世だとか十方だとか、或は其の外澤山の菩薩や二乗や、天だとか人間の聖人だとかいふ、さういふ三乘五乘を説くところのさま／＼の佛、並びに諸佛諸聖を説いてある、それらを悉く一つの佛身に統一してしまつた、迹門はあらゆる教法を統一する、本門はあらゆる教法の説き主、教法の代表表現者、さういふ佛さまをば統一された。

實相と非實相

迹門にも諸法實相といふのが説かれてありますけれども、此の「壽量品」が本當に出て来るまでは、眞の實相といふことは出来ない、壽量品の本佛開顯があつて始めて、眞の實相が顯はれるのであります、本門に於いて眞の實相があり、本門以前に於いては非實相なのであります。

それから又實相といつても、尙迷の残つて居る實相と、迷が全然なくなつた實相とある、此の迷の全然なくなつた實相を、無漏の實相といひます、「序品」の初にも、

『無漏の實相に於て、心已に通達することを得たり』

といふことをいはれて、諸法實相の中、迷の全然なくなつてしまつた實相が、此の「法華經」の本體だといはれたが、此の「壽量品」が出て来るまでは、いろ／＼これが佛の眞實だといふことを、さまざまに方便品以來説かれては居る

が、未だ有漏實相をまぬがれない、眞の無漏實相は、「壽量品」に於いて顯はれるのであります、これ以前は、有漏實相であり、又非實相であり、眞の實相は、無始のものであり、根本のものであり、又あらゆる點に於て、其の眞實を顯はすものである、その顯はれたのがこれから以下の本門なのであります。

來意

此の「涌出品」のあらはれるまでの一ばん最初の因縁、序りのやうなもの、それは「寶塔品」であります、「寶塔品」で、多寶如來と十方分身の諸佛を集められた、「分身既に多し、當に知るべし成佛の久しきことを」と、天台大師も説かれて、釋尊が十方に身を現ぜられた、その分身の佛が澤山おいでになる、さういふことは、自ら釋尊が久遠の佛であること、無始の佛であることを證明して居るものだ、多寶如來が法華經は皆是れ眞實だと證明されたが、この多寶如來は、不滅の眞理を示して居られる、その不滅の眞理を示した多寶如來と、一つの塔の中に釋尊がはいられた、斯ういふことは釋尊が不滅の眞理と同じ存在者である斯ういふことを示したものであるそれと同時に釋尊が、塔の中から此の「法華經」をば、如來の滅後に於いて、誰が弘めるかといつて人をお募りになつた、そのお募りになつた時に、會座に居つた迹佛聞いて居つた菩薩方がそれを聞いたのみならず、その聲が自ら地の下までも響いて、そして此の「涌出品」で出るところの、下方の菩薩も聞いたのであるといふことを、天台大師が解釋して居られる、即ち此の法華經を後の世に付屬するについて、「付屬有在」といふことを、其の時にお話しましたが、

『付屬して在ること有らしめんと欲す』

さう佛様が仰しやツた、此の『付屬して在ること有らしめんと欲す』といふのについて、天台大師が

近令有在

遠令有在

斯ういふ解釋をして居られます、『近く付屬して在ること有らしめんと欲す』といふのは、其の時の會座に居つた藥王菩薩や、彌勒菩薩をはじめ、迹化の菩薩達に對してであり、『遠く付屬して在ること有らしめんと欲す』といふのは、未だ其の會座に現はれて居らない、娑婆世界の地の下の空中に居る、此の本化の菩薩に付屬されたので、此の故に「涌出品」に出て来る菩薩に、此の寶塔品の時の「付屬有在」の佛のお聲が、自らひびいて居つたのであるといふことを、天台大師が釋して居ります、そこで「涌出品」は「寶塔品」から自から出て来て居るのでそれは滅後に於ける付屬のためであります。

其の付屬されるのについて、「寶塔品」では、六難九易といふことを説かれました、さういふ難しいことによつて、此の「法華經」を弘めるといふことが、何人が出来るのであらうか、斯ういふ時分に會中の菩薩ではなかく難しい、有頂天に立つて無量の餘經を説くことも何でもない、一切衆生を六通の羅漢にしてやることも何でもない、須彌山を把りて、無量の餘國に抛げずすることも何でもない、劫燒といふ宇宙火の中で、乾艸を負うて焼けないのも何でもない。此の「法華經」を惡世に弘めることは、それよりも甚だ難しいといふやうなことが説かれてありますから、これはなかなか一般の菩薩では出来ないことであるといふので、六難九易を説かれたことが自からこの「涌出品」で、地から涌き出て来る本化の菩薩を呼出される伏線になつて居ります。

それからもつと前に溯ると、「法師品」の時にすら、此の「法華經」は、佛の説かれた經のなかで、一ばん信じ難く解し難い、のみならず、此の經は一切の迷を一度に斷ずる經であるから、すべての新發意の菩薩は、此の經を聞いて驚く、それから増上慢の二乗は、此の經を聞いて怨嫉するといふことが書かれてあります、佛の在世の時にすらさうであるから、如來の滅後に於ては、必ず佛の在世よりも後になればなる程、怨嫉が多くなるといふことが説かれてあつて、其の難しいことを突破して弘める人が、何うしても入用になつて来る、此の前の「勸持品」のところでは、三類の強敵が末法には出て来る、それを忍んで弘通するといふことを、八十萬億那由他の菩薩が誓願したけれども、その誓願も、佛様が催促したから誓願した、藥王等の二萬の菩薩、此の二萬の菩薩は、「法師品」の時に、藥王に因せて、此の經を弘通するのに三軌——如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して法を説け——と、懇に弘通の方軌を授けられたに拘らず、此の藥王菩薩が、二萬の菩薩と共に誓願した其の誓願は、此の娑婆といふ世界は、堪忍の世界だ、人々皆五濁の心が盛んである、なかく弘通するには難しい、けれども、きつと忍んで弘通しますと、それだけのことであつた、其の難しいといふことについては、「寶塔品」に六難九易といふやうな、あの位詳しく難しいことを説いてあるのに、藥王菩薩等の二萬の菩薩の誓願の格護は、餘りに簡單であつたから、如來は八十萬億那由他の菩薩を、ジロツト御覽になつた、そこで八十萬億那由他の菩薩が、佛の御心を推しはかつて、此の「法華經」を、如來の滅後惡世の中に弘める時は、こんな難儀があるだらうといふので、一般の僧侶が反對する、俗人が反對する、刀杖瓦石を加へる、聖人のやうな僧侶まで皆反對する、單に反對するのみならず、これを外道といひ、或は官府に訴へ、或は一般民衆にいひふらし、そして官私の兩方から、所を追ひ出してしまふ、所を追ひ出し、寺を追ひ出

すのみならず、その所の全體——國を追ひ出す、さういふことになるのだといふことが書かれて居るそれが「勸持品」の豫言であります、そのやうな難しいことでは、我々に来るかどうかわからないといふので、一切の菩薩が躊躇したから、安樂行品を説かれた、さうなりますと、ここに何うしても六難九易に對するやうな、又「勸持品」の三類の強敵に堪へるやうな菩薩が、出て来なければならぬことになつて居るのであつて、其の菩薩が、此「涌出品」に始めて出て来ることになるのであります。

一、他方速化を止めて本化を召す

御本文に移ります、此の法華經の本門にも、序・正・流通があつて、本門の序分は此の「涌出品」の前半品であります、それから本門の正宗分は、「涌出品」の後の半品と、「壽量品」と、「分別功德品」の前半品の一品と二つの半品——一品二半——それから流通分は其の餘りの全體十一品半であります。

で、此の品の一ばん初めのところは、本門の序分で、最初に序品に集まつて来た集衆は、皆迹門の教を聞く機類の者しか集まつて来なかつた、今此の本門に於いては先づ本門の機類が集まつて来てゐます、そのことをば、本門の序分の「集衆序」といひます、「集衆」といふのは、此の本門の教を發起するところの人、さういふ人々がこゝに出て来たといふことです。經に

『爾の時、他方なる國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の、八恒河沙の數にも過ぎたるもの、大衆の中に於て、起立し合掌し禮を作しつ。而て佛に白して言さく』

とあります、澤山の十方分身の佛がおいでになつた、其の佛には皆菩薩が伴はれて来たが、其の他方の菩薩の中の、八つの恒河の沙の數にも過ぎたるやうな菩薩方が、はじめてお釋迦様の前に来て、合掌禮拜してお願ひ申上げた、それは「安樂行品」を承はつて、成程さういふ風に弘めたならば、「勸持品」のやうな難しい困難なしに弘められる、さういふことであるならば、私達も弘めたいものであるといふので

『世尊よ、若し我等に、佛の滅しませる後に於て、此の娑婆世界に在りて、勤めて加精進し、此の經を護持し、讀誦んじ、書寫し、供養せんことを聽したまは者、當に此の土に於て而ち廣く之を説きたてまつるべし』

斯ういつてお誓ひ申上げた、それが「他方速化を止めて本化を召す」の中の、「他方弘を請ふ」といふことであります、その次が有名な「止善男子」の佛語で、

『爾の時、佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止みね善男子よ、汝等が此の經を護持たんことを須むす。所以者何となれば、我が娑婆世界には、自から六萬恒河沙に等しき菩薩摩訶薩有り、一一の菩薩には、各六萬恒河沙の眷屬有り、是の諸の人等は、能く我が滅しぬる後に於て、護持し讀誦んじて、廣く此の經を説かん』

「寶塔品」の時に誰かよく此の娑婆世界に於いて、此の「法華經」を説くか、誰か志のある者は早く申し出るといはれたので、「勸持品」の時には藥王等の菩薩が出、それから次には、八十萬億那由他の菩薩が出た、少し難しいからと思つて居たところが、「安樂行品」を説かれたので、他方來の八恒河沙の數にも過ぎた菩薩が、どうか弘通を私共にもお允しを願ひたいと申上げたのに對して、「止みね善男子」、お前達が弘通することはいらぬ、此の娑婆世界には自から六萬恒河沙の菩薩があつて、此の經を弘めるだらうと仰せられた、そんなに澤山の菩薩があつて、それが弘めるこ



とに決つて居るならば、何も佛さまは弘通者を募集せられる必要はないのではなかつたか、甚だ佛様のやり方は變だ、前後不揃ひだといふやうなことをいつて、疑ひを生ずる筈のところなのであります、けれどもこれには底には底がある、此の『止みね善男子、汝等が此の經を護持することを須むじ』といはれたことについて、前三後三の六釋といふものを、天台大師が釋して居られる。

佛様がどうしてそれを止められたか、止めるのには何か理由がなければならぬ筈である、それには——止めるのに、三つの理由がある、止められたと同時に、汝等は此の經を護持することを須むず、何となればと仰しやつて、それは此の娑婆世界には、自から六萬恒河沙の菩薩がある、それが出て来るについて、又三つの理由があるといふので、これを前三後三の六釋といふ、何故他方の菩薩の弘通を止められたかに三つの理由がある、其の第一の理由は、他方の菩薩には、各々自分の任務がある觀音勢至であるならば、本當をいへば極樂世界に居て、その極樂の衆生を教化しなければならぬ任務がある、日光月光であるならば藥師如來の國で、その衆生を教化しなければならぬ任務がある、それが娑婆世界に出て來て弘通する、さうしたならば、自分達の任務が等閑にされることになるだらう、だから他所の國から出て來て、此の娑婆世界で、「法華經」を弘通する必要はないのだ。

それから第二には、此の菩薩は他方の菩薩であるから、娑婆世界には結縁の事が薄い、此の土の衆生とは、結縁のことが浅い、だから弘通したところで、それ程の功德がない、それから第三には、若しこれらに允したならば、下方の菩薩を召すことが出来ない、下方の菩薩が來ないと、釋尊が垂迹を破られることができない。此の三つの理由があるから、それで止められた、これが前の三釋であります。

次に後の三釋、後の理由はどういふことであるかといふと、これから出て來る下方の菩薩は、普通の菩薩とは全然位が違ふ、此の菩薩は自分の居る國の衆生を利益するのみならず、又他方のすべての國の者に對しても利益し、乃至十方の世界の者に對しても利益する徹底した菩薩である、此土に遍して利益する、又分身の土に遍して利益する、又十方の土に遍して利益する、ところの力がある、さういふ菩薩であるから此の菩薩をお召しになつた、それから第二には、此の菩薩は娑婆世界に根本的に居る菩薩である、此の土の縁深厚である、それから第三には、此の菩薩を呼ばないで居ると、「壽量品」が説けない、久遠を顯はすことが出来ない、若し此の下方の菩薩を召すことが出来なかつたならば、「壽量品」を説けない、若し此の下方の菩薩を呼び出したならば、佛の久遠を顯はすことが出来る、斯ういふ理由があるから、「止みね善男子」と——ここに至つて、にはかに彼等をお止めになつたのであるといふのであります。

若し斯ういふカラクリがないと俺は實をいへば無始の佛だといつても、衆生が眞に信することは出来ない、そこで自から、自然にカラクリのやうな鹽梅に、脚色されたやうな鹽梅に出て來たものであります、然し此の他方の菩薩が弘通を願つたのに對して、一ぺんお止めになつた、こゝではお止めになつてあるが、これは「法華經」の正味を弘めることだけをお止めになつたので、「法華經」の正味でない文の上だけの「法華經」、それを弘めることは、後の方の「囑累品」で、斯ういふ他方の菩薩にも一役をお授けになつた、けれどもこゝでは正味を弘めることは、お前達は適はんといはれて、正味を弘めるものを、別にお召しになつたのであります。

一、下方本化菩薩の涌出

「佛、是を説きたまふ時、娑婆世界の三千大千の國土の地皆震ひ裂けつ、而も其が中於り無量千萬億の菩薩摩訶薩有りて、同時に涌出でたり。」

これが「下方の涌出を叙す」であります。

「是の諸の菩薩は、身皆金色にして、三十二の相と無量の光明とあり。」

その菩薩の身相の尊特なことを叙された、

「先より盡く娑婆世界の下の、此の界の虚空の中に在りて住りき」

これは、其の菩薩方の住所はどんな所であつたかを叙されたのです。

「是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛の所説つる音聲を聞きて、下より發れ來り。」

佛の命を聞いた、此の娑婆世界には自から六萬恒河沙の菩薩摩訶薩がある、其の菩薩が弘めるから、お前達はいらな

いのだといふ佛様の聲を聞くなり、直に出で來た、音聲を聞いて下より出て來た、次は眷屬の多いことをいはれる。

「一一の菩薩は、皆は大衆唱導の首にして各六萬恒河沙に等しき眷屬を將わたり、」

それらの菩薩がみんな澤山の人を引き連れて居る、弘通宣傳の最も猛烈な方々であつた、各々恒河の沙を六萬も集め

た程の澤山の弟子達を將わて居る、六萬恒河沙の弟子を率いて居つたものが六萬恒河沙の數程居つた、況や五萬・四

萬三萬・二萬・一萬の恒河沙に等しき眷屬を將わつたものは、又それよりも多い。

此の數が餘程面白い、これは高山樗牛心兄がこゝを讀んで——「壽量品」の五百塵點劫も讀んで——世界のあらゆる文學哲學の中でこんな不思議な數を書いてあるものを見たことがない、六萬恒河沙の弟子を持つて居る者が六萬恒

河沙居る、それだから五萬恒河沙を將わて居る者は、六萬恒河沙を將わて居る者よりも多くゐる、四萬恒河沙を將わて居る者は又多くゐる、さうなつて居るから、弟子が少くなる程、其の弟子を持つて居る者が多くなる、だん／＼數が多くなつて行く、

「況や五萬四萬三萬二萬一萬の恒河沙に等しき眷屬を將わつた者をや。況や復、乃至一恒河沙、半恒河沙、四分の一、乃至千萬億那由佗分の一なるをや。況や復、千萬億那由佗の眷屬なるをや。況や復億萬の眷屬なるをや。況や復、千萬百萬乃至一萬なるをや。況や復、一千一百乃至一十なるをや。」

そんな僅かの數を將わて居る者はいよ／＼多くなつて數へきれない。

「況や復、五四三二一の弟子を將わつた者をや、況や復、單己のみ遠離りて行するを樂へるをや。」

だん／＼弟子の數の少いものほどだん／＼多くなつて、殆どどれ程とも知れない、

「是の如き等の比、量無く邊無く、算數も譬喩も知ること能はざる所なり。」

といふ程澤山の菩薩が出て來た、これは所謂眷屬の多きことであります。

### 三、地涌の大衆三佛を問訊す

それらの地涌の菩薩が、釋尊と多寶佛と分身の佛との三佛に御挨拶を申上げる。

「是の諸の菩薩、地より出で已りて、各虚空の七寶の妙塔なる多寶如來、釋迦牟尼佛の所に詣で、到り已りて、二世尊に向ひて頭面に足を禮しつ。乃至諸の寶樹の下なる師子座の上の佛の所にも、亦皆禮を作しつ」

此の分身の佛様は「寶塔品」に説かれてあるやうに、夥しい数の佛様であるから、そこに禮拜しに行かれたから大變なことです。

『右に繞ること三市して、合掌し恭敬しく、諸の菩薩の種々の讚の法を以て、而ち以て讚歎へつ。一面に住り在て、欣び樂ひて二世尊を瞻り仰ぎぬ』

供養するといふのに三つあります、佛の所に禮を作し、右に繞ること三市し合掌する、これは身の禮拜、それからうやうやしき恭敬の心、それは意の禮拜で、諸の菩薩がさまざまの讚への言を以て讚歎する、それは口であつて、身口意——身と口と意の三つを以て禮拜供養する、身は禮拜、口は讚歎、意は恭敬、これを三業供養といひます、其の供養の最も大なるものは、藥王菩薩のやうに身を焼いて供養する、身を以て供養するといふことになるのですが、こゝでは皆禮拜し、合掌し、うやうしき恭敬の意を以て、種々の讚言をもて讚歎した。

『是の諸の菩薩摩訶薩、地より涌出でつゝ、諸の菩薩の種々の讚の法を以て、而ち佛を讚ふること、是の如き時の間五十の小劫を経たり』

數の知れない程の菩薩が、數の知れない程の佛様に禮拜するのだから、五十小劫位は経るわけです。

『是の時、釋迦牟尼佛は、默然として坐したまひ、及び諸の四衆も、亦皆默然たること五十小劫なりき。佛の神力の故に、諸の大衆をして半日の如しと謂はしむ』

これは時といふものについての長い短いは、その人間の精神の力によつて違つて行くのだ、八十歳九十歳まで生きても何にもしない人は、その身體の命だけは長いかも知れないが、眞の命は極く僅かであるかも知れない、若くて死ん

だ人間でも、澤山のことを爲して死んだならば、その人の命は肉體こそ短いが眞の生命は長い、正成ならば正成の命は今でも尙生きてゐる、恰度そんな風に、精神的に考へたならば短いものが長くなる、長いものが短くなる、迷つて居るものは長い命でも短くなる、眞の正しき或る一つの道とか、眞理とかいふものに命を托したものは、短い命でも長くなる、そのことをば此の譬へにも引かれて居ます、半日の如しと謂つた方は迷つて居つた、其の迷つたものが半日の如くおもつたのを、五十小劫と見た地涌の菩薩の方は悟つて居つたといふ風に天台大師も釋されて居ます。

『爾の時、四衆、亦佛の神力を以ての故に、諸の菩薩の、徧く無量百千萬億の國土の虚空に滿ちわたれるを見る』これはもうそれだけの數の菩薩であるから、恰度十方分身の諸佛が地上に充ち滿ちたやうに、此の菩薩も矢張り無量百千萬億の國土の虚空に一ぱいになつた、

『是の菩薩衆の中に四の導師有り、一をば上行と名け、二をば無邊行と名け、三をば淨行と名け、四をば安立行と名く。是の四菩薩は、其の衆の中に於て最も爲上首にして唱導の師なり』

これは其の多くの菩薩の中に四人の導師あることを示された。

『大衆の前に在りて、各共に合掌して釋迦牟尼佛を觀たてまつりつ、而て問訊ひて言さく』

其の菩薩方が佛に申上げた、  
『世尊よ、病少く惱少くおはして安樂に行じたまふや不や。度すべき所の者、教を受くること易しや不や、世尊をして疲勞を生さしめざるや、と』

先づ佛様のお身體についておきゝし、それから佛様の御事業をおうかゞひした、

「爾の時、四大菩薩、而ち偈を説きて言さく、  
 世尊は安樂にして、病少く惱少くおはすや 衆生を教化したまふに 疲れ倦みたまふこと無きを得るや 又釋の衆生 化を受くること易しや不や 世尊をして疲勞を生さしめざるや」とお伺ひした。

こゝで地涌の菩薩といふものゝことを一寸話しておきます、地皆震裂して無量の菩薩摩訶薩が出た、大地が震裂したのは、どういふことであらうといふと、これは地涌の菩薩が出なければ本當の佛法が顯はれないのである、そこまでは等覺の菩薩——佛様と一等しか違つて居ない菩薩を等覺の菩薩といふ——菩薩は澤山出て居るけれども、その等覺の菩薩すらも未だ根本の佛法はわからなかつた、といふことはどういふことを示して居るかといふと、此の「地皆震裂した」といふ此の地は何を示して居るのであるかといふと、等覺の菩薩すらも有つて居る元品の無明の大地である、此の宇宙には根本的に聖なるもの、神聖なるもの、さういふものが根本的にあるといふことがわからない、又宇宙に一貫したる法有るといふことがわからない、さういふ神聖なるものは後から出來たものだ、恰度佛が迷ひから覺るやうに、後から出來たものだ、それから法は——諸法實相の眞理は、人爲的につくり上げた便宜的に主觀的につくり上げたものだ、さういふ風に考へて居た、それが元品の無明なのです、宇宙には根本的に神聖なものがある、無始の佛陀がある、それから其の無始の佛陀の心そのものが宇宙の根本的の道德法なのだ、根本的の道德法と根本的の聖者、それが眞に存在するのだ、斯ういふことがわかるのが本當の法性なのです。

元品の無明といふのは、迷の一ばん元といふことで、此の元品の無明がなくなつたならばどういふことになるかと  
 いふと、元品の法性といふものになる、元品の無明と元品の法性との對立だ、此の地涌の菩薩はどういふ所に居つたかといふと、大地の下、下ならば下の何處かの國かといふと、下方空中だ、斯ういふことはどういふことを示したのかといふと、空中といふのはすべて無礙、礙りのないものだ、これは第一義空といつて本當の眞に執はれない、本當の法性の眞理の中に住んで居る、そして此の菩薩が大地を破つて出て來て何處に行つた、それは地の上の國でなく矢ッ張り虚空である、虚空會のところに出て來た、これは法性第一義空といつて、法性第一義の眞空の處に居る、それから此の娑婆世界の地の下に居る菩薩の數は無數である、數が計り知れない、これは又何を意味したものであるかといふと、此の地涌の菩薩といふ菩薩、それは此の娑婆世界の一切衆生の心中に有つて居る、眞の菩薩性なのだ、根本の菩薩性を示したものだ、その本體だ、根本の我々の菩薩性——諸君の心の根本に此の地涌の菩薩の菩薩心はチャントある、その菩薩に四人の導師がある、上行無邊行・淨行・安立行の四菩薩で、これを若し何ものかに譬へることが出来るならば、上行は火大、火の徳なのだ火は燃えたと必ず上に升つて行くから、上行は火大の徳、無邊行は風大の徳、淨行は水大の徳、安立行は地大の徳、地水火風の四つを示したものである、さういふものは道德性としてもなければならぬ、火大の徳は向上して行く思想で、それから其の向上したものは常に無邊に周圍に擴大して行くそして擴大して行くけれどもそれは汚なく擴大するのでなく、必ず水が一切のものを洗ふが如く淨化して行く、そしてそれは根本的に大地のごとく建設的でなければならぬ、さういふ四つの徳があつて始めて一切のことを成就することが出来るのであります。

又これを菩薩の位にすると、上行菩薩の位は十住といふ位に該當する、住といふのは眞理を自分の住居にする、眞

理を住居にしたものは向上性があるから必ず向上する、それから十行といふのは、自分が眞理を住居として向上して行くのみならず、その向上したものを他に波及して行く、それだから十行は無邊行である、それから十回向、唯他に波及して行くのみならず、それを悉く淨化してしまふ、波及した結果又チャント確實に握る、だから十回向は淨行である、そして十地、これは此の間申上げたやうに、地から根づいてしまふやうになつて、つまり確實に建設される。

- 上 行(火大)―十 住
- 無邊行(風大)―十 行
- 淨 行(水大)―十 回向
- 四菩薩―
- 安立行(地大)―十 地

斯ういふやうな四つの徳を有つて居る、此の四菩薩が地涌の菩薩の代表者である、その菩薩方が釋尊に御挨拶申上げた、お障りはありませんか、御事業は充分にはかどつて参りますか、といつて御挨拶申上げました。

#### 四、如來は安樂なりと答ふ

『爾の時、世尊、諸の菩薩大衆の中に於て、而ち是の言を作したまはく、是の如し是の如し、諸の善男子よ、如來は安樂にして病少く惱少し。諸の衆生の等は、化度ふべきこと易く、疲勞有ること無し』

『是の諸の衆生は、世々より已來、常に我が化を受けたり』

今はじめて教へたのではない、こゝに至つて本當の肝心要の教を以て成佛せしめてしまふのだから、過去にもさういふ因縁がある。

『亦過去し諸の佛に於ても、供養し尊び重め、諸の善根を種ゑたり。此の諸の衆生は、始め我が身を見、我が所説を聞いて、即ち皆信じ受けつ、如來の慧に入りき』

これは「華嚴經」などを聞いて、はじめから菩薩の修行をしたもの、さういふものは徳の厚いものである。

『先より修習ひて小乘を學べる者をば除く』

さういふ者も四十餘年世話をした結果、今皆此の經を聞いて、此の會に居ることを得た、上根の者は「華嚴經」の時から修行した、下根の者も今此の「法華經」で眞に入らしめたから、俺の事業も完結した、安心するが宜からう。

#### 五、隨喜と述歎

佛様がさういはれたので、そこで諸の菩薩がお禮を申上げた。

『爾の時、諸の大菩薩、而ち偈を説きて言さく、

善い哉善い哉、大雄世尊よ、諸の衆生の等、化度ふべきこと易く、能く諸佛の甚深き智慧を問ひたてまつり聞き已りて信じ解れり、我等隨喜喜びまつる

於時、世尊、上首なる諸の大菩薩を讚歎へたまはく、善い哉、善い哉、善男子よ、汝等能く如來に於て隨喜の心を發せり』

これまでが本門の教を聞く人達、即ち本門の教を發起した、佛がお説きにならなければならぬやうに、地涌の菩薩が出て来た、そして其の地涌の菩薩がチャント並んでしまつた、即ち本門の序で、これから次が、變なものが出て来たといふので「疑問序」であります。

### 六、此土迹化菩薩の疑念請答

それから、これまでの菩薩達——迹化の菩薩が疑ひ出した。

「爾の時、彌勒菩薩、及び八千恒河沙の諸の菩薩衆は、皆是の念を作さく、我等昔より已來、是の如き大菩薩摩訶薩衆の、地より涌出で、世尊の前に住ひ、合掌し供養して、如來を問訊ひたてまつれることを見ず、聞かず」其の問訊ひ方が餘りに親しいお話を申上げて居る、こんなことは聞いたことも見たこともないといふので、

「彌勒菩薩摩訶薩、八千恒河沙の諸の菩薩等の心の所念を知り、並に自ら所疑を決かんと欲ひつ、合掌して佛に向ひ、偈を以て問うて曰さく」  
偈を以て正しく問ふ、

「無量千萬億の大衆の諸の菩薩は 昔より未曾て見ざる所なり 願はくは兩足尊よ説きませ 是何れの所より來れる」

一體何處から來た菩薩ですか、  
「何の因縁を以てか集へる」

一體何の因縁で來たのですか、

「巨身くして大じき神通あり 智慧思ひ議り難く」

前のところでは、此の菩薩は「身皆金色にして三十二の相と無量の光明とあり」とあるが、こゝでは心を歎めてある、

「其の志念堅固にて 大じき忍辱の力有り 衆生の見んと樂ふ所なる 爲何れの所より來れる」

何の因縁、何の意味で、何處から來たものか、

「一一の諸の菩薩が 將むたる所の諸の眷屬は 其の數量り有ること無く 恒河沙に等しきが如し 或は大菩薩の 六萬の恒沙を將むたる有り 是の如き諸の大衆 一心に佛道を求む 是の諸の大師等 六萬恒河沙あり 俱に來りて佛を供養し 及び是の經を護持つ」

前はお經を書いた人が其の姿を示したが、こゝでは彌勒がその事柄を以て佛様にうかゞつて居ます。

「五萬の恒沙を將むたるは 其數是にも過ぎたり 四萬及び三萬 二萬より一萬に至り 一千一百等 乃至一恒沙

半及び三四分 億萬分の一 千萬那由佗 萬億の諸の弟子 乃至半億に至るは 其の數復上に過ぎたり 百萬

より一萬に至り 一千及び一百に 五十と一十と 乃至三二一なるもの 單己のみにして眷屬無く 獨りの處を樂

ふ者も 俱に佛の所に來至ること 其の數轉た上に過ぎたり 是の如き諸の大衆 若し人の籌を行ひて數へ 恒

沙の劫を過ぎなんとも 猶盡く知ること能はじ」

斯ういふ澤山の菩薩方が來た、

「是の諸の威徳大じき 精進の菩薩衆は 誰か其が爲めに法を説き 教化して而も成就げしめけん 誰に従ひて

初めて心を發し、何の佛法を稱へ揚げ、誰が經を受持ちて行ひ、何の佛道を修習へる』

一體お師匠様は誰なのですか、それについて人と理と行と教とがあげられてある、誰に従ひて發心したのであるか—人、何れの佛法を稱へ揚げたか—理、それから誰が經を受持ちて行ひ—行、何れの佛道を修習へる—教。

從 誰 (人)

佛 法 (理)

誰 經 (行)

佛 道 (教)

教行人理といつて、佛教では必ず眞理は人が覺り、そしてそれをば教にして人を化ける、教へられる者は其の教によつて修行し、そして其の理におさまつて行くといふので教行人理、斯ういふやうに申すのであります、その教行人理がこゝにあげられて居ます。

『是の如き諸の菩薩 神通あり大智力あり』

神力を結歎す、

『四方の地震ひ裂けつゝ、皆中より涌出でたり、世尊よ我昔より來た、未曾て如是の事を見ず、願くは其の從る所の國土の名號を説かせたまへ、我常に諸の國に遊べども、未曾て是やうの事を見ず』

來りし國の答を請ふ

『我此衆の中に於ては、乃し一人をだも識らず、忽然として地より出でぬ、願くは其の因縁を説きたまへ』

來りし縁の答を請ふ、

『今此の大會の、無量百千億なる、是の諸の菩薩等、皆此の事を知らんと欲へり、是の諸の菩薩衆が、本末の因縁あるべし』

大會同じく請ふをいふ

『無量の徳おはします世尊よ、唯願くは衆の疑を決きませよかし』

師主誰ぞの答を請ふ。

此の中の「乃し一人をだも識らず」、此の語について、有名なことがあります、此の前どころに「我常に諸の國に遊べども、未曾て是やうの事を見ず」とあります、彌勒菩薩は釋尊が最初「華嚴經」を説かれた頃から居る菩薩であつて、そして此の菩薩は十方の世界に常に行つて居る、十方の佛様の所であらゆる菩薩とお目にかゝつて居る、しかもそれは四十餘年の間、佛様一代の教化の中、十方の世界のあらゆる佛様の所に行つた、然るに今此の六萬恒河沙の菩薩は一人をも識らない、不思議千萬だ、一體何處から來たのですかといふことを伺つて居る、此の「乃し識一人」といふ、これに對して天台大師が、何故彌勒菩薩が知らないのだらう、不思議ではないかと云つて、有名なことがあります、

別頭、教化、所有、眞應、非彌勒、境界

『別頭の教化、所有の眞應、彌勒の境界に非ず』といはれた、日蓮聖人の宗教のことをば「別頭佛教」などと云ふのは、皆これから來てゐます、「別頭」とは別の頭といふことではならず、此の「頭」と云ふのは「類」と云ふことです、

彌勒菩薩などが教を受けた其の教とは全然別の類の教なのだ、仲間の違ふ教なのだ、別の教化である、普通の十方の佛や、或は「華嚴經」とか「大日經」とかの毘盧遮那佛などといふさういふお經の教化とは違ふ、それ等の經々には、「華嚴經」には佛の數や菩薩の數は數限りない、「大日經」等には千二百餘尊等といふものが出て来る、けれどもさういふやうな佛や菩薩とは類が違ふのだ、等級が違ふ、全然別の所で教化した、それだからこそ彌勒菩薩は、此の本化の菩薩の所有の眞應、眞應とは眞身應身といふ、その本當の本化の菩薩の眞の身體も、本化の菩薩が何かに變化する身體も、到底彌勒菩薩の境界ではわからない、類が違ふのだ、斯う天台大師が解釋されてありますが、これで佛教には、此の「涌出品」以前の佛教と以後の佛教と、全然相場が違ふことがわかります、一切經の何處をさがしても、どんなに澤山の菩薩や佛が説いてあつても、上行等の地涌の菩薩は出て来ないのであります。

祕密佛教だといふ「大日經」等の佛教では、此の別頭教化と同じやうに、一般の佛教は顯教で、此方は密教だ、顯教の方は應身や他受用報身といふ身の佛が説いた、密教は法身の説である、又は自受用報身の説である、従つて密教の菩薩は皆違ふといつて居ます、しかしその法身の大日如來の第一番の菩薩、それは金剛薩埵です、此の金剛薩埵は一體どういふ菩薩だといひますと、これは普賢菩薩のことです、普賢菩薩が密教にはいると金剛薩埵になる、普賢菩薩といふ菩薩は一體どういふ菩薩だといひますと、普賢菩薩は彌勒菩薩や文殊菩薩と同じやうな菩薩です「華嚴經」では文殊菩薩と肩を並べて居る菩薩です、それが大日如來の一ばんの弟子となつて居る、斯ういふ菩薩を迹化の菩薩といふ、迹化といふのは迹佛の教化を受けたといふことで、久遠實成の佛が顯はれると、大日如來などは久遠實成の佛の應身から垂れた所の方便の法身報身となつてしまふ、従つて迹佛といつて影法師の佛様だ、金剛薩埵などは其の

影法師の佛の弟子だ。

従つて「大日經」「華嚴經」にない位であるから、それ以外の經には何處にもない、これを別頭の教化といふ、上行等の佛法と、外の佛菩薩の佛法とは、佛法の類が違ふ、何う類が違ふかといふと、根本の唯一佛陀の存在を認めるか認めないか、それと同時に宇宙には一貫したる不滅の道德法あり、さういふことを認めるか認めないか、斯ういふ問題になる、それは本法を認めるか、本佛を認めるかといふ問題で、本法・本佛といふものを宣傳するのが此の地涌の菩薩であつて、これを本法・本佛・本僧といふ、それを本門三寶といひます、その本門の三寶を認めるか認めないかで佛法の類が違ふことになるのであります。

七、他土の菩薩の疑念請答

彌勒菩薩がさういふ風にうかゞつて居ると同時に、

「爾の時、釋迦牟尼佛の分身の諸佛の、無量千萬億の他方の國土より來りたまへる者、八方の諸の寶樹の下なる師子座の上に在して結跏趺坐したまへる、其の佛の侍者たち、各々是の菩薩大衆の、三千大千世界の四方に於て地より涌出で、虚空に住へることを見て、各其の佛に白して言さく、世尊よ、此の諸の無量無邊阿僧祇の菩薩大衆は何れの所よりか來れる」

といつて、分身の佛の侍者たる菩薩が又うかゞつた、さうすると其の佛様たちが答へられるのは、

「爾の時、諸の佛各侍者に告げたまはく、諸の善男子よ、且く須臾を待て、菩薩摩訶薩の名を彌勒と曰へる



有り』

此の彌勒菩薩は、此の次にお前が佛になるのだといふので、これを補處の菩薩といふ、佛様がおかくれになつたならば、その後を補ふ菩薩が彌勒菩薩です、

『釋迦牟尼佛の授記したまふ所にして、次で後に佛と作るべきが、已に斯の事を問ひたてまつれり。佛、今將に答へたまはん、汝等亦是に因りて聞くことを得べしと』

こゝまでが本門の序分なのであります、これから佛様が本當の佛法をばお説きにならうといふ所です、少し休憩いたします。

### 八、如來誠めて答を許したまふ

これから本門の正宗分であります、いよ／＼佛様が本門の佛法をばお説きにならうといふについて先づお誠めになつた、輕々しく聞いてはいけないといふことをお誠めになるのであります。

『爾の時、釋迦牟尼佛、彌勒菩薩に告げたまはく、善い哉善い哉阿逸多よ、乃し能く佛に是の如き大事を問へり。』これはお誠めになる最初に、先づ大切なことを能く問ふたといふのでお歎めになつた。

『汝等當に共に、一心に精進の鎧を被、堅固の心を發すべし。』  
うかく／＼聞くことはならない、一心に精進の鎧を被堅固の心を發せ

『如來は今、諸佛の智慧と、諸佛の自在神通の力と、諸佛の師子奮迅の力と、諸佛の威猛大勢の力とを顯發し、

宣示さんと欲す』

『諸佛の智慧』とあつて、こゝで諸佛と書かれると佛様が澤山あるやうであるが、こゝは未だ佛の唯一佛のところをお示しになつて居ないから諸佛とお書きになつたが、その諸佛の智慧は、唯一佛なのだから、本當の智慧は本佛の智慧であります。

諸佛の智慧——これは佛の果智で、それをばお説きになる、佛の本當の本體——佛は覺だから、佛の本體は智慧だ、どういふ智慧であるかといふならば、宇宙法界の根本の眞理と一つになつて居る智慧なのだ、その諸佛の智慧をこれから説かれるのである、その諸佛の智慧は、唯諸佛の智慧そのものが、智慧だけではない其の智慧は働いて居る、すべて化用として働く、佛といふものは恰度智慧と慈悲の、どの佛でも二つの本體がある、先刻申上げた法身報身・應身といふのも、法身は眞理で、報身は智慧で、應身は慈悲、此の三つものは一つの佛の中にある、その正體は一つのものにあるから、必ず佛は智慧の本體に慈悲を具して居る、諸佛の智慧は本體であつて、その諸佛の智慧の本體は慈悲として動き出す、それは『諸佛自在神通の力』として動き出す、それから『諸佛師子奮迅の力』『諸佛威猛大勢の力』、此の三つになつて動き出すので、諸佛自在神通の力——これは佛の過去に一切衆生を利益するために働きになつたその力、それはさまざまの變化自在の化導を遊ばされた。それから諸佛師子奮迅の力——これは現在に、一般に勝れたる聖の力、あらゆる邪惡を破折する師子奮迅の力をふるつて、自在に衆生を利益して居られる、それから諸佛威猛大勢の力——これはその師子奮迅の力が、威猛大勢の力、不滅の力として未來に利益される。

諸佛自在神通の力——過去・益物

諸佛師子奮迅之力——現在益物  
諸佛威猛大勢之力——未來益物

三世に互つて常に一切衆生を利益する爲に、佛はすべての働きをお示しになつて居るのである、それをこれから教へようと思ふといふので、

『如來は今、諸佛の智慧と、諸佛の自在神通の力と、諸佛の師子奮迅の力と、諸佛の威猛大勢の力とを顯發し、宣示さんと欲す』

と仰せられたのであります。

### 九、偈頌もて重ねて誠許す

そのことをば佛は重ねて偈を以てお説きになつた。

『爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく』

『當に精進して心を一にせよ、我此の事を説かんと欲ふ、疑悔有ることを得ること勿れ』

一心に信ぜよ、お前達の智慧才覺でわかることではない、精進の鎧を被、堅固の心を發せ、

『佛智は思ひ議り叵し、汝今信力を出して、忍善の中に住れ、昔より未だ聞かざる所の法を、今皆當に聞くことを得べし、我今汝を安慰めん、疑懼を懷くことを得ること勿れ、佛には不實の語無く、智慧量るべからず、得る所の第一の法は、甚深くして分別し叵し、是の如きを今當に説くべし、汝等心を一にして聽け。』

偈頌を以て重ねて佛の智慧と、三世の化益をば仰しやツたのであります。

### 十、略して開近顯遠す

これから大體佛様の眞實をお説きになる、即ち以下本門正説分、略開近顯遠であります、略開近顯遠といふのは、くはしく佛様の本門を顯はさないけれども、略して佛様の本門をチヨツピリとお顯はしになつた、斯ういふのであります、略して開近顯遠す、これに「師弟を答へたまふ」、「處る所を答へたまふ」、「師弟を釋したまふ」、「處る所を釋したまふ」と四つある中、先づ師弟を答へたまふ。

『爾の時、世尊、此の偈を説き已りて彌勒菩薩に告げたまはく、我今此の大衆に於いて汝等に宣告ぐ。阿逸多よ。』  
阿逸多といふのは彌勒のことです翻譯すると無能勝といひます、普通の娑婆世界ではお前より勝れたる者はないといふので、阿逸多——無能勝といふ名前です。

『阿逸多よ、是の諸の大菩薩摩訶薩の無量無數阿僧祇にして、地より涌出でたる、汝等が昔より未だ見ざる所なる者は、我是の娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、是の諸の菩薩を教化し、示導きて、其の心を調伏せて、道の心を發さしめたるなり。』

此の菩薩は、みんな自分が發心せしめたものであるといはれました。先づ誰について此の菩薩たちは佛教の行と佛教の教を聞いたものでございますか、と彌勒がきいたものですから、其のお師匠様は俺なのである、俺がはじめて彼等に菩提心を發さしめたと答へられた。

「此の諸の菩薩は、皆是の娑婆世界の下の、此の界の虚空の中に於て住へり。」

お前は十方の世界に行つて知らない所はないといふことであるが、これはお前の知つて居る所とは違つて、娑婆世界の下方空中に居つたのだ、これは場所を答へられた。

「諸の經典に於て、讀誦んじ通利り、思惟り分別へて、正憶念せり。」

これは、俺の發心せしめた彼等がどんな風に修行したかといふならば、彼等は此のやうに、智慧の方は益々進め、煩惱は斷つ、智慧の澄むこと、煩惱を斷つこと、此の二つの智斷二徳の修行をして居つた。

「阿逸多よ、是の諸の善男子等は、衆に在りて多く説く所有ることを樂はず。常に静けき處を樂ひて、勤め行ひ精進して、未だ曾て休息まず。」

これは本化の菩薩の徳において能く考へなければならぬことであります、本化の菩薩が出て來る任務はどんなことであるかといふと、三類の強敵を引き受け、そして進んで彼等を折伏し、一切衆生を敵にして闘ふことだ、その敵にして闘ふやうな菩薩は、それでは荒々しい修行をして來たのかといふと極めて静かなる修行をして來た、その荒々しいことをするには、強いことをするのは、極めて静かなる、極めて優しきことをやつて來たものが、其の荒々しい力が出るのでなければいけない。

「是の諸の善男子等は、衆に在りて多く説く所有ることを樂はず。」

餘り喋べることを好まない、説法したがない、多く説く所有ることを樂はずである、どうかすると喋べることの好きだといふやうな人があるが、さういふのではない、喋べるのではない實行するのが好きだ、それでは餘り喋べ

るのが嫌ひだといふのは、物を知らんかといふと、

「諸の經典に於て讀誦んじ通利り、思惟り分別へて、正憶念せり。」

といふのだから、一切卒業して居る、讀誦んじたことをば能く通達して居る、そして又自分の心にふりかへつて、思惟つて、分別して正憶念して居る、一切の念ふことは皆的をばづれない、さうであるに拘らず、衆に在りては多く説く所有ることを樂はず、大勢の所に行つて、威張つて説法することは嫌ひだ。

「常に静けき處を樂ひて、勤め行ひ精進して、未だ曾て休息まず。」

それが上行菩薩だ、何處まで行つても無限の向上だ、上行菩薩といふ標幟はそこにある、無限の向上心だ、無邊行も無邊だから邊が無い、積極的な無限性の發展を示したものである。

「勤め行ひ精進して、未だ曾て休息まず。」

常に静けき處を樂ひ、そしてそれと同時に勤め行ひ、精進して未だ曾て休息まず、それが上行菩薩の徳である。

それから又處る所はといふと、

「亦、人天に依止りて住はず、常に深き智を樂ひて、障礙有ること無し。亦、常に諸佛の法を樂ひ、一心に精進して、無上の慧を求むるなり。」

此の本化の菩薩といふものは、その性格はこれに一言にいふと、無限性の求道者であります、此の本化の菩薩は佛にならない菩薩、迹門の菩薩は皆佛になるが上行等の本化の菩薩は無限に何時までも菩薩で、無限性の求道者です。

晝夜常精進爲レ求佛道一故

此の十字が本化の菩薩を代表した語なのであります。晝夜に常に精進して、佛道を求むるが爲の故に……、そして無始久遠の昔から此の出で来た時は菩薩ですが、未だ佛になつて居らない、舍利弗尊者でも阿難尊者でも、みんな澤山の佛に値つて、そしてどれだけの劫を経て佛になつてしまふ、ところが此の本化の菩薩は、五百塵點の久遠のその往昔、釋尊にはじめて菩提心を發さしてもらつて、それ以來晝夜に常に精進して居るのに未だに菩薩だ、無限の菩薩だ、佛になりたがらない菩薩、これがなければ、みんな佛になつてしまつたら本當は困る、何かになりたいたいふことを豫想して居るやうな者はもう駄目だ、それは未だ佛にならない菩薩のまゝでいゝのだ、何處までも菩薩のまゝで安然として、普通の佛以上のことをする菩薩である、それでなければ駄目だ。

支那には澤山の英雄豪傑がある彼等は何をするかといふと、大抵皆徳を修め人望を得て人心を收攬し、人心を收攬して何になるかといへば、その結果は王様になる、前の王を蹴とばして自分が王様になる支那歴代の王は皆さうだ、西洋にもある、英雄などといふものは皆さうだ、此頃の人間はよく出世する爲に勉強したりする、さういふ人間ばかりが居つたならば世の中は善くならない、平和などは決して來ない、眞の絶對平和といふものが世の中に出て來るのは晝夜常精進爲求佛道故するやうな人間でなければならぬ、何かになりたいたいふのであつたら、世の中は何時にも不安不平、さまざまなことがある、何かを求めない何を求めるといへば道を求めるだけ、そして晝夜常精進して何かの果報を求めない、果報を嫌ひはしないが、無かつたら無くてよい、出て來るなら勝手に出て來い、自分は爲すべきことを爲す、さういふことにならなければ本當の世界は出て來ない、俺はこれだけのことをしたから、あゝして欲しいといふならば、必ず此方はさう思つても向うはさうは思はない、常に我慢葛藤といふことになる。

本化の菩薩は無限性の求道者である、活動は何時でも止めない、そして求めるところは何も無い、唯道を求める、そこに絶對安心があるのだ、さういふ者ばかりの世界、それが常寂光といふ世界である、本化の菩薩の居る所が常寂光であるのは其のためだ、こゝに其の一斑が示されて居ます。

『亦、人天に依止りて住はず。』

人天なんてものは、あゝしたい斯うしたいといふもので、さういふ所には住まない。

『常に深き智を樂ひて、障礙有ること無し。亦、常に諸佛の法を樂ひ、一心に精進して、無上の慧を求むるなり。』  
以上が略開近顯遠であります。

十一、重ねて偈頌もて開顯す

「爾の時、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、而て偈を説きて言はく、  
阿逸よ汝當に知れ 是の諸の大菩薩は 無數の劫より來た 佛の智慧を修習へり 悉く是我が化す所にして 大道の心を發さしめたり 此等は是我が子なり 是の世界に依止りて 常に頭陀の事を行じ 志靜けき處を樂ひて 大衆の憤鬪を捨て 説く所多きを樂はず」

其の大衆の憤鬪を捨て説く所多きを樂はざるところのものが、聚落城邑に至つて法を説くのだ、そこではじめて畏るゝところなき化導が出来る、それは求むるところがないからである、

「説く所多きを樂はず 如是の諸の子等 我が道法を學び習ひ 晝夜に常に精進して 佛道を求むるが爲の故

に 娑婆世界の下方なる空中に在るなり 志念の力堅固して 常に勤めて智慧を求め 種々の妙法を説きて 其心畏るゝ所無し 我伽耶城なる 菩提樹の下に於て坐し 最正覺を成ぐることを得つ 無上の法輪を轉らして 爾して乃ち之を教へ化し 初めて道心を發さしめき 今ぞ皆不退に住れる 悉く當に成佛することを得つ 我今實の語を説く 汝等一心に信ぜよ 我久遠より來た 是等の衆を教へ化せり』

これが「略開近顯遠」であります。さやうな澤山の菩薩達を釋尊は初發心の時から教化された、然るに彌勒菩薩は最初「華嚴經」の時から、佛に従つて菩薩達を知つて居る、その彌勒菩薩からいつたならば、今、佛のいはれるやうなことは、全然そんなことがあつた筈はない、まして沉んや數からいつても、到底思ひも計りもかなふことの出來ない澤山の菩薩である、それを釋尊が初發心から教へたなどといふことは到底考へられない、そこでそれによつて、おのづから此の佛は、決して今出た佛でないといふことが暗示されてゐる、それを略開近顯遠といつて居るのです、すなはち、此の菩薩たちは俺が教へたといふことを確實にいはれた、そして其の菩薩たちの効能まで説かれたことは、それが自から釋尊の久遠實成を略していはれたことなるのであります。

十二、疑に因りて更に答を請ふ

そこで今度は彌勒菩薩がこれを疑ふ、その疑ひに因つて更に答へを請ふ、どうしてそんな風に佛様が教化されたのであるか、何時の世に教化されたのであるかとお尋ねしたのです。

「爾の時、彌勒菩薩摩訶薩、及び無數の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾て有なしと怪みつ、而ち是の念を作

す、云何してか世尊は少時の間に於て、是の如き無量無邊阿僧祇なる諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住らしめたまひけん』

此の菩薩たちは佛にこそなつて居ないが、皆佛の道に實際に住してしまつて、退くことのない方々である、それがこれだけ多くの數である、一體佛さまは、何時此等の方々を教化されたのであらうかと疑つた、

「即ち佛に白して言さく 世尊よ、如來は太子にて爲し、時、釋宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐しまして阿耨多羅三藐三菩提を成ぐることを得たまひき。是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり。世尊よ、云何してか此の少時の時に於て、大きに佛事を作したまへる。佛の勢力を以てや、佛の功德を以てや、是の如き無量の大菩薩衆を教化して當に阿耨多羅三藐三菩提を成さしめたまふべき。』

これはどうもうけとり難いことでございます。

「世尊よ、此の大菩薩衆は、假使人有りて、千萬億の劫に於て數ふとも盡すこと能はず』

「其の邊をも得じ。斯等は久遠より已來、量無く邊無き諸佛の所に於て、諸の善根を植ゑ、菩薩の道を成就げつ、常に梵行を修めたり。』

其の菩薩方を見ると、到底我々のやうな菩薩とは全然類が違ふ、身皆金色にして三十二相を具へて居る、此の違ふ相をば日蓮聖人が、本化の菩薩で弟子の一人もないやうな菩薩と、彌勒菩薩や普賢菩薩と比べると、帝釋の前に猿猴が來たやうだと仰せられた、それほど本化の菩薩は威儀尊特だ、大抵な佛様もかなはないやうな結構な有難い菩薩だ、

そのことを彌勒菩薩がいつて居る。斯等の菩薩たちは久遠より已來修行したものである、到底我々の及ばない菩薩であるが、此の菩薩は佛様がお教へになつたといふことは、どうも不思議だ、

『世尊よ、此の如きの事は、世の信じ難き所なり。』

到底信じられない、それで今度は譬を開いて疑ひを述べる。

『譬へば人有りて、色美しく髪黒く、年二十五ならん。』

これは、お釋迦様方は、甚だ失禮ですが、二十五歳の人にしか見えない、然るに此の大菩薩たちは百歳の人やうだ。

『百歳の人を指して、是我が子ぞと言ひ、其の百歳の人も亦年少きを指して、是我が父なり、我等を生み育めりと言はば、是の事信じ難きが如し。』

到底信じられないのであらう、今佛様の仰しやることも恰度それと同じである。

『佛も亦是の如し、道を得ませしより已來、其れ實に未久しからず。而るに、此の大衆の諸の菩薩等は、已に無量千萬億の劫に於て、佛道の爲めの故に、勤め行ひ精進して、善く無量百千萬億の三昧に入り、出で、住ひつ。大じき神通を得て、久しく梵行を修め、善に能く次第に諸の善法を集めて、問答に巧みにして、人中の寶ぞかし。』

これも本化の菩薩の徳の中の一つをあげたのであつて、前の所には『志念の力堅固にして、常に勤めて智慧を求む』、『其心畏るゝ所無し』或は『衆に在りて多く説く所有ることを樂はず』とあるが、それと同時に問答に巧みにして人中の寶である、説くのは嫌ひだが、若し問答にぶつかつたならば、その問答に巧みなることは、一問答したならば相手

の急所をつく、殆んど人中の寶である、一切の世間に甚ど爲希有なるところである。

人中の寶——それは三寶尊で、佛様と法、その佛様や法の眞實を傳へるものが僧である、久遠の佛がおかくれになつても、久遠の法が世にかくれてゐても、此の本化の菩薩が出たならば、その久遠の法を示し、久遠の佛を示される、それを示すのは此の本化の菩薩にかぎる、そこで

『問答に巧みにして、人中の寶ぞかし、一切の世間に甚ど爲希有なり』

とあるのです。

『今日の世尊、方に佛道を得ませし時、初めて心を發さしめ、教化し示導きて、阿耨多羅三藐三菩提に向はしめきと云ふ。世尊は佛を得ませしより、未だ久しからざるに、乃し能く此の大功德の事を作したまへる』

それに對して我等はわからない、わからないけれども信することは出来る。

『我等は、復、佛の宜しきに隨ひませる所説、佛の出します所の言の未だ曾て虚妄なきことを信じたてまつる。』

信することによつて、佛の知しめす所は皆悉く通達する、自分にわかるのではない、佛様の仰しやることは、眞のことに相違ないと信するから、どうもをかしいけれども私は佛を信じて居ますから、仰しやることは本當だと信じます、然し

『諸の新發意の菩薩、佛の滅したまへる後に於て、若し是の語を聞かば、或は信じ受けずして、而ち破法の罪業を起す因縁とならむ』

私達はもう佛を絶對に信じてゐますから、それを信じますが、其のわけをお説き下さらないと、後の世に於いて新に

佛敎に信を發した新發意の菩薩は、これを信ずることが出来ないでせう、どうかそれらの者が破法の因縁を得ないやうに教へていただきたい。

『唯然、世尊よ。願はくば爲めに解説して、我等が疑ひを除かせたまへ。』  
即ち滅後の菩薩たちの爲めに教へていただきたい。

『及び未來世の諸の善男子も、此の事を聞き已りなば、亦疑ひを生ぜざらむ。』  
現在の新發意の爲めに、又滅後の人々のために、どうかそれを説いて頂きたいものであるといつて、彌勒菩薩がお願ひ申上げた。

十三、重ねて偈頌を以て答を請ふ

その彌勒菩薩が再び重ねて偈を以て更にお願ひした。

『爾の時、彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲ひ、而て偈を説きて言さく』

『佛は昔釋種より 出家して伽耶に近き 菩提樹に坐したまへり 爾より來尙ほ未久しからず 此の諸の佛子等は 其の數量るべからずして 久しく已に佛道を行ひ 神通智力に住ひ 善く菩薩の道を學びて 世間の法に染まざることを 蓮華の水に在るが如し。』

これも亦有名な語です。

不染三世間法

如蓮華在水

娑婆世界といふ世界は悲華經などといふ經に書いて居るところによると、十方の佛の世界の中で、もうこんな悪い奴はいけないといふので追ひ出した不合格者——今學校の入學試験があるけれども、あつちの學校にも此方の學校にもはいれない劣等生ばかりが集つたやうなのが娑婆世界であります、十方の世界の中で、彼方の佛の國でも此方の佛の國でも、お前のやうな者はいかんと追放された、それがみんな娑婆世界に生れて來るのです、即ち娑婆世界は缺點だらけの者が居るところで、劣等生ばかりの學校のやうな所であり、それだから一ばん最初話したやうに、娑婆といふことは堪忍の世界で、何か忍ばなければ居れない、忍ばない奴が居ると始終喧嘩する、人が繁盛で増上慢で欲が深い、それが娑婆世界です、汚いところだ、然るに此の本化の菩薩は、不思議にも阿彌陀様の世界にも藥師様の世界にも行かず、優等生の學校にはいらぬ、そしてわざ／＼劣等生ばかり居るところにはいつて居る、劣等生ばかり居るから劣等生と一緒になるかといふと、劣等生の中には居は居るが一緒にならない。

『世間の法に染まざること、蓮華の水に在るが如し。』

蓮華は水にあつても其の水に染まない、蓮華は泥の中に生ずる、此の本化の菩薩は娑婆世界といふ十方世界の中で一ばんいけない世界——泥のやうな所、その泥の中から出て來た蓮華である、此の蓮華が本化の菩薩であります、そして世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如し、それが妙法受持の菩薩と斯ういひます、本化の菩薩のことをば、本法受持の大菩薩といひます、本法といふのは何であるかといふと、妙法蓮華經であります、妙法蓮華經といふのはどういふことだといふと、蓮華を以て譬へてあります、蓮華は必ず淤泥の中から出ます、穢い所から最も綺麗なもの

が出て来る、穢い中から出てそして其の淨さは、何ものも比較の出来ない淨さを有つて居る、「淨穢不二」といって、淨いことゝ穢いことゝが本體に於いて一つなのであります、蓮華そのものは恰度「淨穢不二」を示したもので、煩惱即菩提、生死即涅槃といふことをば示したものが蓮華です、本化の菩薩は世間の法に染まざること、世間に居ながら世間の法に染まざること、それが蓮華の水にあるが如くであります。

「地より而て涌出でつ 皆恭敬の心を起して 世尊の前に住りけり 是の事思ひ議り難し 云何して而信す可き 佛の得道は甚と近くましますに 成就したまへる所は甚も多し 願くば衆の疑を除かん爲めに 實の如に分別して 説きませよ 譬へば少壯き人の 年始めて二十五なるが 人に百歳なる子の 髮白く而面皺めるを示し 是等我が生める所なりとし 子も亦是父なりと説くも 父の少くして子の老いたる 世を擧りて信ぜざる所ならんが如し 世尊も亦是の如く 道を得ませしより 來甚近きに 是の諸の菩薩等は 志固くして怯弱無く 無量の劫より來た 而ち菩薩の道を行じ 難問答に巧みに 其の心畏るゝ所無く 忍辱の心決定り 端正して威徳有り、十方の佛の讚へます所なり」

これも有名な語であります。

巧ニ於難問答一 其心無所畏

忍辱心決定 端正有二威徳一

此のお語を見てみますと、斯ういふ人が何處かにあつたらうかといふので、自から日蓮聖人の人格が思はれます、巧於難問答其心無所畏——日蓮聖人のあのお姿を拜見してゐると、此の語はもうそのまゝ大聖人を示されたやうに思は

れます、難問答に巧にして其の心畏るゝ所無し、——大聖人の幕府に向つても、各宗のあらゆる高僧大徳に向つても——聖人の時代は各宗共皆前後に較べるところ少ない程相當偉い人が揃つてゐました、その人達を相手にして畏るゝ所無く、忍辱心決定、あらゆる難儀が來たのをば、聖人自ら「本ヨリ存知ノ旨ナリ」といふ忍辱心決定、そして聖人のあの一舉一動、御傳記の上を拜見しても極めて折目端正しい、その出所進退の端正しさいふものは實に端正である、そして威徳有り、御像を拜見しても日蓮聖人の御像は實に御立派だ、堂々たる美男です、端正にして威徳有り、その菩薩は十方佛の讚めたまふところである、それから、

『善に能く分別して説き 人衆に在ることを樂はず 常に好みて禪定に在り 佛道を求むるが爲の故に 下の空中に於て住へり』

さういふやうな偉い徳のある菩薩です、私達は佛より聞きまつれば此の事に於て、斯の如き菩薩も釋尊の弟子だといふことは、佛から直接うかがふから、此の事に於いて疑ひ無きも

『願くば佛未來の爲めに 演説して開解しめませ 若し此の經に於て 疑を生し信ぜざらん者有らば 即ち當に惡道に墮ちなん 願くば今爲めに解説しませ 是の無量なる菩薩をば 云何してか少の時に於て 教化して發心せしめ 而も不退の地に住らしめたまひけるらむ』

と彌勒菩薩がおたづね申上げた、これを

騰疑致請

といひます、疑を騰して請ふことを致す、どうかお答へして頂きたいといつてお願ひ申上げた、騰疑致請は佛の將來



の御説法をお願ひ申上げたのであります。

これは何時も申しますが、大聖人の本地の徳が此の「涌出品」にはすべて示されてあります、本化の菩薩が御垂迹になつて、そして御化導を遊ばすお徳は「勸持品」に三類の強敵のことが示され、「神力品」にその御説法の根據が示され、それから其の功徳が示されてあります、そして本地の御徳が此の「涌出品」に示されてあるのです、大聖人の御一代で「涌出品」の姿をお示しになつたのは、あの身延におはいらになつた八年の間です、「身延山御書」に

『佛ニナル道ハ師ニ仕フルニハ過ギズ』

と仰しやツた、それから身延で故郷の御兩親をお慕ひ遊ばされた、それから地涌の常好在禪定とは、大聖人が身延におはいらになつたことは、鎌倉での説法をお止めになつておはいらになつたので、これは禪定におはいらになつたのであります、その禪定におはいらになつた大聖人が、自ら弘安四年の蒙古襲来について、禪定の中からの護國の本尊をお顯しになり又その一年前に「諫曉八幡抄」といふ御書、來襲の一月前には「三大秘法抄」等を示さして、日本の本来の因縁、全世界に向つての本來の因縁を顯發せられて此の國を護られた、本佛釋尊にお仕へになるところは、「晝夜常精進爲求佛道故」の其のまゝの姿、此の「涌出品」に書かれて居る本化の菩薩は佛に仕へて、晝夜常精進して佛道を求める爲めに身をいとではない、そのことを其のまゝ身延で、谷に下りては水を汲み、山に登られては薪をこり、或は佛に供へる花をお摘みになつたといふことが御書に書かれてあります、それから高き山に登つては父母を慕ひ、或は禪定によつて國を護るといふやうな事柄は、皆「涌出品」の御徳を身延山九ヶ年に於いてお示しになつてあるのです、鎌倉に於いての御弘通は恰度、「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如し」といふ折伏の御弘通で、身

延山におはいらになつての御人格は恰度謗法の國に居て、そして獨り世間の法に染まざること蓮華の水に在るが如き姿を示されて居るのであります、恰度「日蓮」の二字は、「涌出品」の蓮華、「涌出品」に於ける徳を示されて『如蓮華在水』の蓮、それから「神力品」の徳を示されて『如日月光明』の日、それが日蓮の二字を自解佛乘だと仰しやツてあります、御弘通では日月の光明の如くであり、御自身の御修行の場合は蓮華の水に在るが如し、此の二つを大聖人御一生の中には自からお示しになつてあるのであります。

そこで此の涌出品は、補處の菩薩即ち釋尊の後に、此の娑婆世界で次に佛になると約足せられたと、一般の佛教經典で定められてゐる彌勒菩薩に對して、『常に精進して心に一にせよ、我此の事を説かんと欲ふ、疑悔あることを得ること勿れ』、『佛智は議り直し、汝今信力を出して、忍善の中に住れ』、『汝等心を一にして聽け』と誠め許したまふ偈に宣ひ、『我今實の語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より來た、是等の衆を教化せり』と、略開近顯遠の偈頌にも仰せになつて、一毫も彌勒菩薩の智慧を許されてゐないといふことを會得せねばなりません。彌勒は地から涌き出て來た、無量無邊の本化の菩薩の、たゞの一人をも識らないのであります。すでに教へられた菩薩たちを識らないのですから、その師の佛をば識る筈はなく、その佛の教法を識る筈はなほさらありません。それをば天台大師が、『別頭ノ教化、所有ノ眞應、彌勒ノ境界ニ非ズ』といはれたので、恩師智學先生が、佛教の二大別だといはれるのは、この事なのであります。

一般の佛教の分類で申しますと、まづ小乗と大乘、これは誰でも知つてゐるのであります、それについて小大乘に通じてあるものが、教相と觀心でありまして、これをばまた教法と禪法とも申しますが、これは小乗にもあるので

して、修行の方になりますと、法行と信行ともいひます。すなはち教相教法の方で修行を立てるのが信行で、觀心禪法の方で修行を立てるのが法行であります。これを大乘の中で更に教法と觀心即ち教法と禪法とを對立させて、もっぱら禪法觀心のみで宗を立てたのが禪宗で、その方では教禪の二法とも二門ともいふのです。また聖道と淨土の二門、或はまた印と眞言とを説く經をば密教とし、それを説かない經を顯教として、顯密の二法とも分けまするし、またこの法華經に依りまして、權實の二教といふものを立てるなどいふことがありますが、それ等の中、大乘小乘の二教は措き、大乘の中で、教禪二門、聖淨二門、顯密二教、權實二教などいふことを申しますが、それらの經典を見ますと、その經の對告衆の菩薩は、みな文殊・普賢・彌勒・藥王などといふ類の菩薩でありまして、いはゆる迹佛の弟子の迹化の菩薩、他方の佛の弟子の他方の菩薩なのであります。密教の經の金剛薩埵も、顯教の普賢菩薩なのです。から、これもまた類の全く異つた菩薩ではないのです。その中でこの本迹の相違となりますと、全く他の經の佛と法とは類が違ふのですから、それをよく考へねばなりません。本化の菩薩は五百塵點劫以來、本佛の弟子として佛とならない菩薩であるといふこと、永遠の菩薩！かういふことに眼を括かねばなりません。本門の佛教は永久に一佛無量菩薩であることは、日本國體の一君萬民とひとしいのであります。本門佛教の成佛とは、無量の菩薩が本門の佛を信じて、本門の智慧をその信に依る智慧にしてしまひ、本佛の果報境界中に同如してしまふことなのです。だから、本化の菩薩を本佛同躰の大士といふのです。

以上、いさゝか從地涌出品を略講しました。

### 第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

#### 如來壽量品 總論

別頭佛教の根本本典

天台大師の宣言

傳教大師の宣言

日蓮聖人の宣言

叡山の混淆迷亂

法然・道元・親鸞三師

慧心・檀那の兩師

佛教思想史上の回顧

原始佛教

發展佛教

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

- 十方諸佛と中心釋尊
- 往生諸經の阿彌陀佛中心
- 諸法、空の般若
- 盧舍那の華嚴
- 法華經の壽量品
- 密部の諸經の大日中心
- 龍樹菩薩の兩向（般若と華嚴、その統一。大論と十住毘婆娑論）
- 天親菩薩の兩向（小乗と瑜伽・攝大乘の兩釋。往生論と法華論）
- 支那佛教（華嚴・涅槃系と般若・法華系、法相・華嚴・律・淨土・禪・真言、趙宋における四中心とその真中心）
- 天台・妙樂大師（嘉祥大師）
- 玄奘・慈恩兩師
- 曇鸞・道綽・善導諸師
- 法藏・澄觀諸師
- 道宣・弘景諸師
- 達磨・惠能諸師
- 善無畏・不空諸師

日本佛教

- 聖德太子
- 傳教大師
- 弘法大師
- 各その末裔
- 慧檀兩流の念佛化
- 野澤二流の彌陀化
- 良忍・覺鑊諸師
- 法然・親鸞諸師
- 榮西・道元諸師
- 覺盛・叡尊諸師

日蓮聖人の出現と別頭佛教の止揚

總 結

- 印度における壽量中心思想
- 支那における壽量中心思想
- 日本における壽量中心思想

第七講 如來壽量品・分別功德品・隨喜功德品・法師功德品

法華經十講の第七講「如來壽量品」であります、本日は「如來壽量品」の總論として「壽量品」は佛教中どういふ位地に居るものであるか、斯ういふことを、概略お分りになるやうにしたいと思います、少し専門的になりますが、それを一往話してから、本文に入つた方が分りよからうと思ひます。

「如來壽量品」といふ經文は、これを概括して申しますと、プリントに書きましたやうに、別頭佛教の根本本典であります、別頭佛教といふのは、此の前「涌出品」の時に申上げましたやうに、一般の佛教とは別類の佛教で、類が違ひます、どう類が違ふのであるかといひますと、一般佛教は共通の佛菩薩がおります、何のお經にも出て居る佛菩薩、何のお經にも出て居る菩薩方、さういふ一般共通の佛菩薩が説いてあります、其の佛菩薩といふものが一般共通になつて居るといふことは、何ういふことだといひますと、佛菩薩といふものは佛教の教理を人格化したものです、阿彌陀様ならば阿彌陀様、藥師様ならば藥師様といふ佛は、それは佛教の教理の一分を人格に現はしたものです、ですから何のお經にもある佛菩薩方といふことは、それは一般佛教の共通の教理を人格にして示したものであります、ところが此の前の「涌出品」の「涌出品」になりますと、外のお經に全然ない地涌の菩薩といふ菩薩が出て来て居ます、それは釋迦牟尼佛の次に佛になるといふ免狀をもらつた彌勒菩薩が、數限りの知れない地涌の菩薩の中但の一人も知つた菩薩はなかつた。「法華經」以外此の上行等の菩薩は、どのお經にも出て居ない、さういふ菩薩がこゝに出て來ました。

◇  
そこで彌勒菩薩が此の菩薩のお師匠様はどういふ方でありますか、其の佛様はどういふ佛様かわからないけれども、

其の我々の知らない佛様が教へるところの教はどんなものでありませうか。又其の教の歸着となる道理——理法はどんなものでせうか、又其の教を修行する修行法はどういふものでせうか、どうも自分等には全然わからない、斯ういつて釋迦牟尼佛にかゝつた、すると釋迦牟尼佛がこれらの地涌の菩薩の師匠は俺である、斯ういはれたので彌勒菩薩は驚いた、釋尊が佛になられてから四十餘年にしかならない、其の四十餘年の間諸所に法を説かれ又十方から澤山の菩薩が出て來た、自分も亦十方の佛様の所に行き、そして佛様にもお目にかゝり十方の菩薩にもお目にかゝつて大抵知り合ひだ、然るに今知らない菩薩が出て來て、其のお師匠様が釋尊だといはれるが、釋尊は四十餘年前の成佛であるから、自分の知らない筈はない、自分は佛を絶對的に信じて居ますから、佛様の仰しやることは嘘偽りはない、必ず其の通りに相違ないとは存じますけれども、信仰の上からは左様に承りますけれども、分るか分らんかといふと、サツパリ分りません、又私達は信仰上これは譯があることだらうと信じます、が、後の世に新たに佛教の菩薩道を修行する新發意の菩薩は、それを聞いて信じないでせう、其の爲めに竟に眞の佛法を失ふ因縁を起すことであらうと思ひますから、何卒どうしてこれら地涌の菩薩のお師匠様が釋尊——貴方でございませうか、その佛法の教理はどんなものでありませうか、その佛法の修行法はどんなことでせうか、どういふ教でありますか、それを是非うかゞひたいものですとお願ひした、其の時に佛は唯信じろ、一心に信ぜよ、精進の鎧を着、堅固の心を以て一心に信ぜよと仰せられた、それから彌勒菩薩が、佛の御語は必ず信じます、さういつたに拘らず、佛様は更に此の「壽量品」では、重ねて三度まで如來の語を信ぜよ、信ぜよ、信ぜよと仰しやつた、そして彌勒菩薩も必ず信じますと三度まで誓つた、誓つたに拘らず更に重ねて、——『如來の誠諦の語を信じ解るべし』と三度繰返した上に、又念をおされ

て、そして又必ず信じますと彌勒菩薩が重ねて誓つてから、はじめて此の「壽量品」を説かれた、つまりそれは、一般佛教——これまでの「壽量品」が説かれるまでの佛教と、「壽量品」が説かれてからの佛教とは全然類が違ふ、一切經五千七千の經教はあるけれども、此の「壽量品」のみが別類の佛教の本典なのだ、だからこれを別頭佛教の根本本典とするのであります。

これは私だけが勝手にいふものではありません、プリントに書いてある様に、天台大師も既にさういふ風にいつて居られます、それは『發迹顯本之三如來永異三衆經』(發迹顯本の三如來は永く衆經に異る)とあるのがそれなのです。迹を發き本を顯はすところの三如來は、永く他のすべての經教と異つて居る、『迹』といふのは此の前にも話しましたが、

足迹、影迹

といつて足迹のやうなものです、本體の人が居るのではない、足迹が残つてゐる、實際はない、實際はないけれども足迹がある、影迹といふのは影法師といふことで、釋迦牟尼佛が三千年前の印度に釋氏の宮に生れられ、そして伽耶城を去ること遠からざるところに於て、佛の覺を得られた、斯ういふことは、それは本體の佛が足迹を垂れられたものであり、恰度天の月が水の中に映つたやうな影である、それは本當の佛の本體ではないのだ、それは影であるといふことをば發かれる、そして本體を顯された、その本體の顯れたところの三如來といふのは、佛さまには三つの資格があることです、それは

- 法身如來
- 報身如來
- 應身如來

斯ういふ三つの資格があります。

法身如來といふのは眞理の本體です、それから報身如來といふのは其の眞理をよく徹見する智慧、それから應身如來といふのは、よく眞理を徹見して得た智慧から一切衆生を見ると、皆みづからの眞理の本體を知らない、智慧の鏡が曇つて居る、その爲めにさまざまの間違つたことをするのであるからといふので、大慈大悲を起して相手に應じて形をあらはして利益される、形だけでなく教を説いて利益されるから形聲益といふ二つを衆生に應じて施される。そのやうに佛の身を現はされて教を説かれるのは應身の所作である、その應身の奥底には宇宙の本體をよく覺つた智慧の身がある、其の智慧があるといふことは、智慧の相手たる眞理を自分の身に徹見した結果、眞理そのものを自分のものにしてしまつた、さういふ佛に三つの身がある、これは佛様ばかりではない、佛教で申しますと我々も矢張りチャントこの三つのものを有つてゐる、眞理なるものは宇宙の何處か片隅にあるものだらうか、何處か眞理の生れ所なんてものがあるだらうかといふと、眞理は宇宙に徧滿してゐる、何處にも行きわたつて居る、唯其の眞理の中心部と、中心でない片隅や尾のところとは、あることはあるけれども、眞理は宇宙に徧滿して居る、それから眞理も生きて居る造りつけのものではない、眞理は今申しましたやうに、中心部と周圍の縁とがあると假りにしたところで、それでは中心部と端の方とは造りつけに別になつて居るのかといふと、私の頭にも矢張り血は通つて居る、指の先に

も通ツて居る、足の先にも通ツて居る、恰度我々の身體が生きて居る方からいつたならば腹は中心部だけれども、ものを考へ、そして此の一身を支配する方からいつたならば頭が中心だ、頭が中心だけれども手の先も足の先も神経は通ツて居る、肉體生活の方では腹や胸が中心部だけれども、此の中心部から血管は諸所に通ツて居る、そんな鹽梅に眞理は宇宙に遍い、一ヶ所に固まつて居るものではない、宇宙の全體に眞理は行きわたつて居る、其の點から申しますと、我々も宇宙の中のものであることはちつとも變らない——我々はしばらくおいて糞蟲のやうなものでも——有名なことでは蛤蜊六郎といふ——糞蟲のやうなものでも、其の中には佛性が普遍して居る、然し眞理は普遍的なものだけれども、普遍したる眞理自身も、眞理に中心のあることは自覺することが出来る、自覺した結果それを知らないものに形を以て示し、行ひを以て示す、聲を以て示し、教を以て示す、さういふのが佛様の身なのです。

佛様には斯ういふ三つの身があります、一つの身體だけれども三つの資格があります、法身は體、報身は性であつて、應身は相です、佛様の相性體、これを我々にしたならば、報身は心であり、應身は身體であり、その心と身體を一緒にして居るものが法身であります、そんな風に佛様には三つの資格があつて、それを三如来といひます。「壽量品」に於いて發迹顯本したところの三如来は、永く衆經に異なる——佛敎のあらゆる經典に斯の如き佛様は説かれてゐない、さういふ佛が説かれて居ないといふことは、佛が全然違ふ、所謂別頭の佛で、頭は類の意味です、一般の佛とは違つた別類の佛です。ついでには一般の佛をいへば、佛といふものはどういふものであるかといふと、元は人間です、人間であるが其の佛はチャント宇宙の理を徹見せられたから佛様になつた、眞理を覺つたから佛様になつた、眞理を覺つただけでなく、教を説かれた、教を説かれただけでなく、その教といふものは總ての人が行へる教でなければ、

説いても役に立たない、それをチャント行へるやうに説かれた、これを教・行・人・理といひます。

佛が違つて居るといふに就て、普通に佛といふものは眞理を覺り教を垂れ、そして修行の方法を定められたのでありますから、それは佛といふ人間で皆代表してゐます、佛法は法なので、その法そのものは理法、教法、行法と三つあります、佛といふものは此の法と一つになつて居る、佛があつて此の理法・教法・行法がある、理法・教法・行法といふものは佛人格に表現された。そこで別頭の佛——發迹顯本の三如来といふものは「法華經」以外はない、斯ういふことはそれは理法に於いても、教法に於いても、行法に於いても、皆「壽量品」の教行理は諸經と違つたものであつて、斯ういふことを豫め示してあることなのであります、天台大師は其のやうに宣言せられて居ります。

それから傳教大師も亦、「内證佛法血脈」といふ、佛法が自分に傳はつて來たまでの系圖を書かれましたが、その「佛法血脈」の天台宗の第一は、久遠實成の大覺世尊である、それが自分の受けた眞實の佛法の源である、斯ういふことを示して居られるのであります、更に日蓮聖人に至りましては、これは有名な語ですが、

『一切經ノ中ニ此ノ壽量品マシマサズバ、天ニ日月ノ、國ニ大王ノ、山河ニ珠ノ、人ニ神ノナカラシゴトシ』

(開目抄)

と仰せられて居ます、一切經の中に「壽量品」のあるといふことは天に日月のあるやうなものである。若し「壽量品」がなかつたならば日月のない天である、星ばかりの天である、薄ら闇の夜である、さういふ佛法となる、大王がなく國の統制がつかないやうに、佛法全體の統制がつかない、佛敎の全體は勝手なことを説いてあつて、それを一つにまとめることが出来ないものになるであらう、或は人間に精神のないやうなものである『人ニ神ノナカラシゴト』

シ」斯ういふ風にいはれて居るのであります、即ち「壽量品」そのものは別頭佛敎の根本本典であつて、他のあらゆる經文の佛敎とは違つた經典なのである、斯ういふことが天台大師、傳敎大師、日蓮聖人の三大聖師によつて宣言せられて居るのであります。

であるに拘らず日本の叡山ではこれを忘れてしまつた、「壽量品」が其のやうに大切な經である、本佛といふものを示されたことは、佛敎の根本を示されたことだといふことを忘れてしまつた、其の爲めに「法華經」と諸經との價値を混淆して、そして歸着に迷つてしまつた、佛敎の歸着に迷つてしまつた、その結果、法然上人の念佛や、道元禪師の禪宗やら、親鸞聖人の念佛といふやうなものが起つたのであります、それから又叡山では天台佛法に慧心・檀那の兩流といふのがありました、叡山は恰度古に於ける佛敎大學のやうなものです、日本に於ける各宗の元祖は眞言宗を除くの外皆叡山から祖師が出て居ます、其の叡山には傳敎大師の天台宗について二つの流れがあつた、その一つの流れである慧心流の元祖は慧心院源信で檀那流の元祖は檀那院覺運です、これは何方も偉い人であつたのですが、二人共「壽量品」が佛敎の統一原理である、根本聖典であることを忘れてしまつた、慧心院源信は其の爲めに法然上人や親鸞聖人の念佛の元祖になつた、それから覺運といふ人は「念佛寶號」といふ書を作つて、お釋迦様にも五百聖點のお釋迦様があると共に、阿彌陀様にも久遠の阿彌陀様がある、十劫正覺の阿彌陀様よりも久遠の阿彌陀様の方が有がたい、それがあらゆる佛法の元縮であるといふので、此の阿彌陀様のことを覺運といふ人は、「顯密の教主」といつて居ます、顯密といふのは其の頃の佛法の全體をばいつたものです、阿彌陀様は顯教密敎の教主で、佛敎の元縮であ

る、斯ういふことを覺運といふ人はいつた、親鸞聖人はこれを眞似て其の流れを受けて、五百聖點久遠の彌陀といひ久遠實成阿彌陀本願寺といふのをその徒が造つた、あの本願寺といふのはタダ本願寺ではない、久遠實成阿彌陀本願寺といふのです、此の久遠實成といふことは檀那流から來た。

それから慧心院源信は「往生要集」を作つて、どうも佛敎は廣い又深い、顯密の教法——顯といふのは天台宗、密といふのは眞言宗——主として天台や眞言の教理といふものはなかく深い、それから修行するのに難しい、それだから我々には到底合はない、一ばん易しく誰でも出來るのは南無阿彌陀佛と唱へることである、これならば誰でも出來る、だから南無阿彌陀佛が一ばん有難いといつて、此の人も矢ッ張り阿彌陀様になつた、但し此の源信といふ人は四十三歳の時分にさういふことを書いた本を作つたが、それから十八年ほど南無阿彌陀佛を行じて、行じた結果六十一歳の時に、南無阿彌陀佛を唱へつゝ豁然として覺つた、その覺つたのは何の覺りを開いたかといふと、「法華經」の覺りを開いた、そしてはじめて一念三千といふ「法華經」の覺りを開いて、これが本當の佛法だと思ひ出した、さういふことをば源信自ら六十一歳になつて書いた、それから四五年たつて更に「一乘要決」を書いて、「法華經」が佛法の歸着であることを書いた。

そんな風に天台大師、それを受けた傳敎大師は、此の「如來壽量品」を佛法の本典と見られたのでありますけれども、叡山はそんな風になつて行きました、そこへ出られたのが日蓮聖人であり、日蓮聖人は恰度慧心流の流れの名匠俊範といふ人に天台の學問を受けられた、それは蓮長法師として受けられた。以上は此の「壽量品」をば佛敎の本典である、別頭佛敎の根本本典であるといふことを主張されたのは、天台大師、傳敎大師、日蓮聖人であつて、

これが法華正統の系圖なのであります、そこで日蓮聖人は三國四師といはれました、印度の釋尊と、支那の天台、日本傳教、それに御自身——印度、支那、日本に四人の佛敎を教へた人、聞いた人及びそれを傳へた人がある、此の四人が本當の佛敎を傳々相續して來たものである、さういふことを申されて居るのであります。

以上は三國四師によりまして、此の「壽量品」を中心にした諸師、その系圖を申上げました、更にこれを廣く佛敎の、今日の如く各宗が出來ました、其の出來てまゐりました三千年、乃至二千五百年の間の歴史から考へて、その間「壽量品」といふものは、各宗の人師方がどんな風に見てゐたものであるか、斯ういふことを考へて見ます。

先づ第一に原始佛敎と今いつてゐますもの——これまでの小乘佛敎なのであります、其の原始佛敎で申しますると、佛は釋尊の外はない、この娑婆世界の成劫といふ時の、その第九の滅の時、そこには釋尊の外佛はない、それよりすつと以前には過去七佛といふ佛はあるが、今は釋尊以外に佛はない、同じ覺りに入つた人も——それは菩薩行といふものを長い間やつて來て、一切衆生を救ふために覺つたのでない、それは聲聞緣覺で阿羅漢様の覺り以上には行かないものである、斯ういふ風にいつて居つて、原始佛敎では佛は釋尊一人、それがだん／＼發展して、今で申すと發展佛敎といふが、昔の語でいへば大乘——この大乘佛敎で申しますると、佛は此の娑婆世界だけに居られるのではない、十方の世界に佛様がおいでになる、十方世界に悉く佛はまします、そして十方世界の佛陀は各別である、其の十方の世界といふものは何うして出來上つたものであるか、斯ういへば此の佛陀が菩薩であつた時に、おの／＼別々に菩薩としての誓願を立てられた、それはどういふ衆生を集め、そして自分はどんな理想の世界を造らうと、さういつ

た誓願、即ち理想をいだいた、そして誓願が成就した、即ち理想が成就し、誓願が成就して、其處に國土といふものが出來た、それが佛の國土です、ですから十方に佛様があると、其の十方の佛様は、皆どういふ世界を造つて、どういふ衆生を救はうといふ誓願から、これらの佛の國が出來た、だから皆特色があります、藥師様は十二の大願を立てて、其の願の成就によつて造つた國がある、阿彌陀様であるならば四十八願を立て、その願の成就によつて造つた國がある、といふやうな鹽梅に、皆十方世界は佛皆各別であつて、その佛には各々特色があります、即ち十方世界の諸佛の特色といふものがあります、さういふことを大乘佛敎は教へて居るのであります。

然しながら、それらの佛の澤山の實在を説いて居るけれども、結局は、此の十方世界の諸佛の中、その中心は矢張り釋尊にとるのであります、「金光明經」などといふお經などでは、矢張り其の中心を釋尊にとつたがあるのであります、それと同時に又往生を主にして説いた教、その往生の諸經の中では阿彌陀佛を中心に説いたのもあります、それらの十方の佛を説き、其の十方の佛の中、或は菩薩道を修行して、其の佛の國を得たといふところでは、さまざまの佛様があるけれども、結局釋尊を中心としてゐる、何故釋尊を中心とするか、斯ういひますと、お釋迦様の特色は外の佛様と違つてゐる、どんな風に違つて居るかといふと、外の佛様は或る理想を立て、その理想は美しい善いことばかりの理想で、その理想の世界に其の理想を願つて來る者を寄せる、ところが釋尊は、それらの理想に儼がない衆生、無理想の人間——此の無理想の人間は理想の世界から皆残されたものです、それを捨て、おいたならば無理想な人間の行く所がなくなる、始終惡道に居らなければならぬ、釋尊はその十方の諸佛の理想に如ふことの出來ない人間、十方の諸佛から残された者、その残された無理想の人間を救つてやる、その人間の集まつたものが此の娑



娑婆世界です、向上心が餘りない無理想の人間、少々向上心があり理想を立てたかと思ふと、なかなか難かしいからと止めてしまふすぐ轉向する、やツてみて難かしいとすぐ轉向する、轉向々々また轉向、どうなるかわからない、さういふのが娑婆世界の衆生です、其の轉向々々何處へ行くかわからない人間、十方の佛土から掃き出された人間、さういふ者を救ふてやる、それが釋尊の慈悲の最も優れたところであります、さういふ意味から釋尊の慈悲を、諸佛の中の最勝の位地とする、それから理想の方では、阿彌陀様が善いこと、勝れたことを考へた、此の方は又その方での中心になつてゐます、そして其の有がたづくめの方は阿彌陀様、もう芥溜のやうで仕方ない人間はお釋迦様が引き受けた、一ばんヤクザな奴はお釋迦様が引き受ける、何でも有難いところのほしいものは阿彌陀様が引き受ける、さういふ風に、十方の佛様を説かれたところはそんなのであります、それに對して又大乗の中には

『諸法空の般若』

といふことを説かれた、一切無差別だ、阿彌陀様の善いこと勝れたことも、いけない者をみんな引き受けるといふ釋尊とは、違つてゐるやうだが、若し其の阿彌陀様の覺りの心、釋尊の覺りの心、その心からいつたならば、みんなこれは諸法は一切空だといふ、般若といふのは智慧といふことです、一切空だといふ其の無差別平等のもので凝滞しない、ものに拘泥しない、恰度水が常に流れてゐる、流れなかつたら汚なくなる、西洋の哲學者は、一切の世は流るといつたが、一切のものは無常で、無常は又一つの空に相違ないので、無常といひ常といふも、結局何かきまつたことを考へるのは、悉くそれは偏曲して居る、常であらうが無常であらうが、そんなものを超越して一切の諸法は空である、此の諸法といふ中には、無常といふことも常といふことも這入つてゐる、普通の小乗では無常だから空だと

いふが、常でも空だ無常でも常でも空だ、無常はやがてなくなるものだから空だ、これは早くいふと、折空といつて、物を分析すると空になる、理窟から考へるといろ／＼に變る、變るのは本體がないからである、ところが常の空を體空といふ、常住にあるものでもそれは空だ、斯う見て諸法空の智慧——さういふものを説かれた。般若の教といふものをば佛がそんな風に説かれました。

穢いものをみんな此方に引き取つてやらうといふことも、又あらゆる善いことばかりを集めて極樂世界を立てたといふやうな事柄も、どちらも本當はさういふ穢いことにも綺麗なことにも、何方にも超越して居るからで、超越して居るからそれが出来るので、超越するのは諸法空の般若の智慧によるのであるといふので、其の般若の智慧を説いた澤山のお經があります。

それから又廬舍那佛身を説かれた、一切空だといふならば、空では何にもないではないか、それはいろ／＼な偏つた相對的事柄は何もないけれども、さういふ迷ひを拂つた後の悟りの方には、悟りの世界——これは佛の内容だ、佛の大覺の悟りの内容だ、その悟りの内容からいふと、華藏世界——此の世界、法界は一大蓮華である、一大蓮華藏の世界、その澤山の無量の蓮華その葉の一々にも十方の世界の相がみんな這入つて居るのだ、宇宙のあらゆる部分々々のものには、宇宙の全體を集めた程の功德が皆這入つて居るのだ、海の一滴の水の中にも、大海の全體の功德は這入つて居る、さういふやうに、廬舍那佛の内容はそんなものだ、阿彌陀様の世界なんてものは、これを華藏世界から考へたならば、殆ど比較にならない、百千萬億不可計分の一にも足らぬものだといふことを、「華嚴經」に説いてあります、そんな世界が本當に佛様の境界だ、そんな風に説いたお經が「華嚴經」であります。

それから更に又「法華經」の壽量品の如くに、さういふ華藏世界の佛様——宇宙法界が其のまゝ佛の大覺の身體だ、それから更にさういふ一つの宇宙法界が大覺の内容だ、その大覺は一體何時の大覺だ、十方の佛と其の盧舍那佛とはどんな關係だ、さういふ時分に、此の「法華經」の如來壽量品の佛様が又ある、これは後で話しますが、それから更に又大日如來のことを説いた密部の諸經、大日如來を中央にして多くの佛様が其の流出となつて、大日如來から開發して來るのだ、そんな風なことを説いたお經も澤山あつて、釋尊の後に印度で行はれました。

そこで、それらの澤山のお經が行はれた中、印度では偉い菩薩、——印度では澤山の菩薩がありますが、——二人の菩薩が印度のあらゆる菩薩の代表者なのです、それは龍樹菩薩と天親菩薩であります、龍樹菩薩といふのは八宗の高祖といひます、佛教には澤山の宗門があるが、その宗門は日本では八つあります、その八宗は皆龍樹菩薩を祖師にして居るといふのでこれを八宗の高祖といひます、天親菩薩は千部の論師といひます、どう千部の論師だといふと、此の人は小乗と大乘と兩方をやりました、最初は小乗の方に居つて外道とたゝかひ、大乘にも反對しましたが、小乗で五百部の論を作り、後に大乘を講じたのを悔いて、大乘で又五百部の論を作つたので、千部の論師といひます、龍樹菩薩は八宗の高祖、天親菩薩は千部の論師、印度の菩薩方では、此の龍樹菩薩・天親菩薩の二人を代表者とします。龍樹菩薩はそれではどんな風に此の「如來壽量品」について考へられたか、斯う考へますと、此の龍樹菩薩といふ方はどういふ佛教をお弘めになつたかといふと、此の方は「大品般若經」——先刻申しました諸法空といふ「般若經」をお弘めになつた、そして「大智度論」といふ千卷の論を書かれた、唯今支那、日本には、羅什三藏により、千

卷をば百卷にちぢめて翻譯されてゐます、その百卷はあらゆる佛教のことがみんな這入つて居るといふので、佛教の百科全書だといはれてゐる位です。

その龍樹菩薩の千卷の「大智度論」の中、百卷だけに大綱を縮めて翻譯された、それでは龍樹菩薩は「般若經」だけを弘められたのであるかと、斯う申しますと、「般若經」だけを弘められたのではない、龍樹菩薩は龍宮に行つて「華嚴經」を傳へたといはれて居るので、「華嚴經」もまた龍樹菩薩が弘められた、だから龍樹菩薩は般若と華嚴の兩方を傳へた人です。

般若といふ方は一切の迷を拂つてしまふ、遺蕩といつて、理窟の迷も感情の迷も、あらゆる迷を拂ふのが「般若經」です、華嚴といふのは其の迷を拂はれた悟の心にさまざまの功德があらはれる、そのさまざまの功德があらはれたのが華嚴です、其の功德からいふと此の世界全體は一大清淨の蓮華である、これを蓮華藏世界といひます、で般若と華嚴と兩方を説いたのが龍樹菩薩であります、そしてその華嚴に對しては「十住毘婆娑論」といふのを書いて居り、般若に對しては「大智度論」を書いて居ります。

般若——大智度論

華嚴——十住毘婆娑論

斯う二つ説かれた、ところが其の中でどういふことをいつて居られるかと、斯う申しますと、此の「大智度論」の方に、佛教の百科全書であるから、「法華經」のこと及び一切の大乗經のことをば矢張説かれてゐます、どんな風に説かれたかといふと、斯んな風に説かれてゐます、「法華經」は二乗作佛——阿羅漢様をば、聲聞乘・緣覺乘の二乗とい

ふ——その阿羅漢様を佛にしてしまふ、これは一切の經では出来ないことだ、「般若經」では出来ない、「法華經」は佛の祕密の經である、二乗作佛を説いたのは法華が祕密の經であつて、諸經にすぐれたところだ、「般若經」は祕密ではない、法華は祕密にして般若は祕密に非すと、自ら般若を弘めたに拘らず、般若は祕密ではない、法華の方が本當の祕密の教である、般若のことは菩薩で議論出来るが、法華に至つては最早菩薩の智慧では知ることが出来ないのである、さういふことを法の上から説かれました。

それから又、今度は更に佛の上で、佛に二つの佛様がある、所謂隨世間身即ち生身を示すのと、法性生身とて法の上の生身とがある、人間の身體を以て人間の世界に出て来る佛様、その隨世間身の佛は、二乗とそれから文殊や彌勒等の菩薩を眷屬として居る佛様で、法性生身の佛は例をあげると又二つある、その一つは「華嚴經」のやうな佛様である、一つは「法華經」の涌出壽量の兩品に示された佛様である、斯う説いて居る、若し法にしたならば法華のみが一切の經の中で、阿羅漢様を成佛せしめる、阿羅漢様は外の經ではどうすることも出来ない、「般若經」は佛の智慧を説くお經であるが、二乗といふものは心を空に入れてしまつたのであるから、これに智慧——般若を與へ、そして菩薩の修行をさすことが出来ないのである、「華嚴經」も阿羅漢を成佛させることはできないのである、然るに「法華經」は此の二乗を佛にすることが出来る、その點に於いて「法華經」は祕密の經である、また佛には生身の佛と法身の佛とあるが、法身の佛の中「華嚴經」と「法華經」の壽量品とあるが、何方が深く大きい佛身かといふと、どうしても「法華經」の涌出壽量の方が眞に高いものを説いたのである、といふことを龍樹菩薩が「大論」にいつて居る、それによると、これを法に約しても佛に約しても、龍樹菩薩は「法華經」をば佛教究竟の本典であるといふことを示され

たものと認めなければならぬのです。

それから天親菩薩は、これは小乗と大乘と兩方を弘められたが、大乘中、天親菩薩は「般若經」の大乘と違ふ瑜伽といふ大乘を弘められた、そして「攝大乘論釋」といふのを書いて、大乘のあらゆる道理を説いた、「攝大乘論」は無著菩薩といふ天親菩薩の兄に當る方が説いて居られる、それを解釋されたものでありますが、此の「攝大乘論」の方の教では、ちよつと見ると、二乗は佛にならないといふことをば説いて居るやうに見える、二乗不作佛——菩薩の教を専ら説いたのでありまして、二乗は佛にならない、斯ういふことを説いて居るかのやうである、それに對して、天親菩薩は「攝大乘論釋」、その眞諦三藏譯に依るときは、矢ツ張り二乗が佛になるといふこと、その方が本當なのでとて、二乗作佛の方を肯定せられた、それから又天親菩薩には「往生論」といふのがある、此の「往生論」は釋尊中心に對して阿彌陀中心を説いた、此の阿彌陀中心を説いたのが「往生論」である、盡十方無礙光如來——盡十方に功德の光を出して、悉く徹底するといふ阿彌陀様である、だから信賴するのであるといふことを説いてあるが、それが佛教無上の教義だといはない。然るに他に「法華論」と「佛性論」と二つを説かれて居るが、此の中の「佛性論」によると、あらゆる三世十方の佛は最後に「法華經」を説くものである、「法華經」によつて佛様は眞の佛教の本質を明かにするものであるといふことを、此の「佛性論」でいはれて居る、それより以前の教は皆「法華經」を説く前の方便に過ぎないとも示されてゐます。

それから「法華論」にまわりましては、十無上といふものを説き、「法華經」には外の佛教にはないところの十の無上の教がある、その中一ばん大切なことが二つある、又或は三つある、二つと申しますると、一つは種子無上といひ

一つは成大菩提無上といふ、それからもう一つ加へるならば清淨國土無上、十無上の中此の二つ、若しくは三つの「法華經」に勝れたものがある、種子無上はどういふことだといふと、此の「法華經」を衆生に與へたならば、佛にならぬといふ二乗の如きものでも、必ず佛になる、それは佛の種子なのだ、「法華經」は即ち佛の種子なのである、此の佛の種子である點に於て「法華經」は諸經にすぐれた無上の價値を有つて居るのだ、それから成大菩提無上といふのは、「壽量品」に於いて佛がはじめて佛敎の最大歸着の佛身を實現した、従つて「法華經」の種子といふのはどういふことだといふと、此の「如來壽量品」の大菩提を成就した佛様の心なのである、その佛様の覺りを妙法蓮華經といふ敎の中に託して、一切衆生を佛にする種子にせられたのである、それから清淨國土無上といふのは、此の成大菩提無上の久遠の釋尊、此の久遠の釋尊の居らるゝ所が本當の清淨國土なのである。

大體いひますると、さういふことを説かれたのが天親菩薩なのであります、天親菩薩は一面に於て小乗と瑜伽の大乘を説かれたけれども、瑜伽の大乘の中に於て、普通は二乗は佛にならないといふのをば、天親菩薩は二乗が佛になるといふことを説かれました、それから他力に於いては往生、自力に於いては法華を説かれたけれども、結局あらゆる佛は、最後必ず「法華經」を説くのである、そして其の「法華經」には十の無上の法門があつて、種子無上・成大菩提無上・清淨國土無上の三つのものを説かれて居る、その中心たるものは、成大菩提無上の壽量品の佛である、此の壽量品の佛の資格についても、大切なことがあるのであります、これはもう少し先の方で話します。

これが印度におきまして、八宗の高祖、千部の論師といはれた龍樹・天親の佛敎に對する觀方なのであります、これから申し申しても矢張り「法華經」、特に「如來壽量品」を中心にすることは、自ら現はれて居ります、龍樹菩薩の方でも天親菩薩の方でも、それが現はれてゐます。

それから更に又支那に來たらどんな風になつたか、支那佛敎を考へますと、後漢の時代から三國時代を經、六朝といふ時代に盛んであつた、はじめは翻譯ばかりして居つたが、六朝の時代に佛敎は支那で發達して來た、支那のもので出來た、その支那のもので出來た時に系統が二つあります、最初「華嚴經」が一ばんすぐれた佛の覺りを示したものだ、そして佛様の最後のおさまりは「涅槃經」になるのである、「華嚴經」は佛の覺りの内容功德を示したもので、最後佛敎の攝まりは、「涅槃經」の常住の佛は法身であつて、眞理の身になつて、恒に常住してゐらつしやる、法身常住である、眞理の身は常住である、そんな風に考へました系統と、それから般若・法華系——般若は龍樹菩薩の系統ですが、法華の系統は何かといひますと、般若經の延長と見て、「般若經」と「法華經」と此の二つを中心とする系統で、

華嚴・涅槃系  
般若・法華系

斯う二つの流れがあります、「華嚴經」は佛の功德——佛の智慧とはいひますが、寧ろ佛の功德です、そして「涅槃經」に至つては法身の常住といふ、佛は眞理の身で常住して居るのだと斯ういふ、三論即ち般若は畢竟空の智慧をいひ、更に法華に至つて、佛の實智といふものを説いたとする、斯ういふ二つの系統が六朝の時代にありました。

それから天台智者大師に到りまして、華嚴も涅槃も般若も統一してしまひ、法華最第一の法華宗を建てられたので